――千日の祈願にござりまする。

と、御傍らに侍りました、人々は、みな、顔にお袖をあてられて、さめざめとなされ、武邊一圖の某もそれに誘はれて、涙の玉が、はらはらと落ちて、恥しうもござつたが、

――日ノ本の、神の國も末かと嘆きつるに、よくぞ致しくれしよ、千日と、數へる日數は、二年あまり、三年にもおよぶに。

と、全く、勿體なくも、勿體なくも、御袖も露けく拜しまゐらせたのでござりまいた。そして天の下のものは、草の葉にいたるまで、君の御心のまゝになるべきものを當座のお授けものにも事缺く御有様とて、

――嬉しう思へばとて、取らするものとてもない。千日の名を賜ふは、嬉しき志を忘れぬゆゑぞ。

と、下し賜はつた名でござる。それゆゑ、それゆゑ、この尼は、思ひ立ちしことは、必ず、いたし遂げようと心得まする。」

「尊き御名もあるものかな。」と、日運は珠數の手に、押頂くやうにして、「日運に、ちなみおはすも奇しきことぞ。阿佛御坊も、今より日得と名乘られ、法華經に歸依し奉り、一乘法華の行者となり、上皇の御菩提を御祈念あられよ。」

「某、頑固なれど、一念發起、法華の行者となるからは、やはか、尼におとり申さうぞ。上人

水晶の御眼にて御覽ぜられよ、某とても懈怠なく上人に御奉仕つかまつる。上人に御仕へ申すことは、法華經につかへ申すことにてあり、それはまた、佛祖釋迦牟尼佛に、おんつかへ申すこととなる。まことに、忝けなく有難きことにて候。」

入道は、一言を語り終るごとに、ホクホクと欣喜して、妙法蓮華經、妙法蓮華經と、題目をするのであつた。

千日尼は、上人師弟が、揃つて、わが方をむいて、珠數の手を合はされたので、面目にもあり勿體なくもおもはれて、背を丸めてゐたが、

「この御難儀、何時まで續きますことでござりませうぞ。日ノ本にただ御一人の正法の御行者、いつまで尼等のものにして、この島に御止まらせを頂けませうぞ。やがては、鎌倉への御歸りは知れてをりまする。ぢやが、千日尼は、日得御坊と二人して、佐渡の島の者へ、法華經の有難さを、命終るまで、說き明すでござりませう。」

と、青年僧たちにむかつて、「老い痴れたる、入道と尼、お前さまがたは、孫や子のお年ごろなれど、この身たちを、法妹とも法弟ともおぼして、明夜から、御經ををしへてくださりませ。」

「わたくしの胸は、ドキドキいたしてをります。」と、日向は、いつもの率直さで、

「師の御坊を、どうぞお飢ゑさせ申さないで下さりませ。入道殿と尼御前が現れたので、わたくしたちは、此處を御使ひで、出てゆきますのに、なんとも申されぬ安心がござります。」

「大船に乘つたとでも申さうか、磐石の岩の上にあると申さうか――千日の日數を、風雪はげしきこの島根の磯で、潮垢離をおとりなされるとは、壯夫でも出來ぬ、意志の强さ――」

と、日頂は、わが心に言ひきかすやうに、

「この敎へは、わたくしの肝に浸みわたる、有難い實行力の敎訓でござります。」

「まづたくもつて、この尼御前に、入道の御後見あれば、島人をかたらふ念佛者らが、いかやうの迫害を試みようとも、御師を、御守り申すに千人力である。」

と、日興も賴母しげに、尼と入道に語りかけて、

「法華經に、はじめて女人成佛のことのある由を、先刻も申しましたが、法華經を信ずる女人の信仰は、まことにめでたきものでござつて、良人の信仰に勝るとも劣りませぬ。」

「富木の尼御前も、千日尼どのの御物語をきかせましたなら、上人の御難儀をたすくる、菩薩の御再生であらうとも、申されるでござりませう。」

と日向は、必ず、師の御使ひにいつても、なにしに立歸つたぞと、叱られるであらうをり、千日尼のことを土產に話したならば、驚喜するであらうと、それをいふのだつた。

月影の片むくまで、暫時の別れも、暇を告げがたくして、入道と尼は、さま〴〵の物語りをしてゐたが、

「おゝ、雪明りではない、もう、やんがて東雲ぢや。歸つて、今宵の支度をしようぞ。」

と、入道は、今宵來ることの樂しさを、辭去する前から思ひうかべてゐるのだつた。

土民と土僧

ある日、本間の館の下人部屋へ、吹雪と共に飛び込んで來た下司女がある。

「殿に逢はせてくだされ。」と、最初は頭を、土間に摺りつけて願つてゐたが、

「さがれ、さがれ、その方どもが、館の殿の御前で、人間並の口をきかれるか。氣が狂ふたのだな。」

「さういはいで、どうぞ、殿に逢はせてくだされ。」

「必定、何の用なのぢや。下がれ、さがれ。下賤の身で罷り出て、見苦しいぞ。」

下人共が、敷居のきはにあげた下司女の頭を、足蹴にしたので、女も負けずに、キンキン聲になつて、

「これ、奴僕たち、お主どもも、人間並でないことにおいたら、わし等と、すこしも違ひはせぬに――わしの生んだ子は、狗ンの子よりも酷うされて、館の爲に働き死したをり、殿の仰せぢやといふを、奴等、取り次いだを覺えてゐるか。」

「この女、賴むことあらば、賴むやうに願ひはせいで、さまざまな雜言吐す。こやつがこやつが

――」

下僕は、竹箒や棒千切れをもつて、下司女を、殴つたり、蹴つたりして、はては外へ引出して投げとばした。

「腕を折りをつたな――おのれ足を挫きをつたな、殺せ、殺せ――」と、降雪を衄に染めて、倒れたまま泣き罵つてゐた下司女は、「おおさうぢや。」と、體を、板戸にドカン、ドカンと、ぶつけて、「やい聽けよ、下僕ら。」と喚く。

「殿に逢ひたいいふたは、この殿の内君のいはしやるには、さいふ、下司に生れついたのも、先生の報いぢやほどに、念佛申せ、一向に念佛せば、よい目を見るといはれたさうな。よいか――きけや。」

彼女は、戸内の下僕たちが、群集つて、耳を戸につけゐるのを知つて、中の者がブツブツいふと、ドカンと體をぶつけては、そこらあたりの積雪を、眞つ赤にして罵る。

「ぢやによつて、わしは、念佛ばかり稱へて、こなたの殿を怨まぬことにしてゐる。それぢやのに、念佛をとなへると、無間地獄へ墮ちると嗾れくさる坊主を、何故、そのままおくのかよ。その譯きかさいで、なんで、館の殿ぢや、本間さまといふ、この島一の守護職の御方ぞ。」

下賤の老女は、眼も口もひき破けるほどに開いて、牙のやうな長い、黄な、斑らな齒を剝きだし、短い頭髪を、猪のやうに逆立て、振り亂してゐる。

「おれらは、今生は、獣より劣つた生活をしてをる。この寒さにも、暖かい着るものはおろか、火も焚けねば、溫湯を飲むこともないわ。ただ、ただ、來世の樂しみは、奴の身から逃れて、わが身や、わが子や、わが親のために働きたいのぢや。人間らしうなうて死んで去んだものに、來世では人並に生れかはらせたい爲に念佛するのを、來世でも――未來でまで、この世とおなじ地獄へ墮ちたら、おれらは、おれらは、鬼になつてくれるぞ！　鬼になつて、念佛申せば、極樂に生れると敎へた、館の殿を呪ふてくれる――内方も呪ふてやる。館に火をかけて、うぬら、焦熱地獄の苦しみを、生きながら見せてくれる――」

戸内の者の虚を突いて、ドカンとぶつかると、開き戸が、バタンと開いた。

ワーッと叫ぶ聲の中を潜つて、火屋の竈口の方へと、老女は旋風が捲くやうに通つていつた。

うおーッと喚き叫んで、竈場の火屋へ飛び込んだ媚は、阿修羅のやうになつて狂ひだして來た。

藁束をひつかつぎ、手には燃えさかる薪を振りかざして、炎をなびかし、火の子を散らして駈け廻りながら、「念佛申せば、無間地獄へ墮ちるか！　火の地獄へおちるか！　嘘か、まことか――眞實ならば、おのれら、館の殿も糞も――誰も、彼も、燃え失せろ。」と、吠えるのだつた。

呻吟るのだつた。

家の子どもは、あれよ、あれよと立騒ぎ、葬めくばかりで容易に手をつけることも出來ない。戸に火が燃えつけば戸を、疑に煙が立てば打ちたたいて消すばかりで、下司小屋の羽目に火がつ

いてから、
「あの媼、叩き殺せ。」
「狂人になりをつたぞ。」
「いやいや、天魔が魅入つたのぢや。」
などと、口々に罵りふためくばかりで、媼には近よるものもない。
火の車輪が廻るやうに、ぶん、ぶーんと、媼は四邊の風をうならせて狂ひまはつてゐたが、いまは、頭髪も燃えちゞれ、焔の藁を投げ散らせばとて、その身の襤褸も焦げ焼けて、火の玉のやうになつて、奥殿へと突進する——
館のうちは、たつた一人の狂へる老女のために、右往左往して、女どもは、あれよ、あれよと逃げ廻り、其處此處に火の焦げる匂ひと煙がうづまきたつた。
急をきいて、表の方から、走せつけた侍共、太刀を振りかざすもの、手鎗を打ち振るものら、せまい廊下をひしめいてくると、
「それ、その几帳のかげよ。」
「あれ、そこの襖のうしろよ。」と、逃げ惑ふ女どもに妨げられてゐるうちに、窓の格子の障子が、めらめらと燃え上り、御簾の裾も煙をたててゐるに、「どれが狂人ぢや。」と問へど、もう、人の形體ではなく、燃える炎と同じになつてゐるので、「燃えるものは、皆、庭へ投出せ、投げいだせ。」と老臣が叱がれ聲をふりしぼると、やつと、掃がおちたやうに皆氣がついて、何も、かも火も、煙も、ものといふものゝ焦げたのは、みな引きちぎり運び出して、積雪の庭へと投げ出した。

火氣に燻ぼり、着るものも頭髪も、焦げ失つた媼は、まだ燃えさしの、いぶる薪を握つたまゝ、火傷に血さへ噴きださせて、器物と一緒に雪の中へ投げ出され、大勢に雪と泥を浴せかけられ、半身埋められながら、振り絞りちらして、出ぬやうになつたつぶれ聲でヒイヒイと、
「殿、館の殿！　本間の殿よ、御領主さまよ。わしの伜は、哀れや、あの世で、地獄に生れてをりまするぞや——この、嘘つきの館の殿よ、内方よ、生きてをるうち、あのやうに酷う、こき使はれて死んだ子を、ようも地獄にまで墮して、苦しみをさせるぞ。こなたは——こなたたちは、わしらを、來世は、極樂に生れると嘘ついて、念佛をすゝめただけで、生きてをるうちは、ありつたけ酷う使はしやれた。おれは、おれは——」
媼は、體の火を消すために轉がして、埋められた半身を、むくむくと持ちあげ、
「焚火にもようあたられぬ賤民ぢや、煮たものも與へられぬ奴婢ぢやから、そなたの家の火で、體まで焦がしてくれた。おのれ等を焦がさいで、口惜しや、口惜しや——」
ああん、ああん、泣き喚き終ると、バタリと倒れてしまつた。
出火騒ぎに、額へ、大きな瘤をこしらへた、本間殿の愛妾の機嫌が、いつまでも惡かつた。

女がふくれてゐると、館の殿までが苛つき、それが、家中のものを角目立たせた。
下人たちは、家具調度の破れをつくろふのに、ろくに修理はせず、寄ると觸ると、媼の叫んだことは、道理があるかとか、ないかとか、話しあふやうになつた。
老臣たちは、やつきになつて、下人どもの集まつて話しあふのを、追ッたて廻したが、口さがないものどもは、雜穀部屋の鼠どものやうに、こちよこちよと鼻をつきあはせ、干魚部屋の蠅のやうに、パッと立つてはまたすぐに寄つた。
「おれは、とう〳〵愛妾を見た。見ても、眼がつぶれるやうに勿體くさつてるが、なあんだ、あれは、童のをりには、田草を拐つてゐた娘だ。」
と、ありとある、肥料ばかり搔き廻してゐる役の、奴僕の一人がいふ。
「額に、たんこぶ一ッ出かしたからとて、おれらにも大たんこぶ一ッづつ、つくらせろといふのか?」
「なんでも、大槌で、おれらの頭を、グワンとくらはせるけだ。表、奥のこともよく知るこなたはきかぬか?」と、他の奴僕が名ばかりの、汚れた布袴をはいた男にいふ。
「ばかを言ふな。それよりも、おれら賤民は、よッく考へねばならぬぞ、媼が言ふには、わが子を殿の役に立てまいたがわが子もわしも、火で炙ぶつた食物ひとつ食はぬで、暖かい焚火もとらず、ひび皸の血をたらして、働き倒れに仲を亡くしたが、殿がそのをり、慰めてくだされたこ

とは、念佛いたせと、いはれただけぢやといふのだ。」
「いや、それだけではないわえ。念佛せば、極樂といふ世界へ生れて、殿よりも立派な生活をするぞと言はれたのだ。」
「おゝさうだ、そりやさうだ。念佛となへれば、未來の世界には苦がないから、みんな出世するのだ。その解りきつた、勿體ないほど有難いことを、なんで媼は、あのやうに怒つたのだ。」
「いやいや媼はかういふたのだ。」
すこし分別のある、奥、表のことにも使はれるといふよごれた布袴男は、
「媼はな、念佛いたせば、非業に死んだ伜も、よいところへ行つてをらうし、わが身も、明日が日死んでもな、今生で、嫌な、いやな思ひをしたかはりに、來世では、實に、よい生活が出來るとおもひをつたで、念佛ばかり申して、何もかも諦めてをつたのぢや。よいか、ここだぞよ。それは、媼ばかりではをりないの、われ等、みな、おなじことぢや。」
「さうとも、さうとも、われ等ばかりではない、島の者ら、みなさう思つとる。」
「なむあみだぶつ——と、これだけで濟んで、こんな厭はしい、このまあ、汚ならしい、このまあ惨めな生れから、とんと、代るのぢやからの、念佛は有難い——なむあみだぶつ。南無阿彌陀佛。」
「ちやが、そこだ。近ごろ、念佛無間とかいふてな、念佛宗のものは、無間地獄へおつるといふ

宗旨があつて――」
「ああ、日蓮か！　あやつの業か？　それでわかつたぞ。」
「おゝさうか、あやつの妖術で、媼は氣狂ひになりをつたか？」
「おそろしやな、徒事でないと思ふたら、惡僧の幻術か？　なりやこそ、媼め、火の玉のやうに狂ひをつて、凄かつたが、あれが夜叉といふのかな。」
奴僕と賤民とは、わやわやと、日蓮を罵しつた。
「違ふぞ、違ふぞ、媼の本心はな、おのれらが、かやうに、着るものも着いで、食ふものも食はいで、生きて、死んで――念佛いふたかて、未來とやらが、疑はしくなつたのぢやぞい、やい、みんな！」
と分別男は周圍の顏を見廻した。
頭を集めて、語りあつてゐる下僕たちの上へ、雷が、はためきおちるやうに、ガッと鳴つて、踏み潰さんばかりに、
「こらッ、何をツベコベ申しをるかッ。汝等、打ち寄れば、良からぬ事のみ語りをるぞッ。」
ぐわら〳〵と我鳴りたてた。
「假初めにも、館の表裏のことを、一言でも、外へ洩すことはならぬぞッ。亂心女めがあつたことは兎に角、それにつけ、そのほかのことにつけ、內部のことを、すこしにても洩すにおいては

その方ら、素ッ首はないものと思へ。」
逆髭たて、唇反らし、威たけ高に、
「たださへ、この島の土民、下賤等は、性質捻ぢくれたる漂泊人、流罪の惡徒、蒙昧の夷どもの集りぢや。邊土に生れて、他の土地を存ぜず、殿の有難き事も、魚貝に富み、生活易き樂土であることを知らず、誠に身のほどをわきまへ知らぬ奴らばかりぢや。ことに汝らは――」
彼は、ペキペキと指の節の音をさせて、髀肉に堪へぬふうにして嘆じた。
「館の殿の、優しうなされるに甘へて、ことごとにつけ、目にあまる振舞であるぞッ。萬一、日頃の御恩をおもはず、この度の失態を申し觸らさば、一人づつ、逆しまにして、潮漬けぢやと覺悟せい。」
下僕たちは、霜にあつた草のやうに、へたへたとひれ伏してしまつたが、
「失態と仰せられますと――」と、こはごは、頭も上げず問ふたものがある。
「どやつぢやッ。」と、逆髮は、ドカンと一つ足踏みして、
「左いふことを問ふからして、汝等の分でないぞ。汝らは、何も申すまい。」
「はいはい。」
皆、縮こまつて、早く去れかしと、いとも神妙に答へる。
「何も見るまいぞ。」

「はいはい。」
「汝ら、用のないをりは、下司部屋を出をるまいぞ。」
「はいはい。」
「おゝ、さうぢや。肝心の申付けを忘れてをつた。汝等の不注意で、この度のことは起つたのであるから、その過料として、當分、食事の料は、一日一回分だけ下しおくぞ。」
「なんと仰しやる。」
「屹と、顏をあげたのは、日常、尤も溫順な奴僕だつた。
「それは、何の咎でござりまするぞ。」
「この度の過失は、うぬどもの麁相からではないか。」
「麁相とおつしやりますと——」と、分りかねたやうに訊きかへした。
「分らぬかッ、汝等は、守るところを守らず、狂人女に、火を付けさせをつたではないか。全體。」
と、彼は、一層聲を張りあげて、威嚇した。
「火屋の役目の者を、重い刑にも處するのだが、ことが、念佛の間違ひである故、奥方さまのおとりなしで、その事は沙汰やみになつたのだぞ。——食事の料がすくないとて、その膨れ面はなんぢや。」
「いいや。」と、かの、溫順な男は、一生懸命に、骸命を跳ねのけるやうに、

「火屋の役目は、わし一人の罪ですむ。それは、わしの番の日ぢや。わしは所刑をうけませう。食ふものを貰へなんだら、餓ゑ死ぬ者は、十人や二十人ではござらぬ。」
溫順なものほど、日頃の鬱憤が發しては强い。正直なものほど、一度いひだしたからには、心が頑くまで後へはひかない。
夏でも、すつかりとは癒りきらない、皺れが、年々おなじやうに口をあいて、血をぽとぽと垂らしつゞけてゐると同樣、奴僕たちには、新しい年も、古い年も、今年も來年もない。何の願ひも希望もない親代々からのただ奴僕といふ生きものなのだ。そして、與へられる代が增えるといふことは、一年に一度どころか、とんと、そんな善いことはないのだ。そのくせ、何かといふと鞭をくれられ、食物を減らされ、蹴られ——そんなことで數が減つても、すぐにまた補充はつけられる。數が減るとは、人間の籍から消えることだが——
そんな、人あつかひも受けぬ者たちに、人間の籍があるのが、甚だ不思議にも思はれるけれど單獨で口を沽してゐるものには、却て人別がなく、無籍ものの場合も多くあるが、一束にして奴等は、お主の財產であるから、數は嚴しい。
本間家の財產目錄、奴婢帳の記帳にも、彼等の價が、時價で換算されて、ずらりと並んでゐるのは、いはずものことであらう。
あの、氣違ひ媼にしたところが、未だ、働かせれば働かせられるものを、火傷でただれて死の

床にゐる。それだけでもだいぶの損耗であるのに、京や鎌倉から、殿が土産に持ちかへつた調度類を、だいなしに焦したり、泥雪まみれにしてしまつたので、その入りあはせを、長く細く、多勢の使用人から絞りあげようと、自分だけの、役目の安全と、褒美をも加算して、その役目の者がはからつたのだ。

「腹は空かせても、働きだけは、ちやんと働かせればよい。」

その考へは、別に新しく工夫されたのではなく、いつて見れば、大なり小なり、何時も用ひられる手なのだつた。

「吐ざいたな、おのれッ。」

舞侍は、奴僕の肩を、ドッと蹴つて、まだ足をむづむづさせながら、

「うぬら、それに代る名案があるか？　あらばいふて見い。」

「さればでござる、ことは、念佛がもとではございませぬか。」

彼は、ぼくんとくぼんだ、細い頸の筋を、ぴくぴくさせて、痩せた肩を張つて、非力でも、ある限りいはうとする、所刑を覚悟した強さで、「あの媼に、念佛をすすめて、非業に死んだ伜めがあの世で、良い生活をしてをるといふふうに、觀念させた人にこそ、罪のもとはござる。」

「なんと申す。この大それた横道者めが――」

毛虫眉を釣り上げて、顔中の筋肉を怒りに動かせた逆舞侍は、やりどころなけに、ドシ〳〵と

兩足を踏んで、「まだ、あるかッ。」と、戰場での喚きと、人間が阿修羅になるぞといふ顔面の見本を示した。

「わたくしも――」と、全身を、青く、堅くして、眼をさへ据ゑた、奴僕は、

「この、生地獄が愁さに、わたくしめも、なむあみだぶつと、念佛をとなへまする。今も、みなに代つて、所刑をうけませうと申したのも、早くその、未來へ行かうの念願からでございますぢやが、心にかゝるのは、媼とおなじことで、あの世でまで、地獄の生活は嫌でございます。」

う、う、と呻吟つたのは、怒號の、やりばのない逆舞で、

「日蓮の糞坊主めッ。いよ〳〵もつて生けおかれぬぞッ。」と歯ぎしりを嚙んで空を睨めた。

「彼の悪僧、よからぬことを申すゆゑに、愚民どもが動揺いたす。怪しからぬ奴ぢや。」

虎舞侍は、吠えるのを止めて、唇を嚙み、眼を反して考へはじめた。

「殿は、なんと仰せられうとも、生かしおけぬ奴ぞ。」

彼は、獨り言を呟いてゐる。

「あしどもも――」

と、老年の、頑なさうな奴隷が、醜い顔をあげて、斜眼を一層上眼にしていふのだつた。

「あしどもは、別に、殿を怨みはいたしませぬ。いんま、この男がいふたやうに、おれら、一人で、罪を着るは嫌でございます。あしは、罪にされるのなら、みんな、おなじやうに一緒なら堪

へます。あしも、あの男とおなじ仕事をしてをるが、所刑になどされてはたまらぬ。食ふもの減らすならば、何時ものやうに盗んで凌ぐまでぢや。館の物品を掠めさへせねば、どつちにも損はないが、悪僧を殺して、この度の責がすむならば、食ふものは減らさいですみませう。」

何時もならば、上司へむかつて、下賤がそんな、口はばつたい事を述べれば、即刻に笞がくるのだ。いや、それよりも、左様な、僭上なことなど、述べられるものでもなく、そんな機會も與へられはしない。彼等が二三人でも集まつて、その上、何か訴へようとすれば、その三人は、ばらばらに離されてしまふ。ばらばらは、時によれば、首と足の別になる事もあれば、離れ〳〵に一層愁い役務につかされることもある。

彼等は、内密で鑛山を持つてゐるものに體を賣り渡されると、穴の中へはいつたきりの、酷い勞役に、ぢきに命をおとしてしまはなければならない。砂金をよなけるものは、水に入り浸しで土を踏んでゐなければならない。だから、彼等は、青瓢簞のやうになつて死んでゆくものを想像すると、何にもいへなかつたのだ。頭を垂れて、首を土に摺りつけてゐるよりほかなかつたのだ。

だが、今日の工合はいさゝか違つてゐる。先刻まで、みんなの頭の上で、あれほど我鳴り立てた雷神が、この、老爺の申すことを、耳に入れたかどうかは分らないが、默つて許しておいてゐる。

けつたいなこともあるものだと奴僕どもは、不思議さうに虎髯侍の顏を、怖々見上げた。ことに、竈掛りの者たちは、ほつとした顏色に甦つてゐる。

「わたくしどものお願ひは——」

所刑をも怖れないといつた、あの溫順さうな男はまだ、ガクガクと顫へてはゐるが、これならばいふ事だけは聞いてもらへると、追訴した。

「わしは、殿に、かやうな事申上げる罪で、血を絞られましても苦しうござりませぬが、どんな苦しみを、この世でいたさうとも、念佛さへいたせば、來世は、この苦艱を逃れるといふ、有難いお宗旨の寄特をお示しくだされまし。念佛を惡う申しますのを、たちどころに懲らしめて下さりませ。すれば、殿の御恩は、忘れず何事も、決して反きはいたしませぬ。」

「さうぢや、さうぢや、腹は空いても堪へるが、我等に、さうした苦しみをさせをる日蓮めを殺せ。」

「念佛で救はれてをる者の仇は、日蓮だ。」

「昨日の出來ごとも、日蓮が呪つたのだ。」

「あの媼の亂心も、悪僧のした業ぢやぞ。」

「おゝ、さうぢや、この儘であつたらば今に、我らは、みな、悪鬼にされるぞ。」

「日蓮を殺せ、日蓮を殺せ。」

「悪僧めを退治ろ！」

蜂の巣を突ツついたやうに、下賤らは、ブンブン、ブンブン、ぐわーと喚きだした。下心ある虎聟侍は、白い眼で、それをたゞ見てゐる——

本間が一門の末にも連なる、喜惣治といふ聟侍は、奴僕や下賤どもが、わや〳〵と沸立つのをじつと見てゐたが、時はよし、といふ風に、「待て、待て、者ども。」と、床几にかはるものはないかと見廻し、鞭を打つ、砧の上に腰をおろして、顎をつき出した。

「汝ら、まッこと、日運を憎むか？　念佛の敵を退治いたいたいか。」

「念佛の敵は、畢竟、わしらの腹の虫の敵でもござりますで、打たいでどういたしませう。」

平日は、何事にも鈍重で、人一倍骨惜みの、その癖食物の事となると、飽くことを知らないで誰が懸けた鼠昆の鼠でも、見付けたらば、たちどころに口へ入れてしまふ、癩のやうな奴隷が唇に食慾を動かして答へた。

「坊主共の頭を、嚙じつてくれろと思ふでござりますが——旦那さま、それは咎にはなりませぬか？」

「いや、左様な、鬼畜の所業は、なしてはならぬ。ぢやが、鎌倉殿にも、再三、彼めは失はうとなされたのぢやが、その都度、不思議あつて助かりをつた、命冥加な賣僧ぢや故、殺したからとて御咎めはあるまいが——」

喜惣治は、毛虫眉をひそめて、「汝らばかりで事をはかると、本間の家の落度になるが——」

「旦那さま、旦那さま、承はりたいは、このことは、眞に咎とはならぬのでござりますか？」

それは、あの溫順な男だつた。他の者は、

「それにしても、減食のことは、どうなるのでござります。食を減らされて、幾日も經つてからでは、あの坊主を、叩き殺すことは出來ませぬ。」

「さうなれば、俺も食ひ殺すわ。」と、他の一人がいふ。

「さうぢや、さうぢや、われらを、餓鬼にしたは、あの惡僧ぢやからなあ。」

「ふむ、ふむ、ふむ。」と、咽び笑つた喜惣治は、計畫が當つたといふ高慢面をして、

「と、いたすと、減食しを、百日もいたいたらば、いかな、妖術を持つ者でも、その方どもが嚙み殺すであらうわ。」と、堪らなさうに、今度は、わッ、わッ、わッ、と、大口開いて笑つた。

「やあ！」

奴僕たちは、目を皿にして、呆れたやうに、

「百日——？」と、顏見合せてゐる。

「おゝ、よいわ。そしたら、俺共、十日と待たずに、鼠のやうに、皆して押寄せてくれる。」

と、食慾旺盛な病者が、呻るやうにいふ。

「いや、いや、それは嘘ぢや。戯れにさう申したまでぢや。では、今度の失態は、日運の呪ひによるところとして、當館にては、汝らに、最も寛大な處置を以て、三日の減食にいたし置きつか

はす。その罰が、不當とあらば、日運を怨まねばならぬわけだ。」
「へい。」
奴僕達は、分つたやうな、分らぬ儘に謹んでお受けをした。
「汝らが、惡僧に報復をいたすのは妨げはいたさぬ。但し、本間殿の館の者ばかりでは、たとへ下賤の者どものみであらうとも、事を起さば、後日のお咎めは重いぞ。他處の者――島民らの煽動によつて汝らも押寄せることはあつても、それは、少しも我らは咎めぬぞ。」
さういひ終ると、喜惣治は歸つて行つた。來た時と違つて、彼は決して不機嫌ではなかつた。

まさに焦熱地獄の苦しみ――火傷の病みに、轉げ廻り、うめき、泣叫ぶ、媼の死の床は、目も當てられぬ有樣だつた。
「おれは、地獄へ墮ちたぞ――あゝ、くるしや、苦しや。切なや。」と、叫び、うう、うう、と呻りながら、呑々と眠りに落ち、その儘長い眠りにつくのかと思ふと、ガバと、跳ね上つて、
「苦しや、熱つや、熱つや――この苦しみは、誰がさせをるぞッ、殿かヤイ、內方かヤイッ。念佛かッ、念佛かッ。」と、身をもがき、鬢の毛を引き拐ると、――燒け爛れた皮膚から、焦け縮れた頭髮は、肉も皮もつけた儘もぎとれてくるのであつた。
「おのれ、われ一人地獄へ行かうか、おのれ――おのれも、おのれも、おのれも――」

骨は現はれ、爪は落ち、血を噴き腫れ上つた手の、殘つた指を鍵のやうに折りまげて、あたりを掻き散らす。
かゝる折、風雪を除けるしるしばかりに、あるといふだけの、垂れ下げた破れ莚の間から覗いてゐるものは、哀れと思つて、末期の水だけなりと與へてやりたいと、見舞ふものではあつたがあまりの恐ろしさに、きやあ、と魂消ッて、逃げ轉がるのであつた。
だが、その呪咀の絕叫さへ、斷れぎれになつて、もはや、命も旦夕に迫り、聲も出ぬやうになつた時、そつと、破れ莚の門口へ、立ち寄つたのは、千日尼だつた。
「いたはしやの、火傷された、媼どのは、この伏屋にをられるか？」
問ふまでもない日頃の穢さと、火傷の壞疽の惡臭が、眞冬の、火の氣もない、土とすれ〳〵の莚敷の、埴生の小屋の內から洩れてくるのだつた。
「おゆるされよ。」
破れ莚をもたげて、小屋の中に入ると、怪我人は、苦しさのあまり着せかけられた藁を跳ねのけて、その上を這ひ廻つたか、泥と血と、膿とが、そこらに點々と附着してゐる。その、獸の巢にも劣つた中から、世を終りかけてゐる媼は、うめいてゐるのだつた。
「おゝ、おゝ、何といふ慘たらしさぞ。苦しからうなう、いたましいことぢや。」
千日尼は、しばし、目を押へてせぐくつてゐたが、水晶の珠數を、病女に頂かせるやうにして

——南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經——

と、靜かに、靜かに稱へると、いづこが目かと分らぬ程、腫れふくれた媼の面から、ポカリと目を開いたやうに思はれたが、すぐまた、おだやかに閉ぢてしまつた。

「お媼どのよ。こなたは、むごい目に逢はしやれたのう。したが、もう、直に、苦しみはなくなりますぞ。わしは、なるべくそなたの傍に居て、何なりと、いひたいことを聽いてやりませう故遠慮してはなりませぬぞ。」

やさしい聲音が耳に入つたのか、媼は涙を流すのに違ひなかつたが、凝固つてゐた血膿が垂れただけだ。

媼は、幽に、うう、う、う、と胸の奥の方で、うめき續けてゐるので、尼は媼の耳に近く口を寄せて、「わしは、こなたが、逢ひたいといやつたといふ、千日尼でござるが——今、よい藥を進ぜるぞよ。」

千日尼は、携へて來た煎藥を、もの優しいとりなしで、媼の、開きかねてゐる唇へ、長い時間かゝつて、少量づゝ〳〵、流し込んでやるのであつた。

——妙法蓮華經、妙法蓮華經——

尼は、煎藥を流し込む一滴ごとに、妙法蓮華經と稱へるのだつたが、病者は、亂心のためか、それとも、もはや、苦しみに負け、今は耳も聞えなくなつたのか、千日尼の手を拂ひのけもせず

罵らうともしない。

千日尼のさうした善行は、何時か、人の目に立つて來た。

賤しい女達の、子に先立たれたり、夫に別れたりした賤女達は、自分達も、何時かは、散る木の葉が、じめ〳〵と朽つて、土になつて行くやうな身の上だと知りきつてゐるので、媼の容體は氣懸りでないことはなかつた。朝夕に見舞つてやりたくも思ひ、出來れば誰か傍らにゐて、看護つてやりたくも思ふのだつた。

だが、それが出來ないのが彼女達だつた。彼女達は、自分たちの夫も伜も、丁度刈田の稻株のやうなものだつたと思つてゐる。出來上つた實は——豐饒な稻の實の收入は、決して働いて、實のらせた者の所得でないやうに、夜の明けぬ前から暮れて、星や月が出るまで、田甫や畑や、野や山や、河や海や、ありとあらゆる勞働に、寸分の隙なく追ひやられ、田甫ならば、田甫の上に自分達の脛から身體中の精力を吸ひつくさせてしまつて、そして稻がよく出來て收納られてしまふと、稻株は、來年の要素に、田甫の土に腐つてしまふのと同じやうに、田甫に立ちつくした人間も、他人の懷を富ます肥料になつて腐つて死んでしまふのだ——と知つてゐる。

——汝もかよ！

——さうぢや、主もかよ！

――さうぢや、わしもぢや！

みんな、顔を見合せると、溜息なぞは、もはや出もしなくなつてゐる輩で、たゞそんな風に、口にも、何にも出さないで、心の底の、何處かで、ぼんやりとではあるが思ひあひ、いたはりあつてゐる。

だから、彼女達は、媼の傍へ寄り、慰めてやりたくもあれば、見るのが怖くもある。何故ならそこに淺ましく、呻吟き轉がつてゐるものは媼ではあるが、自分でもあるやうな氣がするのだ。

ある日、ずつと年老つた一人の女が、念佛でも唱へてやりませうと破れ莚の戸の外へ立つた。

「なんまんだ、なんまんだ、なんまんだ――」

彼女は外に坐つて、背を丸くして唱へてゐた。

と、また一人の寡婦が寄つて來た。背中にあまる枯柴の束を背負つてゐるので、彼女は、ハア〳〵いひながら、

「婆さま、念佛唱へてやらしやるなら、傍へ行つて、聽えるやうに、となへてやらしやれ。」

「さいな、わしもさうしたうは思つとるけど、怖い。」

「なぜ怖い？　化物にはなつてをらぬわな。氣狂ひではあるが、もう、動くことも、口を利くこともようせぬぞや。」

「ぢやがな、死んでゐたらば怖い。わしは嫌ぢや。」

婆は、見るは嫌ぢやと頑固に首を振りながら、なんまいだ、なんまいだ、とブツ〳〵唱へる。

「さうよな、お婆も、やんがて、野山に捨てられる年寄ぢやからよ。――ぢやけど、もうお迎ひさんが來てくれた方が、よからうぞい。あの世へ行けば極樂ぢや。」

婆は、首を振りちぎれるほど振つて、なんまいだ、なんまいだ、なんまいだと繰り返してゐる。

そこへ、忙しい中から、ちよつくら拔けて來たお嫁が、

「どうかしたのかい。」と、寄つて來て、念佛してゐる婆に、「これお婆、このやうな處に居て、館の家來の、目に觸れたら、そなたも投つておかれぬぞよ。早う去ね。去ね。」

と、耳のはたへ口をよせていつた。

と、婆は、邪慳な聲をとがらして、

「なに吐くぞい。わしは、まだ、捨てられるほど、老いさらばへては居やせぬ。これ見い、手も足も、丈夫な故、ここまで來たのではないか。」

「この、とんがり婆めが――」

嫁も慳貪に突ッかゝつていつた。

「さういふ舌吐く下から、塚原へ投げ捨てられぬやうに用心せい。」

「なんで、塚原なぞへ行くかい。あこには、日蓮といふ、恐ろしい法師がをる。本間の殿樣が、民が、可哀さうぢやと仰しやつて、鬼の坊主に間違つても近よらぬやう、逆茂木して、守護さつ

しやるさうぢや。」
「この馬鹿婆の、老耄めが。館の者どもが、そのやうな、間の抜けたことしをるかよ。鬼の坊主ならば、どないな人間かて、食ふてくれるに違ひない。そんならさし當り、ここの氣狂ひ媼を、あこへ投りなげて、食はせてしまふてる筈ではないか。さうせぬのは、どうしたことぢや。」
鼻は、口をくひそらし、むごたらしい程齒糞だらけの齒を剝き出して、罵つた。
「そら、さうだ。」
肩に、柴の荷が、めりこむほど重いのに、この寡婦も、
「ここの、氣狂ひ媼も、念佛のおかげかも知れぬよ。野晒しに捨てられもせいで、まだ、ヒクヒク生きてをるさうぢやが、屋根の下で死ねるちうは、年寄や、病人にも、滅多にないこつちや。」
「なにが、年寄や、病人ぢや。わしら、父ぢやて、亭主ぢやて、伜ぢやて、誰が、屋根の下で死んだぞいやい。これ、こなた、聞いたかよ。」
と、首と一緒に聲もちぢめて、「本間樣は、後生が恐ろしくなつたちう、いふてるさうぢやがな。だから、媼を、放つたらかしておいてくれるのぢやと、いふぞいの。」
「はアれ、ま！　人の首とるのが、あのづれの、働きぢやげいふに――この人が、また何としてぢや。」
柴負ふ寡婦にも解らないが、齒糞の鼻にも、噂を語り傳へても、その意味はやつぱり解らないのだ。
「おれが思ふには、冬瓜が腐つたやうなのは、もぎ取つても、嬉しうなかろ。新しい、青い、はちきつた、蔓のキシヤンとしたのをもぎると、快い心地ぢやろ。だから、戰で、强い人間の首とるのは、面白いのかも知れんぞな。」
變な、拙ない譬へになつて、語る方は、ちよつと後を考へてゐるが、聽く方は、ふむ、ふむと解つても、わからなくても、面白からうが、なからうが、結局、少しの暇を作つて、話合つてゐる。それだけが、何にも代へ難い樂しみなのだ。
「で、なあ、ここの媼は、冬瓜の腐つたのより惡いでなあ――さあ、何ぢやろぞい、なにか似たものがないかなあ。あゝ、さうぢや、こなた、海豚知つとるか？」
「知らん。」
「あゝ、惜しいこつちや。海豚を知つてゐるとなあ！　大きな、こんな丸い胴の魚ぢや。」
鼻は手眞似までして、「よいか、それの、生燒ぢやよ。ここの媼もその通りなのぢや。」
「海豚は、知らぬが、昔、おれ、炭燒の竈の後が溫といと、這込んで寢ての、燒け死んだ爺を見たことがあるが、火ぶれくれになつた大入道の化物ぢやつた。」
「見いよ、見いよ、この中に轉がつてゐる媼もそれぢや。」
鼻が、蓆戸を引きあげると、默々としてゐた念佛の婆は、なんまいだ、なんまいだ、なんまい

だ――と、目を閉ぢて、蝸牛のやうに丸くなつた。

小屋を覗いた、賤女達は、あつと叫んで飛び退いた。

――ありや、りや？

と、いふ不審みの目を見合せ、瞶つて、寡婦と嬶とは、も一度、ソッと、破れ莚の隙間から覗きに行つた。

――ありや、りや？

皿のやうに丸くした目を見合せ、口を開いた儘で、暫くは、自分達の目を疑つてゐたが、いひ合せたやうに忍び足をして、また覗きに行つた。

今度は、ヒョッと隙間へ目を寄せると、跳ね上るやうに吃驚して飛び退き、まん丸くなつてゐる、念佛婆の背を叩いて、此方へ來いと手招ぎした。

「阿彌陀如來ぢやぞい。」

「うんにや、觀音樣たらぢやけな。」

二人は、同じやうに、目が潰れはせぬかと案じた。

彼女達は、媼の小屋に、見なれぬものを見出だした。燒け焦げた媼は、血と膿でなすくり、燻ぶつた物體となつて、轉がつてゐるとばかり思つた目には、何やら、この破れ小屋の中から、めでたい光が射したやうに見えたのだ。普通ならない光景が、目に映つたのだつた。

手招ぎされた婆は、腰が立たぬほど怯えて、這ひ跪行つて來た。

「情ないこつちや、情ないこつちや――」

婆は、裸體で、火の池地獄に叫喚する、媼の後世を目に描いてゐるのだつた。小屋の中は、今こそ終焉の苦しみに、媼がのた打ち廻つてゐるのであらうと想像して、

「なんまんだ、なんまんだ、なんまんだ――」

と、口早にしきりに唱へて、頭の中へ浮んでくる、未來の地獄圖を見まいと、堅くかたく目を閉ぢて、そのために眞ッ暗くなるのを、媼が落ちてゆく死の道だと思ひ、恐怖にふるへてゐる。

「おばば、お婆。」

鼠を狙ふ猫のやうに、莚戸口へ這いよつていつた嬶は、「おばば、おばば。」

と手招きして、「如來樣が、ござらつしやれてる――」

「ほんまぢやよ、白光りで、目が潰れさうぢや。」と、寡婦もいつた。

婆は、びつくりしたあまりに、顎が外れてしまつたので、長い顔になつて、あゝ、あゝ、いふばかりで、大事な時と、焦燥ればあせる程、肝腎なをりに、日頃の念佛が出なくなつてしまつた。

――これは、自分が、極樂へ行けぬ知らせぢや――と、思ふと、悲しさが込みあげて來て、婆は、あゝ、あゝ、と泣き出したが、顎が外れてゐるので、五音が狂つて、獸の唸りより不思議な

泣聲だつた。

と、その時、破れ戸の内から、「外にゐる衆たち、媼どのの臨終ゆゑ、聲かけてやりませい。」と世にも優しく呼ばれた。おづ〳〵と、賤女たちは小屋の中へはいつていつたが、みんな、ぼーッとしてしまつてゐた。穢い藁床は、綺麗にされて、媼は、少しの臭さもなく、洗つた衣類に包まれてゐるし、香といふものと聞かされてゐる、妙なる薫りがして、この小屋の中から、極樂の近いといふことだけを賤女たちは想像するのだつた。

彼女達が、如來様であらうと思つてゐる、慈相の尼は、媼の頭を膝へ乗せて、凝と媼を見守つてやつてゐると、媼は、腫れ爛れた目を見開き、そこに一心をこめ、寸秒づゝ消えてゆく心の灯をともし集めて、いともかすかに、

「南無――」と、糸のやうな聲を出し、つゞけて、すら〳〵と、「――妙法蓮華經――」と、唱へて、すーッと、快よげにねむつた。

「南無妙法蓮華經――」

千日尼がそれに和して、清唱すると、賤女たちも手を合せ、すら〳〵と、妙法蓮華經と唱和するのだつた。

噂のひろまりは、それからだつた。

――千日尼は法華ぢや。

――千日尼は、念佛を捨てたけな。

――あのづれが、塚原の法華坊主に、齋を運んでをるのだといの。

――ぢやから、あの糞坊主、死にをらぬのだ。

――千日尼に聽いて見い。なぜ念佛止めたのか、その譯いへといへ！　女房に念佛やめさせてあの阿佛坊め、何してけつかるか。鼻の下の長い、阿呆入道めが。

その噂の元を撒いてゐるのが、火傷の媼の臨終に行きあつたあの嫁と、寡婦とだつた。

念佛婆は、なんまいだ、なんまいだと三度いへば、一遍は、なんめうほふれんげきやうと、口をもぐもぐ、むつかしさうに動かして、交ぜて唱へるやうになつたのだつた。

――あのやうな、後生の悪さうな媼でさへ、あのお方に抱かれて何の苦しみも忘れて去つた。わしも、あのお方に、お縋り申さにやならぬ身ぢや――

と、思へばこそ、如來様の示現ぢやと勿體ながつたのが、千日尼であつて、妙法蓮華經と唱へたからとて、何の誹議も違背も感じなかつた。たゞ、ありの儘の奇特に、あれが、生佛様といふのであらうと、今は、念佛でも、題目でもなく、千日尼のあの時の慈相を拜み、信仰してゐるのだつた。

中でも第一番に、埴生の小屋の破れ莚から覗き込んで、如來の來迎ぢやと、目を圓にした嫁が齒糞の口臭を振りまいて、休む間もなく噂の口を動かし廻つてゐるのだ――

「やつぱり、あの媼の亂心は、妖しぢやつたのぢや。塚原の惡僧が、幻術を使つたので、館の火は燃えたが、媼めの火傷は嘘ぢやつたのだ。」と、仔細らしくもちかけて、
「この話は、わしばかりが證人ではないのぢやから――」
と、彼女は勿體をつけてからいふのだつた。
「わしらが、あの媼の小屋の前を通るとの、平日は、臭い風が吹くのにの、どうした事か、得ならぬ妙香がするのぢや。のう、けつたいなことではないか！　あの媼が、燒け爛れて、化物のやうになつとつたは、みんな、知つとるけな？」
その前置がすむと、彼女の舌は、急に水の增した、山澤の水車の如く、クル〳〵とよく廻り、風雨の日の風車より、ガラ〳〵騷々しく激しく鳴るのだつた。
それによると、あの亂心媼は、實は靈媒のやうに、物に憑かれたので、ものとは日蓮のわざであつて、役を果した褒美に、極樂へやつてもらふ約束が成立つてゐたのだといふ。
「ぢやから、あの媼、火傷もなんにもしてをらなんだ。」
「そんならえゝぢやないか。」
と、いふ者でもあつたらば、鼻は口から、火焰をも吹きつけかねまじい劍幕になり、
「ええいッ、それが妖術とは知らぬか！　わしらは、現に、たゞの、婆尼を、阿彌陀さまと間違へさせられた程ぢや。それは千日尼たらいふ馬鹿尼で、日蓮の手先になつて、阿彌陀さまに化け

てをる。背から後光が射して、眉間からも、すッと白く、光つたものが出てをつた。その光が、小屋の中から、ピカ〳〵光るで、わしらは、つい拜んでしまうたのぢやが――」
何と殘忍なことに、それが千日尼だつた。この眼を晦まされた怨みは、どうして晴らさうかと狙つてゐたらば、あれら夫婦が塚原通ひをするのを見とゞけた――と、傳へ觸れ廻るのだつた。
「あの尼は、くはせ者ぢや。」と、いふ口で、尼の慈相を拜み、ともに題目をいたしたことは、金輪奈落洩らさぬことにしてゐる――

ある日、朝餉をすましたばかりの、本間重連の前へ、一通の訴狀を老臣が差出した。
六郎左衞門尉重連は、面倒なといはぬばかりに、訴狀と記してある、竪文の表を見下して、
「百姓ども、また、陳狀を差出しをるのか？　また、酒を買らせよと申すのであらう。その儀は鎌倉前執權の定められた掟ぢや。只今の酒商人の數より、增すことは許されぬ。」
「いやいや、左樣ではござらぬ。他の陳狀でござる。」と老臣は、困つた顏をして、
「殿、なんとしても、厄介なものを預かられました。彼の惡僧についてのことでござります。」
重連は、ふと、愛妾の額の瘤のあとが、今朝の寢起きにも、紫ばんだ斑紋を殘してゐて、不愉快であつた印象を、まざまざとさせられて、食べたものが消化しないやうな胸持ちがして、急に不機嫌になつた。

「土民ども、また、姦しいぞか？」
「いや、今度は、寺方のもの共も騒ぎをります。」
「だがなう、寺方の者共の、申し狀ばかりも通されぬぞ。佐渡の國一圓、某が治行ならば、どの寺もおなじことぢやが、寺院によつては寺院の莊園の體にいたいて、他の者も所領もある故、あまり寺方の者の言ひ狀を通し、寺方へ權力を付けをると、年貢の收益に大きな狂ひが出くるぞ。」
と、重連は、寺院からの訴狀であるといふと、まづそれが頭にくるのだつた。
鎌倉幕府の制度が、諸國の武士に――ことに、東國の武士に、所領の安堵を與へ、京都への大番三ケ年を、頼朝の當初に、六ケ月に改めてくれたのからして恩とするのを、前執權の時頼がそれをまた三ケ月に縮めてくれたので、それは、兵士にいたるまで悦んでゐるのだつた。
從つて、所領の安堵といふことが、武士階級に浸みわたつてゐるので、いざ、鎌倉といふときは、諸國の武夫が、さきをあらそつて駈せつける――それも、畢竟は、所領の問題だ。
しかし、日運は、憎まれものであつても、本間六郎左衛門尉には、なんの仇もせず、彼が居ても、本間の所領にさし響くなにものもないのだ。
だが、日運を憎む、他の寺方の方はさうは行かない。念佛行者は、寺方の雜役ならば、辨當持ちでも出かけてゆく。彼等は、口を沾らさせなくて濟む奴隷を持つてゐるのだ。屋根を與へなくてすむ奴婢を持つてゐるのだ。

しかも、寺院の莊田としてあれば、公への貢もののぶが、ずつと低いので、田持や長者は、みんな狡くかまへて、私寺を造るのだ。
本間家でもそれをやつてゐないではない、本間家を檀那とする、一門の寺はあるが、そのほかの寺々の權力の大きくなる事は、知行者地頭としては悦ばしくはないのだ。
「彼等、なんと申すのだ。」
「坊主どもは、日運を殺せと申しをります。」
「人間を救ふ坊主が、おなじ坊主を、殺さうと申すのか？」
「それよりも、この陳狀によれば、けしからぬは、眞野の御陵を御守りいたす、かの、阿佛坊と千日尼とでござる。彼等、いつしか念佛宗を改め、塚原に捨てまいた、あの餓鬼僧のもとへ通ひ夜な夜な、食物を運びゆくと、たしかなる訴人があるのでござる。」
老臣は眉を顰めて、事むづかしげに告げた。
六郎左衛門尉は、大火桶の火を突ッつきながら、寒氣ことに厳しい今日は、早く表の公務を切りあけて、内房の大圍爐裏で溫まりたいものだと、稍面倒げに、「彼の人たちは、高徳のほまれ高き人ぢや。いたづらに、下民どもの申す事を取りあけて、間違うてはならぬぞ。」
彼は、ふと、そのとき、年が明けると、また鎌倉へ行くのだと考へて、樂しかつた。
――人々は、佐渡はよい、佐渡はよいと羨ましがるが、冬の風が吹くと海は荒らび、風雪は雄

叫び、海にかこまれてゐながら、小魚一尾、領主の威光をもつてしても口にすることが出來ぬ荒日が相つゞく。鑛石を掘らせ、砂金を積んで見ても、島では、とんと面白いこともない――

鎌倉は、儉約、質素の觸れが幾たびもつゞいて、堅氣すぎると申しても、實朝卿が京好みであらせられた名殘りは充分にある。白拍子のよいのもをるし、宿々の遊君には名うてなのがあるし――

彼は、おもはず、うふふと、笑みを洩しかけた。金が、だいぶ溜り過ぎたから、京都へも一度上洛したい。京上藏は、こりやまたなにから何までが別ちや――

「殿、殿――よい、御分別がつきましたか？」

これはまた無慙な現實で、額の皺の中に、黑みの見えるほど垢を溜めた老臣が、主の殿の微笑は、溜つた黃金の光と遊君、白拍子のあまたれとを照しあはせて、思はずこぼれ出たのだとは知らずに塚原の日蓮退治と、阿佛坊夫妻の仕置き、對全島、及び越後路にまでかけての寺院の訴訟といふ、いづれの一個條も、この老人の頭では割出しかねる難問題の始末を、ほどよく案じつかれたのであらうと諸共に笑をふくんで、殿の腹案を拜聽いたさうものと、膝を押し進めてゐる。

六郎左衛門尉は、當惑した眼のやりどころに困じて、火胼胝の出來た掌を、裏がへして見たりして眺めながら、

「されば――」と、出もせぬ空咳などしつゝ、

「彼等は、承久の昔、この島に御供いたせしとはいへ、只今では、別に、我等預かりの流人ではないでのう。最早、あの折に、御供奉仕りし人々は、京へ歸つてゐる。彼人らは、自らをられるので、位から申しても、左衛門尉である。」

「いやいや、殿。彼等は果敢なき生活の者でござる。」

「したが、尼御前は、聽えたる高德の人ぢやから――」

六郎左衛門は、どうしても、甘い思ひ出の陶醉から醒めかねるのだつた。火桶の、ぬくぬくとするのもほどよいが、富者のわが儘で、自分の心地よいときに、あまりドッとせぬ、冴えぬ話はききともなかつた。晩は鮪鍋を食ふと言ひつけおいたが――と、

「のう、汝にもとらせたが、今年の新酒は、思ひがけなく芳醇な。とろりとしてをるな。」

「はい。」

老臣は眼をクシャ〳〵させたが、

「殿、喜惣治の思付きで、塚原の法師は、工合よう殺せやうと思ひ申すが――」

「いや、早つてはならぬときかせよ。守の殿の御臺所は、懷姙とある沙汰をきいた。時宗御悅びのをり、出家を殺害しては相ならぬ。何とか、別に、謀計もあるであらう。いますこし生けおけと傳へい。」

「さらば、觸書のごとく、日蓮を扶助するもの、所拂ひのこと、千日尼らに申渡させ、暫く、そ

れにて、他の者の怒をなだめおき申さう。」
と老臣はさがつていつた。

越の消息

竹の折れる音がして、竹むらに積る雪が、積る雪の上へと、ドサッと崩れ落ちると、續いてドドッと雪崩が重なつた。
暇なく降りつむ雪は、青味さへ含んで馴れても、打ち見やる目の痛むばかりだ。
「この吹雪も、今夜はあがるであらうが、明日は降らせたくないものぢやの。」
と、阿佛坊は、軒場を仰ぎやりながら、明日の好晴を祈つた。
「船路には馴れぬ人々であり、ことに、この風雪では、越後路は通へようかの。」
とも、案じてゐる。塚原の青年僧達が、師僧の仰せを受けて、鎌倉へ、または下總へ、甲州へと、それぞれへの消息を持つて鹿島立つことになつてゐるのだつた。
黄昏時に近い空は、鉛色に雲低く、地上の方が、雪あかりに、まだ手許が明るかつた。
千日尼は、せつせと、袋にものを詰めて、今宵の、塚原行を樂しけにしてゐる。持つて行つてすぐに調ぜられるやうに、栗は皮を剝ぎ、柔けてさへあるのだつた。

「岩茸と、大豆と炊いて、栗の粥を溫かうして上げませう。」
さうしたものが、尼達の、心をつくした調理でもあれば、日蓮師弟には、百味の溫食にもまさる美食として、額に押頂いて悦ぶものでもあつた。
「その栗は煮るのかや。」と、阿佛坊も、日々の、尼の調理と、食料調達に、いそいそと手傳つて日毎に、野がけの遊山にでも行くやうに愉快としてゐる。
「栗は、若い人々が好みます故、粥にも入れようと思ひます。」
「さうぢや、さうぢや、腹を溫めてやらぬと、この冬の眞中に、遠旅はつゞかぬ。」
二人は、日向や日頂を、孫のやうにいとしんでゐるのだつた。
「燒米をもたせてやりませい。野に暮れて、人宿を探すそれまででも、ひだるうさへならねば、命は保つぞ。」
そして二人は、互ひの運ぶ分を袋を持ち上げて見て、これは重いといふのだつた。
「ちと、減らさずばなるまいかの。」
「ぢやかて、折角詰めたものでござるに。」と、尼は減らしともなげだつた。
「わしは背負ひきれやうが、この雪の積り方では、そもじには、こりや難儀ぢや。半分にいたいたからとて明日明後日の料はあらうに。」
阿佛坊は、尼の勞苦をしきりにいたはるのだつた。

だが、尼は考へ深げに、「この程の、里人の様子を思へば、出來るだけのものは、早う、運んでおいたがよいと思ひまする。」

出來れば、その方が、どんなによいか知れぬと、阿佛坊もそれは知つてゐる。この庵に住むことも年久しくなつたが、何時追ひやられるか知れぬとの覺悟は、もとよりいたしてゐる。庵にある食料の貯へだけを、尼が、早く運んでしまはうとしてゐるのも知りきつてゐる。

だが、この降積む、凍りの雪路を、夜をかけて、二里にもあまる山野を、尼が息を切らせて運んで行く姿を思ふと、いた〳〵しくて答へかねるのであつた。

と、吹き寄せる雪に埋もれた門の戸を、ほと〳〵と叩くものがあつた。

「裏山の雪崩が、今日はひどいのう。」

少しばかり耳の遠くなつてゐる阿佛坊は、年の古り積りしわが身を憎みながらいつた。老いたる妻に、かくばかりのものを分けずとも、わが背にみな積みのせ得たものをと——

門の戸は、また、ほと〳〵と叩かれた。

扉をうち叩く音に、ふと、千日尼は耳をとめて、

「さてもまあ、折悪しいことぢや。このやうな折に、誰がたづねておはしたか。」

澁い顔などは、何時にもした事のない尼が、今日ばかりは困じたふうに呟くと、

「はての、僻耳ではないか？　わしには、とんと聽えなんだが——どれ、見てとらせよう。」

と、阿佛坊は座を立つて、「案内を乞はれるお人があるのか？」

と聲をかけ乍ら下りたつていつた。戸を細めに押して見ると山狩師とも見える男が立つてゐるので、

「ようまあ、この降りしきる中を訪ねてわせられた。」と、屋根の下の土間に、招じ入れると訪れた者は、コトコトと、蓑頭巾や蓑に乘せた雪を、拂ひおとして迎へられながら、

「いやもう、一向に、お見知りもない者でござりますに、有難うござります。わしは、山狩して暮しをる荒くれ者でござりますれど、常日ごろからお前様がたお二人を、めでたいお志のお方ちやと、お慕ひ申してをるものでござります。」と、土間に蹲まつて彼は言ふ。

老いたる阿佛坊夫妻が、日々の糧を、夜になると運ぶ山路で、彼は、幾度巡りあつたか知れない。重いものはおろか、尼御前を負ふても進ぜたく思ひながら、人目をはばかられるさまゆゑ、道を避けて、その有難い志を拜んでゐた。

「時には、ものを、差上げたいと思ふことあれど、猪鹿の肉ではどうにもならぬので、聲もかけませぬで——」と、彼は鼻をつまらせて、

「わしは、獵師をいたいても、一向獲ものを逃してばかりをる奴で、生計とはいへ、愁いをりもござります。慘い殺生いたす者とはいへ人の苦しむは見兼ます。」

ぢやゆゑに、かの、塚原の法師の、乾殺し責めには加擔出來ぬ。それは、鬼畜の所業で、人の

する業ではないといふのだつた。

わしの手から、何なりとあげたうても、この獣の血にまみれた手からでは、法師は受けられまいと思ふにつけ、誰か、助ける者はないかと案じてゐた折もをりとて、こなた様がたの塚原通ひの、お姿を、なんとも忝けなく嬉しく存ずるをりから――ぢやが、と、彼は、顔を曇らせて、

「近日に、この庵のお住居もかなひますまい。所拂ひするとかの噂も耳にいたしました。さりとて、今日只今と申すことはござりますまい。早急のことは――」と、彼は、こゝから一里も行かぬさきに、先刻から、少年僧が二人、こなた方お二人の來られるのを、迎ひに出てをられて、雪でつくつた佛の立像のやうに、降り埋められてをるで、それを告げに來たといふのだつた。

「お坊さんがたのいはしやるには、年寄つた人に、重いもの負はせて、難儀な山路を越させるが悲しい。われらが行つて濟むものなら、日に幾度でも參らうに――と、おつしやられました。」

彼のいふことに、微塵の嘘いつはりもないことは、むくつけき言葉のなかに、眞實が籠つてゐる。

おお、さても、さても、と阿佛坊は、膝の上に、念珠をかけたる手を固くおいて、老の眼をしばたたき、千日尼は、顔にあてた、衣の袖をはらつて、この醜の面の、心優しい狩人をがんだ。

「ささ、早う、御用意なされませ。その袋は、わしが背に乘せても、獣の香がうつらねば、御僧が召上ることが出來ませうか？　それすら厭はせられずば、みな背負ひます。幾個なとお積みな

されませ。そして尼御前には、ようお身を、およろひなされませい。」

と、まめまめしくいつて、門の雪に、歩きよく路をつけてさへくれてゐる。

むくつけき山の獵夫は、木の枝をはらつて千日尼に手ごろな杖を與へ、雪を掻き取つては足がかりをつくつて、自ら踏み固めて先だち、聲をかけ、手をとつて行くので、おのづから行程は捗どるのだつた。

――之も佛の御導きであるぞ。

と、千日尼も阿佛坊も、心のうちに思ひあひ、手を合せてをがみつゞける心地でゐる。嬉しいと思ふにつけ、優しき者よと思ふにつけ、

――妙法連華經――

と題目を稱へるのだつた。と、狩人は、

「わしも、それを、眞似ていふても、大事ないでござらうか？」

と、おのれには、許してもらへぬかといふふうにさへ卑下して問ふのを、

「おゝ大事ござらぬとも、こなたこそ、生たる佛と、われらは、心のうちに拜んでをりまする。」

「塚原におはす日蓮上人は、法華經の行者にましまし、忝けなくも、釋迦牟尼佛の御再來遊ばされて、われら衆生に、尊き御經を頂かせ下さる御方でござる。その御僧への供養を助けらるるお人は、我らの恩人でござれば、菩薩の化身とも拜み申す。」

杖を止めて、交々答へると、
「何をいはれるぞ、われらには、こればかりの荷は、荷とも思はれず、これしきの行歩は、家のなかにをるも同様でござる。禮をいはうならば、この方より申さねばならぬのは、先刻より、口まで出てをりながら、恥かしうて、言ふことの出來なかつた、妙――」と、彼は言ひ澁んだ。
「妙、法、蓮、華、經――」と、千日尼は、解りよく、滑らかな聲で敎へて、
――妙法蓮華經、妙法蓮華經と、阿佛坊もともに、十遍ばかり繰りかへして、覺えこませた。
「忝けなうござる。これは、どういふことを申しますのか、何も知らぬ愚者ゆゑ、それだけを、知りたうござる。」
と、彼は、忘れじものと、妙法蓮華經と繰返し稱へつゝ、歩を運ぶのだつた。
「さればいのう、こなたは、何も知らぬ愚者とおいやるが、釋迦牟尼佛の御弟子の槃特といふ人は、智慧もなく、解りもおはさなんだが、一念の信ありて、普明如來とならせられました。」
と千日尼がいへば、阿佛坊は、「これは日蓮上人の仰せられたことぢやが――」
と、一切の經文といふ經は、みな、妙法蓮華經の、經の一字に撮め盡されてゐる。ゆゑに、この經の一字に、十方世界の一切卽ち虛空の中に天地萬物を含むのと同じだといはれたことを、囑んでふくめるやうに、ほぐし敎へ、「こなたも、わしも、まことに芽出たい時に生れあつて、さうした御經の題目をお稱へ申すことでござる。法華經の題目に値ふのは、須彌山といふ、遠い〳〵

い、思ふことも出來ぬ遠いところにある山から大風の吹く日に、一條の絲をこちらの山に立てゝおいた針のめどに通すよりも、もつと〳〵難かしいことであり、大梵天王の宮殿と申す、空の空のずつと上から、一粒の芥子の種を落し、それが地の上の針のさきへ刺さるよりも、たいしたものぢやとござる。」
「まことに、この御經の題目を唱へる人は、生盲が、初めて眼が開いて、父母の顏を見た、それよりも、囚はれの者が許されて妻子に逢ふたそれよりも、もつと〳〵悅ばねばならぬ果報を持つものと仰せられてゞござる。」と、それは、釋迦牟尼佛がおかくれになつてから一千何百年かの今日、日本の國で、はじめて自分達が、それを持つ果報にあつたのだとも敎へた。
向ひ風を避けて立止りながら、手をとられながら、敎へ、諭し、問ひつ答へつして、いつしか途も半ほど過ぎると、
「おゝ、あしこに、居させられる――」と、もう、すつかり暮れきつた山蔭道の小窪みのところを、狩人は透し見て、出迎へてゐる御僧が居ると指さした。
千日尼と阿佛坊は、おなじやうに透して見ると、石佛か何ぞのやうに、人目に立たぬところに佇んでゐる少年僧二人が、笠も蓑もあらばこそ、雪で造つた濡れ佛そつくり、眞白に、大きくふとり、脚は膝まで降り埋められてゐるのに、思はず、ほほ、はは、と笑ひ出しながらも胸は熱くこみあげてくるのだつた。

二人の少年僧は、師の坊日運の、不退轉の教化を、そのまゝ生身に示し現して、立身の行ともいふべく、ガシと組んだ合掌の上にも、雪は齋の盛立飯より高く降り積んでゐる。

――あら有難やな、奇特なる御姿ぞ――と、こなたの三人も思はず小腰をかゞめ、合掌禮拜してのち、

「日頂どの。」

「日向どの。」と、千日尼と阿佛坊は呼びかけた。

「御苦勞なことでござりましたの、知らぬこととて、いかう待たせました。」

呼びかけられた二人は、尼たちの到着を漸く知つて目をひらき合掌を解き、身を搖すつて凍りついてゐる雪を拂ひ落しながら、窪みより出て來たが、「御苦勞とは、あなた方のことでございます。われらさへ行き惱むなかを、これが、日毎夜毎の御通路であると思へば、勿體なくて――」

と日頂が、凍へる手を揉みながらいへば、

「誠に、日々頂きまする食は、かやうな御辛苦のものであると思へば、何をもつてこの御恩を――」

と、日向は、日頂と諸共に、膝まづいて、阿佛坊と千日尼の足を頂くやうにした。

「これまあ、何といふ事をなされます。」

千日尼は、日向の肩に手をかけた。阿佛坊も日頂の肩をゆすつて、

「ささ、お立ちなされ。今日は、早うに、師の御坊に御目見得出來ますぞ。悅んでくだされ、此處にも、法華經を信ずる友が出來ました。」

「おお、これは、先刻の山人でござつたか。」

二人は世にも欣ばしげに、「よくこそ、尼前をお助け下すつたな、その重いものを、この弱げな肩に、背負はれて來らるるを、見るたびに心が痛みましたが――」

「忝けなう御座つた、忝けなうござつた。この御功德は、必ず、良き報いを得られませう。」

と、狩人の手から、肩から荷物を分け取つて、

「佛に供したてまつるに、眞淸水一杓、雪一握り、野の花一本にても、その人は成佛すると申すに、師の御坊は、白米の貴とさを、上御一人の御壽命をも持ち、下萬民は珠玉よりも重しとするは稻米ぞ、これぞ、民の骨をくだきしものと仰せられる。その品を、また、この年老いたる尼や入道が、身の膏をも絞られて御運びある――誠に命の親でおはすお方を、よう御助力くださつた。」

それは、心からの謝意であつた。言つても言つても盡きない眞情だつた。

「まま、それはさておき、いよいよ、明日は御出立か？」

と阿佛坊は、話をその方へむけてきいた。

「お使ひは、早う用事を果して、直に歸ります。」

「御坊や尼前がおはすので、どのやうに安堵して出立いたすことか――」

と少年僧たちは他意なく語るほどに、やがて塚原近くなつた。

――三昧堂の軒場からは、ぷしぷしと、燻る煙が立ち昇つてゐた。

留守をあづかる日興が、冷たくなつて這入つてくる四人のために心ばかりの温湯を用意して、凍る手足を暖めさせようとするのだつた。

座が定まると師僧は、濃い眉の下に微笑をうづ高く輝かして、「日頂よ、富木の尼御前に、この千日尼のことを、よう語り候へよ。いかばかり悦ばれ、消息もいたされるであらう。」

日蓮ほどの人が、かくばかりの事に、これほどにお悦びあるは、正法を傳へたまふを助ける者のあるといふ、深き歡喜と知れば知るほど、尼は忝けなく、

「富木どのは、この佐渡よりの御消息を、第一に頂戴いたされる、御果報ものでござります。尼御前のおよろこびも眼に見えまして――」

と、いそいそと粥を炊ながらいふ。釜の蓋をとつて掻廻す湯氣の甘さ――狹い堂内は、燈火はないが、焚く火のチョロ〳〵と赤く燃えるのに、人々の影も添はつて春めくほど和やいでゐる。

「まことに、筆もなくば、指の骨にても書くべきところを、筆墨も得、紙にもしるすことの出來たるよろこばしさ――」

と、日蓮は、傍らにある書狀幾通かを手にとつて、「日蓮佐渡に來しをり、生きて再び消息仕ま

つらんこと、或は覺束なきかと思ひしも、消息はおろか、我が本化上行の所傳を示す『開目鈔』にもすでに着手、筆をおろすこと、みな、阿佛御坊と尼御前の情でござる。富木入道や尼御前も心おきなき者から、つい、この島についての愁きことなども書いつけたが――」

と、富木入道殿と記した一通の、はじめの方を繰りひろげて、楷火に照しながら、

――この北國、佐渡の國に下着候て後、二月は寒風頻に吹いて、霜雪更に降らざる時はあれども、日の光をば見ることなし、八寒を現身に感ず。人の心は貪獸に同じく、主師親の恩を知らず、況や佛法の邪正、師の善惡は思ひもよらざるをや――

と、讀みさして、

「されば、この消息の中にも書いたが、この大法が弘まれば、法華以前の經々や、迹門の敎へは少しの利益もない。日が出れば星は隱れると、傳敎大師も云はれた。それに――」

と、日向と日頂に、むかつて、「小僧たちを少し歸すから、この國の樣子や、塚原の有樣をお聞きあれと記しておいた。お前がたはじめ弟子に、學問を怠らせぬやうにも申しておいた。ことに日蓮の流罪について深くおなげきあるなとも申しおいた。」

「わたくしは、鎌倉に着けば第一に――」

と、日向は師の顏を見てニコリとした。それは、辨殿日昭をこそ、眞ッさもに見なければならないのだが、この少年僧は、宿屋の館の裏の、土の牢に、日朗を見て安心したいのだつた。

ともかく、この夜ほど、塚原三昧堂の師弟が、樂しけに見えた事は、佐渡へ着してから五十日あまり、ついぞないことだつた。

「わし共が居るうちに、島の坊主どもが、押寄せて來をつたらよかつたに――それだけが殘念ぢや。」

と日向は、熱い粥を、フウフウ吹きながらいふと、「わしは、もうつまらないことに、くよ〳〵と上人をお案じ申さない。釋尊は我師を恒に守りおはす。なあに、佐渡の念佛僧ら、幾百人參らうと、みな雪の中へ、面型造りならべて御覽に入れるであらうほどに。」

日頂が、つねにない氣焰でみなを笑はせた。

阿佛坊は空を氣にしてたび〳〵見てゐたが、「おゝ、晴れたぞ。」

と叫んだ。曉に近づく空には、何處となく、紫の色がたなびいてゐた。

少年僧たちが鹿島立つ朝が近づいてゐる――

――さらば御健勝でおはせ。

――師の君を、くれ〳〵もお願ひ申上げまする。

――途中、心をつけよ！

さらば、さらばと、見送り見送られて、日頂と日向は塚原を出た。

尼が心じらひの、雪履を堅く穿き、眞綿まで着せられ、これほどは入らぬといふほど食料も背

おはせられ、別れを告げて立ちいづると、そこの路までと、尼は送つて來て、

「早う行かう、早う歸らうと急がしやれて、風雪の激しいをりなど、船を出させたり、山越えしてはなりませぬぞ。」と、わが子を諭しめるやうに言ひきかすのを、日向はをかしさうに、

「尼前、そのことなら、昨夜から、幾度もきいてをります。」

彼にも說がある。艱難なをりとか、大事のをりには、人は中々强くなるもので、風雪などでは死なない。それが證據には、尼御前のやうな弱けな人でも、三年にあまる月日を、一日の休みもなく、潮垢離をとられたをりは、風雪の荒れた日もあれば、怒濤押寄せ、危きことも幾度かはあつたであらう。

そうじて、他人のする事は、見る目危くもあるが、その當の人は、左程には感ぜぬもので、心が緊張してゐれば、大概なことは危くない。却つて、その、緊張のゆるんだをりこそが危險だ。

ぢやゆゑに、必ずお案じ下さりますな。貴女のは、人のなし得なかつたことで、千八十日、千八十度の荒行であり、われ〳〵のは、旅行者であれば、誰もがいたす歩行だけのことで、しかもわれわれは、猪、狼も避けるであらう法華經持者であり、しかもごらんのごとき壯者でござる――

そんなふうにいつて、彼は、隆々たる腕拳を示し、「昨夜のお粥がうまかつたで、こんなに力が出た。」と、足踏までして尼に安心させてゐる。

「さあ、さあ、もうお歸りなされませ。さうでないと、また、わたくし共が送つてゆくやうにな

ります。上人も、お案じなされるといけませぬ。」と、日頂は優しくいつて、
「他分、雁が歸るよりは、さきに、われらの方がさきへ歸つて參りませう。」
「まあ、まあ、まあ！」
尼は嬉しげに、「なりや、來る春は、樂しい事ばかりでおはすのう。櫻が咲かぬうちに、こなた方も歸られるし、よい土產もたんとあらう。それに、櫻といへば、眞野の御陵は花盛りでござらう。先帝の御慰めであつたのは、あの山櫻ばかりでござる。うけたまはれば、師僧も、櫻をお好みなされるよし、度々、御陵へ御參拜下されう。」
「尼前、いつまでも御見送りくださるは嬉しいが、われらは、もう、急ぎたうござるゆゑ——」
と、日頂が、言ひにくさうに別れを告げかけると、日向は、
「さらばでござります。もう急ぎます。」と、ひよつこりと辭儀をして、とつとと歩きだした。
「ほんに、ほんに、心無しであつた。」
尼は佇んで、遠ざかり行く二人の影を、何時までも〳〵見送つてゐた。
近間のうちは、かたみがはりに二人は振りかへつて見てゐた。このごろにない朝晴れで、東天には紅が流れ、その底に、陽はさしのぼる前の金色の光を投げかけてゐる。白雪皚々たる野も山も、その色に映えて、キラキラと輝いてゐる。振りかへり見る少年僧の、剃りたての青い頭にも顏にも照りかへしてゐる。

その時、三昧堂の軒さきでも、日蓮はじめ、阿佛坊も日興も、その莊嚴なる空を拜してゐた。
——鎌倉の信者たちは、佐渡からの使が着したときくと、先をあらそつて、留守を束ねてゐる日昭のところへ打集ふのだつた。
消息をきかうとするもの、書狀をうけて、その披露に來るもの、時ならぬ法莚が、いたるところに開かれ、法華經信者の勢ひがモリモリと盛上つた。
日蓮に龍の口の難があつたほどの迫害が、なんでその弟子、その信者らを打捨ておくほど寛大であらう。日蓮が佐渡へ送られぬ前からその手は廣げられてゐたが、いよいよその主魁が、生きてかへるかどうか知れぬ、佐渡が島へ流されたとなると、魔手はあらゆる形態をとつて現はれて來た。
鎌倉の諸處に放火があつて、それはみな日蓮信徒、法華經宗徒だといふことになつて逮捕された。およそ、公務にあるもののほかは、日昭はじめ重だつたもの百數十人が捕へられ下獄したのだが、流石に、その無實は知れてゐるので、大概は解放されたが、四條金吾頼基夫妻、その弟たちをはじめ、進士太郎、深澤理文次郎、いまは至極の篤信者たる阪川兵衞、その人を、信につかしめた、女婿の爲藤四郎や娘なぎさたちの狂奔で、漸く人命を害ふやうな事はなくてすんだ。もと〳〵幕府も、極樂寺良觀等の策動によつて動いたので、奉行宿屋光則に預け、土牢に押込めて

ある、日朗、日進たちを許さないだけで、ともかくも鎭まつてはゐた。

そのなかで、辨殿日昭は、しかと、法華經信者の逸散を防ぎ、法門の燈を滅せぬやうに勤めてゐるのを、四條賴基らが、主君の勘氣をうけても、役義を務めにくゝても、法華經を持しながら日昭を支へてゐた力は大きく、賴りの綱だつた。

心弱いものは、信者のうちにも、日蓮の他宗折伏は、あまりに強しとするものすら出來てゐる時だつたので、彼等は、日向や日頂に、塚原の有樣をきくと、今更に慚愧の涙にくれて、それからそれへと傳へられ語り交された。

ことに、書狀をうけた人々はその消息はあらましにて、多くが敎への言葉であり、法華經信者の心得ねばならぬ覺悟でもあるので、激しく論議され、新しく悟るものも多かつた。

——師は食もなく、雪の中に坐りおはして、開目鈔に御着筆になつてゐるさうぢや。

——筆がなければ骨にても書くと仰せられてゐる。

——日蓮は、日本の柱と仰せられ、日蓮といひしものは去年九月十二日子丑の刻、すでに首は刎られ、日蓮の命はなきものなり、佐渡にあるは日蓮の魂魄ぢや、凡身、超越、上行、開顯、內證相承の御旨を仰せられてぢや。誠に忝けないことでおじやる。

肉體の苦しみが大きく、深ければ深いほど人は——凡下の者にも、その艱難が思ひしのばれるので、松葉ケ谷の燒打ち、伊豆の流刑、龍の口の斬罪、そして佐渡の御難儀と、打續く危難を見

て來た者共は、少年僧たちの歸鎌で、法燈が明るくなつたやうに活氣づいたのだ。

と、日蓮が、小町の辻にはじめて立つた日から、その辻說敎を、毎日毎日、身に暇さへあれば聽聞してゐた、若い女があつたが、今は夫をもつて、一人の女の子をさへ生んだ。

彼女は、今朝はじめて見出した娘の齒が生えかけてゐるのを、樂しく珍らしく、幾度も口を開かせて覗いて見てゐる。乳房をふくめると、チカと、輕い、細い、痛みを感じたのを、何かと思つて、仰むかせて見ると、小さな眼に、白い筋のやうなものが、橫に小さく細く見えてゐるので指でさはつて見ると、もう指さきに觸れるやうに凝つてゐて、たしかに初齒が現れるところだつた。

その、水色に澄んだ、底に、白い線のある、茶碗のふちの、こまかい缺のやうなのが、肉の下から透いて見えるのを、彼女は凝とながめてゐた時、ふと、ある日のことを思ひ出した。

——思へば、もはや、十年にも近くなる。と、彼女は幼かりし日のことを、ふと目に浮べた。

小町の辻の大松の樹の下へ、夕ぐれごとに立つた日蓮法師は、そのころ、まだ、誰も顏見知りのない、質素な青年僧だつた。

最初は、耳もかさなかつた鎌倉市民も、二年三年と、おなじ個處に、一日の懈怠もなく立ちつづけ說敎しつづける青年僧の姿を、それ、法華經行者の辻說法よと待つやうになつて、日毎缺かさず聽聞に出かける信者も多くなつた。

だが、日蓮の說教は、なにごとも、有難い〳〵と撫でさするのではなく、その勁烈な疾呼に、魂を叩かれたものは、みな引きつけられたが、その中で、良心に痛みを感じるものや、他宗の者は轟々と沸きたち、惡魔、外道坊主と罵り迫害した——

その群集にまじつて、日毎缺かさず聽聞したころのことを、彼女は思ひ出したのだ。

小町の辻の、路傍の說教壇には、松葉のこぼれてゐる時も、松毬のおちてゐるころもあつた。糸とり、石投げをして遊んでゐた童たちも、もう、說教僧が來る時分だといふと、喧嘩もせず、その場を明けわたし、彼女はそこらに打捨られた小石を拾ひあつめて、見えぬ根がたに押かくしてしまうのだつた。

それは、一度や二度でなく、日蓮が、暴民たちに小石を投げつけられたのを知つてゐるからだつた。そして、彼女は、松葉をつなぎ、松毬を通して、日蓮法師が持つてゐるやうな珠數を造つて手にかけたりした。

幼い耳にも、缺かさずに聽く說教の意味は、いつしか解していつたので、彼女は、自分も應分の喜捨がしたいと考へた。

——いま、幼兒の生えそめかけた齒を見て、ふと目に浮んだのは、たつた一握りの米を、淸々と磨ぎあけて、掌に乘せて持つていつた時のことだ。法師は、その場へ着いたばかりで、傍らには一人二人の人がゐたが、日蓮法師はやさしく、

「昔、印度に、鮮白といふ尼があつた。生れた時に御衣を着せたらば、その衣が、その子の成長にしたがつて大きくなり、後に、尼になられた時は、立派なお袈裟になつたと申す事がある。そなたも、大きうなつたら、立派な女人となられるだらう。」と、鉢にうけて戴かれた。と、その一粒が土におちたのを、彼女は急いで拾つて口へ入れたのだつた。

それを見た日蓮法師の面には、光るほどの微笑がうづみあがつて、垂下髮の頭に手をおかれたのだつた。そして、「おゝ、善き子よ！」といはれたのだつた。

——あの時の白米が——この乳飲み子の、この、自殺を引いたやうな、齦から出かけてゐる初齒に似てゐる——この、思ひがけない發見に、彼女は甦へつたやうに胸を張つて、獨り言をいつた。

「ああ、さうだ。上人さまがお救ひくださるのだ。わたしは、この子があるのが善いのだ。この子は、わたしの子でもない、わたしの子だ。」

齒が生えるむづがゆさに、ブウブウと唇を鳴らしてゐる、無心の赤子を堅く抱きしめて、彼女はまだ言ひつづけてゐる——

男と女とは天と地、日月のごとく、されば、夫と妻は鳥の二つの翼、車の兩輪のごとく——、と、何處の夫妻のことを訓しめられるをりにも、さう仰しやられてであつたが、わしは夫運が惡く、夫があるのやら、ないのやら、この家にも歸つて來ぬので、何故子供など持つたかと、つく

づく悲しんだこともあつたが――ほんに、ほんに、上人さまが、あの時微笑なされたのとおなじちや、わしも、白米ではないが、そなたの齒を見て、淸らかなものを、はじめて知つた――

彼女は、これからの長い年月を、子供を抱へて、どうして生計をたてようかと、思ひまどつた愚さをはぢたやうに、ひしと我子に、炕を摺りつけていつた。

「日向さまに、佐渡へゆく道ををそはつて、わからぬところは、上人さまに直にお敎へを願はう。」

「四條さまの御邸に行けば、何かのお話はうかゞへよう。」

四條中務右衞門尉の館にと急ぐ、幼兒を背負つた、若い女の姿は、直に、館の奥方の前にあつた。

「おゝ、乙御前の母御、ようわせられたな。ささ、火桶の近くへござれ。梅も咲かうといふに、寒いことのう。」

金吾頼基夫人の日眼女も、二ツになる月滿御前を抱いてゐた。

乙御前の母と呼ばれた彼女が、羨ましくてならぬのは、この月滿御前が、日蓮が佐渡へ流される前――あの龍の口の難も起らなかつた初夏のころに生れて、釋尊も八幡大菩薩も四月八日のお生れである。この子は月は五月だが、八日の生れだから、日蓮のあげた護行の功德で、さうした御方の生れかはりかもしれない。釋迦佛は御誕生のときに、天上天下唯我獨尊、三界皆苦我當度

之の十六字を唱へたまひしが、月滿御前は產聲に、南無妙法蓮華經と唱へたであらう。目には見えずとも、定めて、鬼子母神、十羅刹女が寄りあつて初湯をつかはせ、養ひ育ててくださらうと祝はれたのを、父の顏も見知らぬ、薄幸な我子と思ひあはせずにゐられないのだ。

「おゝ、月滿さまは、もう何やら仰しやる。」とあやしながら、このお子を、我子などにくらべては、勿體ない勿體ないと拜んだ。日眼夫人は、ほゝと笑つて、「まあ、なにををがんでをられる。」

「でも、月滿御前のお名は、日蓮さまがお名づけあそばし、しかも、日蓮は、生れやうとする子に魂を授けたゆゑ、日蓮の子である。釋迦如來は、一切衆生みな子ぢやと仰せられた。幸なり、幸なり、めでたし、めでたしと仰しやられまいたと――」

日眼夫人は、ほほ、ほほと笑みつゞけて、

「この子も、」と、乙御前の頭を撫でさすりながら、

「上人さまおはしませば、屹度さうおつしやつたに違ひないし、御名もくだされたらうに。」

日眼夫人は、そのをり日昭が使ひに來て、師の坊が、四條夫婦は、共に法華の持者だから、生れる子も玉のやうで、法華經流布の種をつぐものを生むぞと、悅ばれてゐるといつたことを思ひ出すのだつた。

彼女はまた、すこしばかり、目立たぬほどふくらんでゐる腹を、乙御前の母に示して、

「どうやら、また、下のが出來たのではなからうかと思ふが、今度も、お名を頂かれようか――」

と、遙な、山海をへだつる佐渡にある師僧をしのぶのだつた。

三十歳の彼女は、玉のやうな子を産むであらうと祝はれたやうに、珠玉のやうに艶かに麗しかつた。貧苦といふほどではなくても、久しく夫にも生別れてゐる、頼りのない乙御前の母とは、貧富貴賤のへだてをわすれて、法の友としてわけへだてのない交りをもつてゐた。この女の前へ出ると、乙御前の母は憂もわすれ、姉にせがむやうに、

「わたくしは、鎌倉に居やうと、旅をいたさうと、別に、異つた日をもちはしませぬ故、急に、お上人さまにお目にかゝりたくなりました。」と、日向たちに逢つて、よく道のほどを聞いて、佐渡へ行つて來たいが、お言傳はいらぬかといふのだつた。

法の道のためにときけば、それは強いことだと、日眼女も無暗に止めはしなかつたが、

「この殿も、すぐにも參られたいと願はれても、役儀のあるものはなう。」

と、繁累のない乙御前の母の身輕さを、こんどはしきりに羨ましがるのだつた。

日眼夫人は、先日から夫頼基が、佐渡へのたよりがあつたならば、上人の持藥を差上げたいものだといつてゐたことを思ひ出した。

「男の旅でも容易ではないといふに、越の海のあなたまで、そのやうな幼兒を連れて行かれうかの。」

「御さま。」と、乙御前の母は、決心した眼をあげて、「何日の何時までに、着かねばならぬと、限

つた日數であつたらば、とても覺束なうございませうが、家にゐたとて母子二人、旅に出ても母子二人。夜は寢て、朝は起きて、この子をあやすのに、小町の辻や、松葉ケ谷まで行きますと思へば、それが、毎日毎日、さきへさきへと伸びて行くだけで、いつか佐渡へ行きつかれるでございませう。それに——」

と、彼女は、法華經持者を、御守護くださる、大きな力のあることをいふのだつた。

「それもさうぢや。では、心をつけて行かれませよ。」

日眼夫人は、乙御前の母は幸福者だと思つた。あんなに、師の坊思ひの、幼少のをりから孝行もので、いまも、宿屋の土の牢のなかで、朝の餉にも、夕の食事にも、師の坊はいかにといはぬ時のないといふ、あの日朗が洩れきいたら、どんなに羨むことであらう、さうでなくても、我夫も、どのやうにけなりがるであらう。みんな法華經歸依者、日蓮の弟子は、飛立つやうに訪ね行きたがつてゐるのに、乙御前の母が、かよわい身で第一に立つたと聞いたらばと、種々のものをとり揃へてやりながら、

「そなたは果報者ぢやな。よい日の下に生れたお人ぢや。」

と旅費、衣服、子供の代も寒くないやうにと心付けて、「何時から行きやる。」

と訊くと、乙御前の母は、「今から歸つて、近所へ家を頼んで、すぐに立ちませう。道をたづぬるには、千里も遠しとせずとか聽いてをります。」

「それもさうぢや、今日も明日もおなじことぢやゆゑ。」
日眼女はさういつて、この藥は、上人の冷え給ふた時の持藥、この藥はその子の合藥、これはこなたのと、わけて懷に入れさせた。
「まだまだ、あけたい品は山ほどあれど、子一人連れるも大變な長い旅、寒いをりではあり、荷になるゆゑに思ひきつておかう。」
「嬉しうござります。さらば行つて參ります。」
「飯は、もうそれでよいのか？」
「たんと食べました。」
乙御前の母は、勇んで四條金吾の館を出た。
「さあ、行くぞよ。」と背の女兒を搖りあげて、「ま一度、家へもどつてといつたが、出る時から心はきめてゐる。のう、乙御前、この館の門から出立たうの。」
御守り下さるのは釋迦牟尼大世尊、法華經守護、佛法擁護の天神諸菩薩、家に寢るも、外に寢るもおなじぢやと、北へと向いて——北風に逆らつて、
「よい子、良い子、明日は何處の山を見る？　そのまた明日は野を越えて——」
と、子守唄も元氣よく、頭の上を行く雲を道連れに、さつさと歩き出した。
「日眼女さまはよい方ぢや、あのお方のおかげで行かれる。それも、これも、師の御恩、法華經

の功德。」
南無妙法蓮華經と念ずる時、南、無、妙、法、蓮、華、經と、飛びとびに、一字に斷れたのや二字につゞいたかたちが雲間に——雲に乘つて頭の上をさきへ〳〵と行くやうに思へた——
佐渡のおとづれをきいたものは、冬の渡り鳥とは逆に、雪の國へ、雪の國へとむかつて、追々にいでたつのだつた。
乙御前の母は、むさし野もすぎ、上野の野山も越して、はや信濃路へはいつたであらうが、そのことが、世をかけ離れた土の牢のなかへまで、洩れるわけはないのだが、宿屋奉行に預けられて、禁錮されてゐる日朗法師は、この明暮れを、居ても立つても居られぬやうに、奉行に愁訴を重ねてゐる。
「拙僧の一生は、この土の牢のなかに埋められ、その後は、日の目ををがむことはもとより、一歩も、牢內を動くことも、歩くことも許されぬ身となつても厭ひはいたしませぬ。ただ、ただ、曲げて一度、たつた、一目、師の坊の御顏ををがませてくださりませ。御見舞にゆくことを、お許しなされてくださりませ。」
食も通らぬやうにいひくらすので、日に日に、それを奉行に傳へなければならない牢番が動かされた。

「あのやうに申しますものでござります。ならぬといへば、命も消えるでござりませう。」
と訴へるので、奉行宿屋光則も根負けがした。
といふのも、光則も、いつしか日蓮のいふところは尤もだと思ふやうになつてゐた。曾て、暴風雨の曉方、海岸の上で日蓮と出會、深澤理文字郎の紹介で深く心を動かされて後、碩儒大學三郎能本の手から、日蓮が駿河岩本實相寺に籠り、四ケ年不退轉の錬磨の結晶、心血を注いだ「安國論」一編を、北條時頼に差出す時にも、光則の手から、他の障碍を拂つて出されたのだつた。
それやこれやで、光則は日蓮の烈々たる魂を事毎に感じ畏敬はだん〳〵に信仰と變つてゐる。日朗たちを土牢に見廻るたびに、この師弟の、なみなみならぬ精神的つながりを、愉快にさへ思ふやうになつてゐた。囚はれの牢舍の僧たちと相對すと、我執も解けてゆく思ひを、樂しみとさへしてゐた。
それゆゑ、日朗たちの土牢禁錮は、深澤理文字郎の願ひもあつて、保護されてゐると見てもよいほどで、その當時の、他の者に捕はれたのよりは、よほど安全でもあり、不愍もかけられてゐた。
ある日のこと、
「さほど御坊がいはるゝならば、法華僧の信不信をそれにかけて、佐渡へ行きかへりの日數だけを、見逃し申さう。歸らば、直に、その足で、この土牢へ參られるか？」

「申すまでもなきこと、なでう、殿の御迷惑を、引出しませうや。」
と、日朗は、とどかぬ手で、光則の袖にとり縋らぬばかりに、牢格子の間に顔を差込んで願つた。
それを見ると、まだ幼けない日進が、手を合せていふのだつた。
「日朗もし歸りませねば、日朗が申し述べましたお約束をわたくしが果しますでござりませう。どうぞ、佐渡へおやり下さいまし。夜が明けて烏の啼くのをきけば、日朗は、翼のある烏を羨みます。わたくしは、土牢に一生をりましても大事ございませぬ。日朗は、御經のことで、承はりたいことが、山ほどあると申してをります。師僧のお命があるうちに、日朗をおつかはしくださいまし。」
光則は、否とも應とも答へず、深い感動にうつむいた。主人は何と思はれるかと、理文字郎は言葉をそへて、「殿、彼等は、かならず御恩を仇にはいたしませぬと心得ます。」
だが、奉行は職掌として、應とはいはなかつた。しかし、去り氣なく理文字郎に、
「余は、あまり土牢を見廻つてはをられぬから、深澤は某にかはつて、よく心をつけたがよい。不時の入用の錢などは、汝がよろしく算用して取りいだしおけ。」
と言つて、牢番に、日進をいたはつてとらせよといひ付けて歩み去つた。
宿屋光則の、情けある計らひで、日朗に内密の自由が與へられたとは知らず、名越の聖舍——

日蓮寺では、留守を預かる日昭を、日毎に訪づれる四條金吾が、今日も用談はてゝ、立ちかへらうとするところだつた。

「上人よりお預かりの本箱の中に、その分はたしかにありまいた。明日持參することにして——誰が佐渡へ行かれますか？」

「日持坊が立つと申してをるが、尤も日向も直に行くやうにいつてをります。」

「それがしも、正月の式も大概すませたゆゑ、只今ならば、休暇もたまはらうかと存じて、あれこれと、心中繰合せてをるが——」

金吾頼基は日昭に送られて、沓ぬぎに下り立つたとき、駈込んで來たのは日朗だつたが、二人は氣がつかず他の話をしてゐた。

「辨殿、母御前はもう、お快方かな。」

「それそれ、その事をお禮申すのを忘れてをりまいた。老母は、あの御處法の藥で、とみに爽かになつたと、御禮を申して參つてをるに。」と、日昭は辨の尼御前の微恙の癒えた禮をいつた。金吾頼基が醫學に勝れてゐるので、日蓮も、日昭も信用してゐるのだつた。

「や、日朗ではないか？」

「おゝ、筑後房ぢや。」

と、二人は、走せ入つてくる日朗を悅びむかへて、土牢を出されたものとばかり思つた。

「何よりもさきに——」と、日朗は、息を切らせていふのだつた。

「わたくしは、只今即刻、この場から師の御許へ參ります。おことづては御座りませぬか？」

「その儀は、ありあまつて申付けるには順序がある。とも角、あれへ上れ。」

と、日昭は、長い土牢監禁の苦勞を慰撫らうと、頼基と共に兩方から手をとつた。

「忝けなうはござれど——」と日朗は、言葉忙しく宿屋奉行の厚情を述べて、それゆゑ、この寺へ立寄つたことさへ、申譯ないのだと言ひそへた。

それは、辨殿日昭が、肉緣では母の弟で、日昭と、その姉平賀有國の妻を生んだ辨の尼御前は工藤祐經の娘であるところから、その一門の血のつながりは、法の道に深い歸依をもつてゐるのだつた。

日昭は十五歳で出家し、近衞左大臣兼經の猶子として、叡山に學び、その秀才青年僧が、二歳年下の日蓮と師弟となつたのは建長五年十一月だつた。同じ年の五月に鎌倉弘敎を日蓮がはじめたのであつたから、その識見の卓越、高邁な日昭を弟子にもつたことは、死身の奮鬪を日蓮にさせる要素となつてゐた。日昭後にあつてこそとは、つねに師僧もいふところであり、友達同樣に重く見てもゐた。

されば、鎌倉弘敎當初の松葉ケ谷の庵室には、いつも日蓮に侍して、日昭と、まだ吉祥麿といつた童形の日朗が居たのだつた。

「とは申せ、宿屋殿も、この寺へ寄ることだけは、御宥免もあると存じて――お言づてはござりませぬか。」

透通るやうに、青白く、百日も土の牢に居たものが、あの山河の積雪の中を行きつけるかと、頼基は、日朗の氣息を、靜かにはかつてゐたが、日昭は、筆をとる間もないと見て、

「御流罪の御身、早く救りよとは存ずれど、上行菩薩の身にましませば、我等より赦免の儀などは願ひいだしませぬ。上人の御苦勞は、法華經の輝きをますものと、御苦痛をこの身にも偲び參らせると、申上げておくりやれ。」

「辨殿おはせば、御法燈は必ず細うはいたされませぬ。その御憂ひはないと申上げてくだされ。したが、くれぐれも、上人の御身をいとはせられてたもるやうに――そして、筑後房も無理せられな。道中をいたはられよ。」

さういふ暇に、他の弟子僧たちは、筆を、紙を、墨を、便次あらばと調のへておいたのを押包んで、筑後房に背負はせるのだつた。

「おゝ、よういたした、よういたした。」

法弟たちの、日朗への餞別を、日昭は、ころころと悦んで見てゐたが、

「法弟達の、さうした心が凝り集まつて、上人に、上行菩薩の御行跡をなさせ奉つる。凡下には爲し遂げ得ない御力を添へたてまつる。みなの、さうした心は、師僧の御勵みとなり、法力を富

ます薪となり、脂となる。有がたいことぢや、有がたいことぢや。」

「まだまだ、信者の人々から寄せられました品が、量高うござります。」

と弟子僧が答へると、頼基は、「それは、わしが行く折に持參しよう。」

さういふ頼基と並んで、見送られながら聖舍の門を出た日朗は、ともすると、駈け足になるので、

「筑後御房、お心のいそがれるのは道理でござるがそれでは途中で息がつゞかなくなりませう。長い間、土牢で坐つてばかりをられたのゆゑ、あまり急いで、足を痛めては難澁であらう。ゆる〳〵と、氣息を調へて歩かれるのが、尤も早く行ける近路と存ずるが――」と頼基は諭した。

「おゝ、さうでござつた、さうでござつた。心至らいで、心が飛ぶまゝに走せましたが、御安堵下さい、法華經を、一句ごとお唱へして歩みます。すれば、決して、足にまかせて走るやうな、粗忽なことはいたしませぬ。」

「では、此處にてお別れ申す。繰返して申すやうぢやが、何とぞ師の坊の、御體を御大切にと――」

金吾頼基は日朗と袂を別ちかけたが、振りかへつていふのだつた。

「なう、筑後房、鎌倉佐渡と、一千里の路のへだては、歩まねば通へぬが、我等の心は、日に夜に通ひをりますなう。ではござるが、一千里の路も後を斷絶さず、次々にと行きかふ者があるほ

ど、宗門は擴められ、法華經持者の力强さをも、知らせ得る道であらうと思ふが、さは思されぬか。」

「まことに、仰せの通りと心得ます。拙僧は、夜を日についで行き歸り、宿屋どのの御厚情を無にせまいと致しますが、行けば、必ず、師僧から深い御教へをうけることと勇躍いたしてをります。師の御心、御教へは、行くもの歸るもの、みなそれぞれに、日昭殿御許へ達しませう。思へば嬉しうございます。わたくしは、宿屋どのの御許しがあれば、幾度でも、行き歸りいたしたいものと思ひます。」

「日朗御坊、御土產は、どうぞ、持ち重りのするほど、御教へをうけてお出で下さい。」

さらば——と立別れたが、金吾は、もうどうしても、我も行かずばとの念が、夜々の眠りをさへなさぬやうになつて來た。

で、ある朝、晴れ〳〵した面持ちを、妻の日眼夫人に見せていふには、

「わしは、どうでも、今日は出立いたす。」

日眼女も驚かなかつた。彼女は、夫が、今日は行くといふか、明日はと、[illegible]か出來てゐたので、

「よい晴日でございます。遠々の驛路も、もうやがて眞冬も過ぎませう。遙々とのお渡りを、上人さまもさぞお悅びでございませうが、我夫も、どんなにかお嬉しいことか。」

と、この身もうれしく思ひますといつて、

「この館や、大學さま、阪川どのがたの手許にあれば、お書きものも失はれませぬゆゑ、御出あつたらば、また、お預かりなされます、御書きものが、澤にあることでございませう。」

「實にのう、このほどは、身魂を打ち込んだる、大事の御著述を遊ばされてゐるやうに、日頂、日向の御坊らもいふてをられたが。」と金吾もいよ〳〵佐渡へと渡つてゆくのだつた。

草堂は寂として寂莫を極めてゐる。

ことに今日は、霰まじりの氷雨に、積む雪は解ければこそ、上から凍てついて、塚原野は一面の大鏡のやうだ。

日興は、このほどの師の日蓮は、傍らにあつても身の肉の締るほどの生活、いかなる迫害にも堪へて、上行自覺の一期の大事を成就せんとの、法喜明かなるのを見て、かならず、法華本門の妙義を顯示せられ、聖者の大業を遂げられるであらうと、後姿に、寢たまふお姿に、幾度禮拜するかしれないのだつた。

今日も、十一月廿二日付の富木殿あてに、日頂に持たせつかはされた御文のなかに、

——日蓮は外見のごとくば、日本第一の僻人なり、我朝六十六箇國二つの島の、百千萬億の、四衆、上下萬人に怨まる。佛法日本國に渡つて七百餘年に、いまだ法華經の故に諸人に惡まれ

たる者日蓮のほかになし。

とあつたのを、しみ〴〵と思ひ出してゐた。八寒地獄、餓鬼道の苦にも動ぜず、浄土の妙を現身に解する、師の氣宇の大きさに、彼は言ひ知れぬ激励と法悦を止め得ないでゐた。

日蓮は硯の墨が凍つたので、筆をおいた。コトリとその音がすると、日昭は葛の粉を湯で練つて、温かいのを捧げていつて、「冷腹のお痛みは、いかがでござります。」

と、先日、千日尼を助けた狩人でもあらうか、時折夜中に、堂の軒下に積みおいてゆく薪を燃やし添へながら、日興は案じると、

「痛みはわすれてゐたぞ。」

と日蓮は機嫌よく、「さて、もう年も明くるな。小僧どもも行きついて諸方を訪ね廻りをらう。二月にもならば、この地とても、春めくであらうぞ。我らの寒さはともあれ、千日尼の苦勞を思へば、はやう春になつてほしいの。」

おゝ、これが、他宗折伏の強さ、いかなる障碍にも屈伏せぬ、不惜身命の師の言葉かと、その優しさに額たれるにつけ、またしてもまたしても、念佛僧らが、師の命をつけねらふといふ事をあるまじいことに思つた。

「念佛持者どもが、禪、律、眞言僧を語らひ、日蓮を追ひたてよとまたまた騒ぎたつてをると申します。」

「いかなる事を謀らむやらん。いづれともあれ『開目鈔』は書上げおきたい。これこそは生死の一大事、上行出現、我が本化の根本である。」

――三昧堂の師弟は、かく清浄な日々、夜々であるに、本間の館へは、表からも裏からも、市をなして訴へに行くものが陸續とつづいてゐる。

彼等のいふことは、毎日〳〵定つてゐる。日蓮を殺せ、佐渡から追ひはらへ。題目をとなへ、法華僧を供養するものを、重い罪科におこなへといふのだが、强訴の人數が日々に增えて、夥だしい行列となり、本間殿を怯ます示威運動になつていつた。

「殿、殿、いよ〳〵、これは事でござる。かやうな狀態が引きつづきますと、領分もをさめきれぬ仕儀となりませう。」と老臣どもが苦りきるので、重連も困りはてた。

「彼等は、先ごろも、武藏の前司殿の私的の御教書をもつて參つて、我らの眼を、にせの御教書で眩めようといたいた奴等ぢや。」と怒つたが、あまりの姦しき喧すしさに、

「重き預り人である故、私的に殺してはならぬぞ。ぢやゆゑ、あれだけの法師ばらや在家の信者の集團で、彼の僧一人を說き伏せあたはぬ事はあるまい。よつて、彼の日蓮に法の上の恥辱に命失はせるならば、これは決して、鎌倉殿にも御咎めはあるまい。」といつた、それをまた老臣は、尾鰭をつけて、法力にて惡僧を說き伏せ失はば、恩賞もあるやうにさへ達した。

上行使命

本間館の門前は、日に日に市をなす有さまで、食物を齧ぐものすら出來てきた。

僧侶も在家の者も、思ひ〳〵に群して、なかにも我は顔なものは、一々、些細なことまで館のなかへ問合せに、出つ入りつし、役にも立たぬ存念を、入りかはり立ちかはりして、尤もらしく述べたてる。

それをまた老臣どもが、我が僻ごとにならぬやうにと重連に伺ひたてるので、その煩さは格別だつた。六郎左衞門重連は、たうとう辛抱しきれなくなつて、「わが門前に、市をたてることを誰がゆるした。博奕は天下の法度、鎌倉にては再々嚴命がくだつてゐる。しかも、日運坊退治に名をかりて集る者共、我らが館の近くをおそれず、白晝にても錢を賭くると洩れきくぞ。汝等は、何處に眼をつけ、耳をつけてをるかッ。」と怒鳴つた。新春は、つい目前にあるのに、祝酒を汲んで歌舞し、地方政事の煩雜な小煩さを暫し離れ、耳の垢を除かうとするをりもをりとて、やりきれない重つたさに怒りを爆發させたのだ。

それにまた、內外から、かう取構んで大勢に見張られては、年の暮の贈物を貰ふことも、やることも目に立つて困る。ことに女たちがこぼした。

館の奥につかへるものが、親の家へ行かうと出ると、化粧して、都會ぶりの衣裳を着た姿を、ドッと囃したて、卑猥なことをさへいふものがあるのだ。で、女たちも、「なんぢや、あの衆らは塚原の御坊を、とやかくいはれるが、念佛打齋者のなんのといつても、あだ淫らがましい。」

「酒を飲んでゐるものもありましたぞへ。」などと言ひあつた。下司どもも、老臣に訴へた。

「何とかして追拂ふてくださりませねば、正月元旦が來ても、門前は、尿糞の山と溪でござる。その穢さはどうにもなりませぬ。」

老臣どもの智惠は集められ、正月十六日、塚原へ押かけろと、日を定めて觸出し、この門前集會を撤回してもらう案を作した。

文永九年正月十六日、塚原三昧堂に於て、流人日運との問答差許す者也

といふ觸れ書が掲示されると、群衆はうわッと鬨の聲をあげてよろこんだ。

「よしよし、法詰めにして、彼惡僧を憤死いたさせてくりよう。」

と、坊主頭の者は、みなおなじことをいつた。

「鎌倉の高僧がたは、彼めをあまり重く御覽じて、却つて、御自身の學に縛られたのぢや。なあにあれしきの者、俺がいふてきかせる事がある。」

まづ、正月をゆる〳〵いたしてと引きとる者もあれば、越の國の者どもはおろか、信濃の衆も呼び集めなければならない。なんでも人數を多くして、何を彼が言はうと、誰の耳へもきこえな

い具合にした上、わッと立上つて彼をおッ取り巻いてしまへば、どう殺さうと、逆上して死んだといふことになつて濟むと、言ひだす者もあり、その說の有力なのはいふまでもない。

寺々の會合、知音同士の寄合——正月の挨拶をかねて、何處の家も、往さ來るさに、わいわいと、塚原の日蓮退治が語りかはされる樣子は、この島をとりまいて、四方の海から、一度に兵船か、海賊どもでも襲つて來るかのやうな、目覺しい騷ぎかただ。

本間殿の御內の、例の虎鬢の左源太などは、內心怯えてゐる老臣の前では、なにが、高が一個の痩法師とほざきながら、龍の口の不思議を思ひだして、祕かに、膚に粟を生じて、長刀を磨いたりしてゐる。

佐渡の國の念佛持齋者唯阿彌陀佛は、何處の家へ年頭の挨拶にいつても、

「まことに芽出度正月でござる。今年の正月ほど、よろづ事新らしくなる、さはやいたる新年はまたとござるまい。めでたいことぢや、めでたいことぢや、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。」

と、逢ふ人ごとに、無暗と芽出たがるので、

「左樣に仰せられるは、何が芽でたいのでござる。」とでも問はうものならば、彼は、齒のない顎をガクガク音をさせて、「されば、お手前は、よほどの迂濶人ぢや。塚原の惡僧が、いよいよ退治られる日が近づいて參つたを心付かれぬか。」

と、嚙みつかぬばかりにいふ。念佛であらうと、題目であらうと、どつちにもすこしも緣を持

たない痴者どもが、唯阿彌陀佛を煽てる一ッの手として、

「其許のお宿へは、さぞ、そのをりには信者らが寄られませう。たいていな入費ではないな。ようなされます。」とでもいへば、正月分の振舞を、知らぬ顏の者にまで出して、

「お聞きなされ、それがしは、阿彌陀の御本願のごとく、慈悲を專らといたす者なれど、あの墓原にをる邪僧だけは許せませぬ。何と申せ、念佛を稱へれば無間地獄に墮ちると戲言を申す。そも、念佛と申すものは、ただ專念に、なむあみだぶつと申してさへをれば、よいので、他になんにもむづかしいことがござらぬ、それほど有難い念佛をとやかく申す奴、八裂きにいたいてもよい。その邪僧をいよいよ征伐いたす時が參つたのでござるから、その日は、我等の集まる頭の上へ、雲に乘り、光明赫耀と阿彌陀如來が現はれたまふにきはまつたり、必ず〳〵、この、一期のあらたかさを、見逃したまふな。惡僧日蓮めは、小石のやうに碎けてしまうであらう。ぢやから今年は、この國から、惡魔を追ひ拂ふことに相成る。まことに芽出たいことぢや。」

「唯阿彌陀佛さま、さういふあなたが、どうやら、お名の通り、生きてゐる阿彌陀さまのやうに見えて來ました。お芽でたいついでに、も一酌受けませう。」

「かしこまつた。さあさあ召上れ。まことに芽出たい。」

「お肴は、土產に持つて歸ります。」

「おゝ、よいとも、よいとも。」

と、唯阿彌陀佛はホクホクとしてゐる。西は越中越後、信濃、東は出羽奥州まで觸れを廻したので、佐渡への便船は、念佛、眞言を主として、坊主も信者も、うざうざと入込んで來た。

「去る、十二月三日に、北條時宗殿御臺所は御出產あつたるぞ。御男子ぢや、かゝる芽出たさも加はつてをると、館の左源太殿がいはれたからには、問答なぞは、ガヤガヤやつてをるだけでよい。遠矢にかけて失つてしまつても、かゝる遠土の出來ごとぢや、咎目なぞあるまいぞ。」

諸國から入り込んで來た僧侶等は、持つて來た包みから、田舍としては出來るだけ立派やかな袈裟、衣をとりだした。きらびやかにして眩惑しようといふ腹でもあつた。

「印性房のところへは、出羽、奥州から百人あまりもわせられるといふぞ。」

「信濃では、善光寺から多數お出なさると、生諭房がいはれてゐた。」

「高田の眞宗寺から、一團體になつてござる由だ。」

と、明けても暮れても、その噂でもちきりだつた。

あまりの騒ぎに、本間六郎左衞門は、重立つ幾百人を、守護所に呼び出して、嚴命した。

「日蓮法師は、上より副狀下りありて、蔑すべき流人でない。過失あつては重連が大なる咎となるぞ。法門にて取り詰めるのだぞ。」と、その日は、六郎左衞門重連も檢分すると達した。

日蓮師弟に誼みを通じ、法華經弘布の根基となる者を一人も送らじと、塚原野の往來の道に結

ひめぐらした柵が、この度の、法論、問答に押しかける者を堰く、警護の柵ともなつた。

正月の十五日、粥の箸をおくと、爭論を好む輩は前代未聞の明日の鬪爭に構へて、既に聲を潤らし、咽喉をいためてゐる騒ぎだ。

念佛持齋者のあるものは、先日から支度した論說を、一期の晴れとばかりに工夫をこらし、眼を瞋る場處をさだめ、腕を振りまはす個處を心にとめおき、罵るところ、憂ふるところと、種々の練習を、聲高に試みてゐる。

なかに愚鈍なるもの、身のほども知らずに、「そも〳〵、阿彌陀如來のかたじけなきことは、一年のうちに、一夜を限りて、この人界に立ちあらはれたまひ、我ら衆生に、佛の御かたちを、おぼろけながら差示したまふ。我らまた、その日、あみだ如來にまみゆる光榮を有し、隨喜渴仰してむかへ奉る。汝知らずや、これ卽ち、廿六夜待といつて、慈顏阿彌陀三尊と、我等とが相對ふ日である。われすでに七十歳、年々歳々、雨降り、空曇らざれば、必ず慈顏をむかへて、阿彌陀に逢ふこと三十八回——」

などと、愚にもつかぬことを繰返し〳〵、棒のやうに眞つすぐに、節も抑揚もなく我鳴りたて茹蛸魚のやうな、煙の立つ頭を振りたててゐるので、心あるものは眉を顰めて止めさせんとし、面白がるものは、吹き出して嗾しかけるので、大喧嘩となり、坊主頭も在家の信者も交りあつて命がけのつかみあひをさへはじめたりしてゐる。

衰れなのは、人にも高徳とゆるされ、我もさ思つてゐたが、その實は、ただ年のみ老つて、老いさらばつた形容が、禪家のいふ寒巖枯木ふうなので、いま更、なにも、一向に存ぜぬ、南無阿彌陀佛を稱ふれば、往生極樂にたがひなしの一點ばりが、寒さにわななきながら炬燵から這ひ出て、襟卷へ鼻水を垂らし垂らし、法然上人の「選擇本願念佛集」を、ただ凝と眺めてばかりゐるのがある。

と、その下寺の住持とも見える野卑な、坊主は、したりがほに師の坊に智慧をさづけてゐる。

「貴僧は耳は遠いし、眼はうとといし、最早、何をおさがしなさつても追ひつきはしませぬ。ただから仰しやいまし、南無とは、南無阿彌陀佛の南無である。汝は、わが宗旨の『南無』といふ字を盗んで、南無妙法蓮華經と申すこと、誠にもつて緩怠至極と、その事だけを、まづ第一番に仰しやられい。これは、餘人の氣のつかぬ、大事な義ゆゑ、みな、成るほどと、貴僧の高德を仰ぎます。」

「ぢやが、わしは、齒もないし、もぐもぐとしか聞えずば、それほどの大事を、むざと、してしまふのは惜しいわい。」と師の坊は鼻水をすする。下寺住持は、丸鼻うごめかして、

「いや、そこが愚僧の付け目でござる。愚僧が申出しては、中々、宗論開口第一番には申出せませぬ。折角の妙問を、貴僧に授けますのも、そのお年に免じてであつて、貴僧は、ただもぐもぐと口を動かされればそれですむ。愚僧がすぐ傍らに居て、お取次を致すので、いつて見れば、

愚僧の聲が、ずつと響きわたつて四隣を壓す——それだけでよいのでござる。貴僧はよい弟子を持たれたと褒められ、愚僧は名高い和尚になります。」

かゝる烏滸の痴ものが數知れないのだ。今少しは學僧もあつたであらうが、それは數においても、その野蠻さにおいても、彼らの押しの強さにも、割れ鐘聲においても敵しやうがないほど、淺間しいのが夥だしくゐた——

十六日の日は明けても、塚原草堂の朝は、恒にかはらぬ靜かさに目ざめた。

夜はまだ未明から、柵の外は、へしあひ、押しあひの人出であるが、今日の法論仕つるといふ觸出しの者から、柵内へ入れるとあるので、墨染の衣のものは、鳥が撒米に寄るやうに、眞つ黒になつて集まつてゐる。

なかには、香染のものもあり、きらびやかな袈裟をかけたものも、小法師の頸に經箱をかけさせたもの、抱へてくるものなどが前列に進み出で、そのあとに、入道、僧、土民らと、あとからあとからと續き、阿彌陀佛の怨敵とばかり押寄せ、待ちかねては鬨の聲をあげて、氣勢を添へてゐる。

柵の内は、墓原の古塚や、土饅頭は、積雪に蔽はれて、三昧堂の四邊は、清淨な、白雪を盛つた盆地であつた。といふより、一花の大白蓮華が、滿地をおほふやうに開きいでたるがごとく、折しも東天紅の空より、降りそそぐ光燿は、五彩の光りの雨のやうにて、平日は、見るも果敢な

くいぶせき板小屋の破れ堂も、聖者此處にましますと、天童降りきたつて扉を開かんばかりの、金色に照り映えて顯示されてゐる。

時しもあれ、その小屋も破れんばかりの音吐朗々と、

「妙法蓮華經、藥王菩薩本事品――」と唱し出された御經を、群衆は、頭の上から響き渡つて來たやうにハッとして思はず空を見上げたのだつた。

と、法師たちは、自分らまでが一同とおなじく、淺間しくも滑稽にも、思はず空を見上げて、掌を合せたのを恥ぢてか、

「開門、開門。」と、喧すしく罵りたて、騒ぎだした。

「本間殿はいかがなされた、本間殿はいかがなされた。」

と、わあわあと聲を張りあげて、法華經讀誦の三昧堂からの淸音を聞かせまいとするが、澄みわたる凛々たる讀經の聲は、消しやうもない。

かくては、法論せぬうちに、法華僧の歸依者が現はれるかも知れぬといふ懸念が持上つた。荒々しい振舞ひとなり、煽動となつて、

「柵を破れ、柵を破れ。」

「乘越して、寶僧を引き摺り出せ。」

わッわッと鬨の聲を立てるところへ、戛々と馬を連らねて、本間六郎左衛門重連をはじめ、一

門、郎黨どもが槍を小脇に掻いこんで走せつけて來た。

柵のなかへ、重連が馬を乘り入れると、待ち構へた群集は一度に續いて、ドッと雪崩れ込んだ。

「寶僧出よ。」

「邪法者恐れ入つたか。」

「謀叛人め覺悟せい。」

「今日は妖術では逃さぬぞ。」

――と、誠に秩序もなく、ありとあるさまざまな、叫び、罵り、悪口、騒言だ。直にも、草堂へ飛上らうとするものを、本間の手の者達は、乘馬で押へだて、押かへして、ともかく席につかせたが、草堂の軒の下まで居り重なり、重連は小高い場處に牀几を据ゑさせてゐる。

喧々、轟々、規律を知らぬ者どもが、我がちにいきりたち、雷電のやうに聲を限りに喚き散らし、四邊を震動させるので、はや咽喉がつぶれてしまつてゐるものさへもある。

日昭を從へて、扉を開かせた日蓮は、群集の頭を越して、いまや昇る日輪に、うちむかつて、手をあはせ、

「妙法蓮華經。」と唱へると、本間重連に一禮して後、その騒ぎの中へ聲をかけた。

「各人靜まらせたまへ、法門のためにこそ御渡りあるらめ、悪口などよしなし。」

と、おだやかに諭した。

本間重連も牀几から突ッたちあがつて、後の方の群集へ、大手を廣げて、
「靜まれ、靜まれ。」と制した。
例の、齒のないモグモグ和尙が、わななきわなき、ガチガチと顎の音をさせながら、下寺の坊んさんに押出されて、「いかに日蓮とやらん、汝が、第一の僻事は、何故に南無妙法蓮華經とは唱へるや。南無とは、南無阿彌陀佛のものではないか。」
顚へ聲が、他のものに聞える筈がないが、緣のはしに居る日昭は、それをきいて氣の毒げな面を伏せた。
だが、果敢なき邊土の僧は、それを、鬼の首でも取つたやうに、意氣揚々と、下寺の鼻の丸い彼の法弟は、「いかにや日蓮、只今の答へ仕つれ。南無阿彌陀佛の南無を、なぜ盜んだ。」
・突ッたちあがつた彼の、破れ鐘聲はガンガンと響いた。人垣にへだてられた、奥の方には、去る中婆なき事申すべからずと焦躁つた者もあつたではあらうが、彼の丸鼻法師は得意滿面でふん反りかへつてゐる。
「南無はこれ梵語にて、歸命と申す。發願回向の義であり、また敬禮とも申す義になる。なも、あみだ、ぶつとは、歸命、無量壽、佛と申す義である。」
と、說かれると、堪りかねて唯阿彌陀佛が、まだ解りかねる顏つきでゐる丸鼻坊主を押退け、
「阿彌陀如來こそ、佛法の敎主にてましますぞ。さすれば、南無阿彌陀佛ほど、有難いものはな

い筈ぢや。」
「阿彌陀佛は無量佛と申す。永遠の存在を示すときに無量壽佛、十方の光り限りなきを述べるときに無量光佛であるを總じて彌陀といふ。西方極樂世界にあり、淨土門にては、極樂往生を說いてをる。」
「さほどめでたく、有難き御宗門を、汝は何故、念佛無間と罵るぞ。」
唯阿彌陀佛は、首を伸し、顎をしやくつて言ふと、それにつゞいて、
「眞言亡國とは、いかやうな證文があるか、經論にあるか?」と、口々に呼ばはるのだつた。
「眞言宗は敎主を大日如來とす。梵語にては大遍照と申すことになる。胎藏大日を理法身と申し金界大日を智法身と稱し、宇宙の間に遍く通じ、すべての事物、みな大日如來の理智の顯現であると申す。」
僧達はよろこんだ。思ひがけぬ、各自さへよく知らぬことを說かれたので、わッわッと歡喜して、跳ねあがつて叫んだ。
「それ見よ、それ見よ。橫道者、恐れ入つたと申せ。」
「さりながら、眞言宗の三部經、大日、金剛頂、蘇悉地經は、大日如來の說かれたのではなく釋迦如來がお說きなされたものである。釋尊五十年の說法を三期にわかち、法華經を、それらの經の藏、經の王となされてゐる。」

「ば、ば、ばかを申せ。」

いきりたつた一人の法師は喚いた。「大日如來が說かせたまふたのだぞ。」

「さらば、大日如來の出處は何國、しかして親は何ものぞ、生れたのは何時ぞ。亡せられたは凡幾年前に當るぞ。」と日蓮は、激したる色もなく問ふた。

うん、とつかへた法師は瀧のやうな汗を流し、助言を探ねて見廻しても、口を出す者はなく、彼が知るところが深くあつて罵つたとばかり思つてゐたので、手に汗を握りながら黙りかへつてゐる。

と、日蓮は、「生死の處も知れざる、もとより實體のない、名ばかりの佛である。大日法身が、始終なき常住の佛である故尊しとならば、生としいけるものみな、その本體の法身は常住、一切衆生を無常のものと思ふは外道の考へである。」

聲は淸しく、眼光は爛々として日蓮は說きつゞける——

「人間の爲に惱み、人間のために敎へを垂れさせ給ひし、大正覺、大世尊をおきて、實體のなき佛、名ばかりの阿彌陀、大日に憑むところはない。本朝の根本大師（傳敎）の御釋には、有爲の報佛は夢中の權果、無作の三身は覺前の實佛として、阿彌陀等の有爲無常の佛をば、大いにいましめおかれた。」

「おのれ邪僧、なにを吐すか。弘法大師は獨鈷を投げたまへば、不信者の魚は石になり、芋は饅

となる。そのあらたかなる靈驗を知らざるか。」

百姓入道のいきりたてば、

「汝が申すところの、高野の大師は、釋尊を、未だ迷ひの中にある佛といひ、その弟子正覺は、法華經は大日經の沓取りにも及ばず、釋尊は大日如來の牛飼にも足らぬと誹謗いたした。釋尊は無明に迷へる佛にて、大日如來の牛飼にもたらずといふ慢なる文などあらう筈はない。經敎は、西天より東土に泊るの時、譯者の意樂に隨つて經論の文に不定がある。後秦の羅汁三藏と申され し御方、我漢土の佛法を見るに、多く梵本に違へり。我の譯するところの經、もし誤りなくば我死して後、身は不淨なれば燒けるといへども、舌ばかりは燒けざらんと常に說法なされたが、終に燒き奉つたとき、御身は皆骨となつたが、御舌ばかりは、靑蓮華の上に光明を放ちて、日輪の光を放つた。故に、この奇特なる三藏の譯せし法華經は唐土に弘まらせたまひしぞ。されば、わが延曆寺の根本大師、諸宗を責めたまふに、法華を譯せし三藏の舌は燒けざる驗あり、汝等が依る經典はみな誤れりと破したまふ。」

と、澄める聲はます〳〵澄んで、柵の外まで高からず低からず流れ傳はるのだつた。なほ、つゞけて、

「また、弘法大師、唐土にあつて投げられた三鈷が、八萬餘里の海上を越し日本に至りしとか、或ひは般若心經の經旨を書けば、疫病が止みしなどとは、佛道に入りて理非を勘へ見るに、佛法

の邪正はかならず得通自在にはよらぬことである。人を毀り、法を謗じては、悪道に墮つべしと
は、これ弘法大師の釋である。その人却つて法華經を戯論といふは、自ら地獄に墮するの疑ひな
いではないか。」

「弘法大師は兎に角、法然上人こそ、我國第一の聖者でござる。唐土の善導大師の御生れかはり
であらせらるゝぞ。」と、後の方から仲上つて、咽喉も裂けよと叫んでゐる。

と、その者に、日蓮は、「汝、心を靜めてよくきけよ。」と、その方にむかつて、

「釋尊滅後、多くの祖師先德あれど、唐土揚州の善導和尚こそ、唐土第一の高祖なりといふ。彼
は、法華經を捨て念佛者となつたものである。彼が一度、彌陀の名號を稱へれば、三體づつの佛
口より現れ、毎日の所作は、阿彌陀經六十卷、稱名十萬遍は缺かさず、戒律はすべて保ち、すこ
しも破りしことなく、精進潔齋、生涯女を見ず、六十年不眠と自稱いたした者であるが、この善
導といふ、法華經大謗法の者は、大罪報にて、忽ちにものに狂ひ、寺の前の柳の木に登つて、自
ら頸をくくり、身を投げて死にうせしぞ。」

聞くものは、みな初耳であるほどの無學者である。呆然としてゐるものもあつたが、信實とは
せず。

おのれ、邪僧、妖僧、賣僧、念佛怨敵と、怒濤のやうにうなるのを、

「靜まれ人々、善導、最後臨終の言に、諸苦に責められるこの身厭ふべし、暫くも休息なし、

卽ち居所の寺の前の柳の木に登り、西に向ひ願ひて曰く、佛の威力を以て我を取り、觀音、勢至
來つて我を扶けよと、唱へ終つて青柳の上より身を投げ自ら絶す。云々とあるが、三月十七日頸
を縊つて、飛びたるに、縊り繩が切れたか、柳の枝が折れたか、大旱魃の堅い土の上に落ちて腰
骨をくだき、二十四日に至るまで、七日七夜の間、悶絶し、地を蹴り、おめき叫んで死に失せた
が、念佛者はこの師の跡を踏むか？」

念佛者のなかでも、印性房は、今日の問答の棟梁のこととて、流石に、それらの果敢ない者ど
もの言ふことに顏赤らめてゐたが、それすら法華宗で立てる六卽の位――穢土、報土との區分を問ひ詰き明されてから、

「聖道門の敎へは我身に叶ひがたいゆゑ、淨土門の敎へを信じ、まづ淨土に往生いたし、そこに
て法華經を聞き無生忍を得ようと存ずる。」

と言つた。いつて見れば、むづかしい道の修行はせず、なし易い、念佛で往生して、淨土へい
つてから悟の境界にはいるといふ、僧侶としては虫のよい考へに、日蓮は微笑みさへうかべて、

「穢土にある間は法華經等の諸經を捨て、敎主釋尊を閣いて、淨土に往生してから法華經を聞い
て、無生忍の境界に入り得ようとは、その義は、何と申す經文に依られる。」

「依りどころは觀經でござる。また、淨土に往生してから法華經を聞く證據も觀經にござる。」

「印性御房よ。」と、日蓮は、敎へ諭すやうに、

「観無量壽經は、世尊が成道されてから四十二年の説法の内であるが、法華經はその後の八箇年の説法でござる。御房のさとされる観無量壽經のなかに、どうしてまだ説かれぬところの法華經の名をさして、捨てよ、閉ぢよ、閣け、抛てと説かれやうぞ。教主釋尊は、四十二年の間には法華經の名さへ説かれず。後に、法華經以前の諸經を指して、未だ眞實を顯さぬと仰せあり、法華經は已に眞實を顯したものと仰せられてあるぞ。」

「法然上人は、末法の機根は、聖道門の修行に堪へぬから、末來流布の、法華經を、捨てよ、閉ぢよ、閉けよ、抛てと申されたもので、法然上人の慈悲の教へでござる。これを信ずれば、必ず淨土に往生が出來、全く地獄に墜ちるやうなことはござらぬ。」

「法華經の意によれば、法華經以前の諸行も、観經の念佛も共に捨て了り、法華經にて釋尊出世の本懐を説き顯された。日蓮が、一代聖教、法華經を拜すれど、法華經を抛てよ、門を閉ぢよと説かせたまひし經文を未だ見たることなし。果して其の文なしとすれば、法然上人の頼みとする彌陀本願の誓文は虚妄となり、法華經の、人若しこの經を毀れば無間地獄に墮つるといふ、釋尊の誓誡を免かれ得まい。されば、その教へを信ずるもの、弟子、信者らもまた無間地獄へ墮つるであらう。」

説き終つて日蓮は、印性房にいつた。

「今すこし、分明な證據の經文を出して、法然上人の、阿鼻の炎を消されよ。」

印性房は默してしまつた。日蓮は、他の質疑に、直に語を續いて、

「淨土宗は一向に阿彌陀如來を本尊とする。法華宗以外の眞言などの七宗、並に淨土宗などでは釋迦如來を父とすることを知らぬ。例へば、三皇以前の人々が、禽獸のやうであつたのとおなじで、鳥は鷦鷯のやうに劣つたものでも、鳳凰のごとき勝れたものでも、おなじで父を知らぬ。獸は、兎のごとく劣つたものでも、獅子のごとき勝れたものでも、共に父を知らぬ。人間も、三皇以前は、大王も小民もその父を知らず、天台宗以外八宗ともに、その父、久遠實成の本尊を知りをらぬ。」

「もつといへ、横着物！」

「佛敵賢僧め、眞言亡國、念佛無間の證文をもつと出せ。」

と罵るより外は、言ふことを知らぬ者が多い。

「眞言は法華誹謗、正法に背く故である。正法に背けば亡國の法である。凡そ、謗法とは、謗佛謗僧のことにて、三寶は一體ゆゑ、法に背けば同時に佛に背き僧に背く者であると、涅般經に説かれてある。法華經には、一切世間の佛種を斷つとある。念佛無間と申せば——」

と、日蓮は一々、彼等が申す様を、徴じあけて承伏させてゆくのだつた。

「正法誹謗は、無量の五逆罪を犯すより重い。三千世界の衆生を殺害すれば、等治、黒繩衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大熱の七大地獄への因となれど無間に墮つることはない。阿鼻と申す無間地

獄への業因は、經論の掟、五逆七逆、因果撥無、正法誹謗の者である。父母を殺し、僧を殺し、僧團の和合を破り、佛の體を害すを五逆罪と申す。その一逆を犯しても無間地獄に墮ちる。その一戒をも犯さず、道心堅固に後世を願ふものでありとも、法華經誹謗の者は無間に墮ちて展轉無數劫とある。」

靜かなれど大洋の水のやうに、日蓮の說くところは澎湃として、群集はその深さ廣さに言ひやうのない信賴を持ち、柵の外の人々にまで、手に取るやうに響きわたる大聲は、いたづらに怒號するのでなく、湧きあがり、溢れて滔々と落下する瀧の、おのづからなる奔流の勢ひである。爛々たる眼の光は、暗きに居る者へ、光明を與へようとする、心の醜草を刈る慈悲の利劍でもあつた。

「最勝經に、若し無法に佛の弟子を惱まし、罵り、衣服食器を奪ひ、若くはその弟子に供養するものを迫害する王あらば、卒に他國より敵を起させ、また、自國にも內亂、疫病、饑饉、時ならぬ風雨、闘諍などを起させ、間もなくその國は亡ぼさせると說かれてある。この島の人々、何と思はるゝぞ、恐るべし、恐るべし。」

おゝ、貧によと、たちどころに發心、歸依のともがらは、手を合せて日蓮を拜すのだつた。

それを見ると、かなはでもと、土僧たちはまたいきりたつて、

「眞言は祕密と申すぞ。その金言を、賣僧が知らうか。眞言とは、眞言とは——」

と喚くのを、日蓮は、

「眞言とは、世尊の舌相より出でし言詞は、みな眞言である。法華經に、治生の產業はみな法華經の眞理に皆叶ふ、と說きたまふ。しかれども、眞言宗の眞言は名ばかりの眞言である。抑、大日の三部を密敎といひ、法華經を顯敎といふこと、その金言の出所を知らず。所詮、眞言を密といふは隱密の密か、微密の密であるかであるが、物を祕すに二種ある。一には金銀など藏に籠むる、これは微密である。二には、疵、片輪を隱すは隱密である。然れば則ち、眞言宗で申すところの密といふは隱密である。微密の密は、敎法の心髓、文義の綱骨、法華である。法華經法師品四卷に、藥王この經は諸佛祕要の藏なりとあり、五ノ卷安樂品には、文珠師利、この法華經は、諸佛如來祕密の藏なり、諸經の中において、最もその上に在りと說べたまひ、壽量品にはいはく、如來祕密神通の力と。如來神力品には、如來一切祕要の藏とある。なほこれに加へて、眞言の高祖龍樹菩薩は法華經を祕密と名づけて、二乘作佛あるが故にと釋せられてゐる。然るに、眞言を祕密といふは、二乘作佛を隱して說かれないからである。」

「それほど尊い法華經が、どうして傳はらなかつたのだ。」と、まだ止めない。

「法華經は梵本では長さ十六里もある。唐土へ傳へる時、天險多く、路も甚だ遠く、餘儀なく略された。ことに、經は譯す者によつて長短がある。玄奘三藏は四十卷の般若經を六百卷に譯し、羅什三藏は千卷の大論を百卷に縮めた。故に、善無畏三藏や金剛知三藏等が、法華經と大日經と

は、理はおなじだが事相は大日經が勝れてゐるといつたりとて、梵本と漢譯と、兩本に通じて申したかが疑はしい。」

日蓮は更に語を續いて、

「なほ疑はしくは、いかやうにも問はれよ。眞言亡國と申すことは、龍樹菩薩の大論九の卷を見よ。その邪法たるを知れ。そも佛道の敎主は釋尊であることは、天に二つの日なきが如く、國に二王なきと同じである。十方世界の國王、一切の菩薩、二乘、人天等の主君である。行の時梵天左にあり、帝釋右の傍にあり、四衆八部後に從ひ、金剛前に導き、八萬法藏を演說して、一切衆生を得脫せしむ。何をもつて我等凡夫の己心に任せしめんや。又、迦門、爾然の意を以て論ずれば、敎主釋尊は、始成正覺の佛なり。」とうやうやしく合掌した。

今朝までの勢ひでは、問答はいつはつることか、日蓮師弟は無事で居られるか、塚原の野は修羅場となつて、三昧堂は炎ともなるかと思はれたのが、大風の吹き過ぎたあとのやうに押靜まつて、群集は風に靡いた草のやうに柔らぎ、そこ〻に、ぶつぶつ、ざわざわと低くつぶやくほどのものになつた。

もとより、難問答に巧にて、その心長るところなしと、法華經に說かれたる上行菩薩と、末法救主の無礙の辯とを示現する日蓮に、鎌倉の上人、學僧よりはるか劣つた人達のたちむかふ事として、サクサクと、利劍で瓜を切られるやうに、二言と言ひかへすものはなかつた。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經――」

群集の中から敬虔な音聲で、題目を稱へるものが、段々と增して來た。

僧侶のなかにも、袈裟平念珠を捨て、題目を口にしてゐるものがある。

「妙法蓮華經。」と、一きは高く、朗々と誦しあげた日蓮は、

「この題目の、妙法蓮華經と申すは、我等の心の本性であり、廣くは、一切衆生の心の本性の、八葉の白蓮華の名であると、佛は我等に敎へさせたまふ。略して經の題目を唱ふれば、一部の功德が收まつてゐると、妙樂大師が申された通り、一遍の題目は、法華經の一部である。また、蓮華の花の八葉は、八幡大菩薩にてましまし、中臺の蓮實は、敎主釋尊にておはします。」

妙法蓮華經、妙法蓮華經――と、題目の聲は高まるばかりだ。

「日蓮が、無上の悅びは、經文に示すがごとく、末法の世に法華經流布の曉を待つことであり、また、無上の悲みは、闘諍の盛んな末法に生れて、この國の修羅道となるを、見ねばならぬことである。今日蓮は、敎主釋尊、多寶如來、十方の諸佛の貴き御使であり、世間には一分の罪科なき者であるに、國中の諸人に惡ませ、兩度までの流罪に當て、或は小庵を燒き、首をはねんとはせられたが、この科とは、世を救ひ、人を救はんと、法華經を弘めやうとした、それだけの科である。」

「勿體ない、勿體ない、勿體ない。」

頭の上に手を合せて、大地にひれ伏す者のなかには、昨日まで、日蓮の素ッ首とつて、恩賞にあづからんなどと、目論んでゐた痴ものたちもゐた。

「お許し下さい、上人さま。」

「おゆるしください上人さま。」

あつちでも、こつちでも心から懺悔してゐるのは、こんな貴い聖人を、乾し殺さうとした罪科は、どんなに深い罪なのだらうといふ思ひだつた。

勝つはずにて來た眞言宗の法師念佛持齋者たちは、こそこそと、いつしか退散してゐる。殘るものどもをも、本間の家臣たちは追ひ拂つてゐる。問答は果てたのだ。

本間六郎左衞門も、聽問してゐたが、事は果たと見て、郎黨どもを從へて、やをら、歸り路につかうとするのを、日蓮は大聲に呼びとめた。

「本間殿、重連殿。」

六郎左衞門は、群集の踏みあらした雪の大庭を、くるりと、乘つた馬を廻して來た。

「何時鎌倉へはお上りあるぞ。」

重連は、なんだ、左樣の用かといはぬばかりに、

「七月ごろにもなりつらうか。大體、今年の夏の農作の見越をつけてのち、罷り上らうと存じてをる。」

「はて、それは惡い。只今軍のあらんずるほどに、急ぎお上り候て、高名したまへ。」

「奇怪な言を仰せらるるぞ、軍などあらうともおぼえず。」と重連は空うそぶいた。

「いやいや、弓箭とる者は、公の御大事にあひて所領をもたまはり田畠も作れ、田をつくりるて軍にはづれたらんにはいかに。」

重連は物もいはず、急遽と馬を走らせて去つてしまつた。

狼藉な群集が、踏みにじつていつたあとから、塚原野の氷は解け、春の訪れてくる道がついたのだつた。

法華經歸依者は、その日から、ぽつぽつとたづねてきて、日興からも教へをうけてゆき、千日尼や阿佛坊に連れられて來るのもあつた。

「わしは、あのお上人のことを、惡僧などと、勿體ないことを、知りもせいでいつたことがあるが——」と、心配しながら、そつと日興に、以前は法華誹謗者であつても、歸依することが出來るかどうかと訊くものも多かつた。

「まあ、なんと有難いことでござらうやら——」

と、千日尼は繰返し〳〵、そればかりを言つてゐたが、だからとて、決して、念佛持齋者たちが、憎みを捨てたのでないことはもとよりだつた。

阿佛坊はある日、ふと、不審さうに、「師の御坊。」
と問ひかけて、
「立正安國論を拜しますると、自ら叛き、他よりの侵逼を仰せられてをりますが、昨日の問答の節、佐渡一國の者どもに、自界叛逆とも申すべき難のあるやうに仰せられましたが――」
「おゝ、左樣に申したであらう。」と、日蓮は、開目鈔執筆の手を止めて答へた。
「それに、本間重連にむかはせられ、田を作る時でない、速かに鎌倉へのぼれと、軍のあるやうに仰せられたが――」
阿佛坊は、いかにして師にはそれを御存じであるといつた。
「されば、最明寺時賴殿、三浦一族を亡ぼしたる、寶治の合戰より既に廿六年。今年の二月には又合戰あるべき徵あり。藥師經にいふ自界叛逆難とはこれである。」
といつてのち、日蓮は聖人ではないが、法華經を說のごとくに受持すれば、聖人とも申せようと、
「これは、この日蓮が、去る年、九月十二日、鎌倉にて御勘氣を蒙つた時に、大音聲を放つて呼ばはつた事であるが――日蓮去る時は、七難必ず起るべしと申したが、わづかに六十日乃至百五十日にこの事起る祥ありとは、歎かはしいことである。」
阿佛坊は、師の坊の申される事に、よも、嘘りはあるまじと、この事、まことに事實とならば

本間はいかに驚くかと期待をかけてゐた。
一月は、十六日の未明から人の群れあつまりあつてのち、三昧堂は、以前の靜寂を破られがちであつたが、ある夜、ふと、日蓮は、
「伯耆房よ、筑後房の呼ぶ聲がきこえるではないか。」と、後をかへりみていはれた。
「筑後房は、宿屋の牢に、まだ籠められてゐると申しますが――」
それでも日興は、そのままにおけない氣がして、松火をともして堂を出ていつた。そして心のうちに、火もないなかに居た時のことを思つて、夜中に灯をもつて、この野原を歩くことの出來るやうになつたのを、忝けないことに思ひ、正法の弘布のすみやかなことを思ふのだつた。
と、何處ともなく、
「伯耆房よ――」と我名を呼ぶ聲が、かすかにかすかにきこえてくるのだつた。
おゝ、まがふこともない日朗の聲だと、彼もまた一ぱいに聲をあげて、
「おゝ、筑後房よ――」と答へた。こだまではない。たしかにその答へが來た――
日興は、手にもつ松火を振りかざし、火花が散り、焰がすこしでも大きく赤く見えるやうにして急いだ。
最初は我聲の山彦かとも思ひ疑つた、互の呼びあふ聲の岨まりが近くなつていつて、向ふから轉びころびして走せてくる、日朗であらう僧形の黑い影を見るところまで近づいた。

「筑後房、よう無事に來られたなう。」
日興は、まだ、かなり合間のあるところから、もう語りかけてゐる。日朗は、嬉しやと思つた拍子に、脚がクタクタと、たわいなく萎えてしまつて、日興が眼に見るところで、二度も三度も膝をついた。
「しつかりせられい、よう歩いて來られたな。」
日興が片手に兄弟子の體を抱きあげると、日朗はさめざめと泣きくづれて、
「笑ふてたもるな、師の坊の御前へ出ては、かう、甲斐なうてはならぬから。」
「何を笑はうぞ。こなたも長い苦勞をされた。上人も、それはそれは——何とも口には盡せぬわえ。」
「さう御座らう。さ、さ、急いでお前へ連れていつて下され。わたくしごとを言ふてゐる暇はない。」
「おゝさうぢや。どのやうにお待ちかねのことであらうぞ。筑後房の聲ではないかと、御不審なされて、わしを此處までおつかはしなされたのぢや。」
人は、一里も二里もへだたつたところに呼ぶ聲の、きこえやう筈はないといふであらうが、感通力の非凡なる我師が、心を凝して御筆をとられる時、その精神の働きは、全くもつて凡下の想像するところのものではない。ことに、更けしづまつた野中へ、幸ひに降雪もなく、風の荒びさ

へないをりとて、早くも師をしたふ日朗の呼聲がお耳の金線に觸れたものであらうと二人は言はずして解してゐる。
日興は、兄弟子日朗を肩にかけて急ぐのが嬉しかつた。思へばまだ拾歳の昔、駿河岩本の實相寺の小僧であつたころ、日蓮が「立正安國論」の準備に、一切經をお調べのために長く實相寺に御滯在あつて、その間に、日朗がまだ吉祥麿の童形でかしづく孝行の羨ましさから、いよ〳〵鎌倉へ御引上げときいて、途中の竹藪の中に一日隱れしのんでゐて、上人のお袖に縋つて、どうでも弟子にしてくだされとせがんだのだつた。
いま、日朗を肩にかけて行くと、二歳年上の、その上の優しい童形の吉祥麿がおもひうかべられて來て、ありし日がしきりに懷しくたまらなくなつた。
「筑後房よ、大丈夫か？　もそつと背に乘られい。」
「いや、何ともない、わしはどうならうともよい程に、早う御草庵へともなつてたもれ。早う。早う。」
日朗は、目もチラチラするほど勞れきつてゐるが、それでも焦躁つた。
また少しゆくと、日興は心もとなくて、
「筑後房よ、何處ぞ切なくはないか？　息ざしが苦しけぢや。」
「なにを言やるぞい、早う、早う、導かれよ。」

「さらば、もそつと背におはれてしまうたがよい。灯などなくとも、わしは馴れてゐる道ぢや。」
「いや、いや、この灯は大切なぞ。師の御坊が、途中にて火が見えぬやうになつたことを御覽じたらば、どのやうにお案じあるか知れぬ。わしはこのままでよい。引き摺つていつてもよい故、もそつと早う歩め。」
日興はいはれるままに歩いたがまた、
「筑後房よ、たしかにおじやるか？　氣はたしかでおじやるか、もう、つい其處ぢや。眠つてはならぬぞ。眠つたらば寒氣に凍へてしまうぞ。何か話されい。」
「話せとて――そなたに話さうより、早う、師の御坊に逢ふて、そして語る。早うせい、早う、早う。」
日朗も幼けない昔にかへつて心おきない日興にわやくをいつてゐる。
日朗は、塚原草堂のありさまを一目見ると、日興の肩に顔を押あてて、しとゞに泣きぬれた。薄い衣類を通して、肌に熱涙が浸み入つてくると、日興も、堪へきれぬおもひやりの涙を流した。
――思へばよくも御凌ぎ遊ばされた――と、師の上を思ふにつけ、土の牢に三月越し囚はれてゐた日朗が、北國の極寒に、よくも歩みつゞけて來たものよと、彼を抱へる手に、ヒシと力を籠めて、

「筑後房よ、元氣をお出しやれ、上人の御心を勞らはしてはならぬ。さ、急がうぞ。」
「待つてたもれ、待つてたもれ。」
日朗は立ちどまつて、日興に縋つたまま、心ゆくまで慟哭したが、やがて、
「伯耆房よ、ようお仕へ申してくれたぞ。さぞ、さぞ心勞いたしたであらうな。」
兄弟僧は手を握りあつて、互ひの肩に面を伏せた。
「我等が祈願は、この邊土にて、御命失なうやうの事あつてはならぬといふ、それ一つぢや。」と、日興は雄々しくも言つて、「師僧は、此島にある日蓮は、靈の日蓮ぞ。上行使命を果すべき日蓮ぞと御仰せである。その魂を、法弟も持たねばならぬ。」
「いふまでもないことよ。不覺の涙は、此處にて捨てたぞ。」と、日朗も涙をはらつて歩みだした。
過ぐる日の群集に、蹈みかためられた野面を、歩むに辷る日朗をたすけて、草堂に近づくと、なかからは、
「伯耆房歸つたか？」と聲かけながら、やをら座をたつ氣配がして、
「日朗も參つたな。」と晴やかな顔を、日蓮は戸を開いて差出した。
「おゝ、お師僧さま。」
日朗は走りよつて、緣の上の師の足の爪さきに手をかけ、その上に顔を重ねて伏せた。
師と法弟との、もの言はぬ交流は、何を聞かねど語らねど、何もかもを言ひつくし語りつくし

た瞬間だつた。日朗が佐渡へ來た目的は達したのだつた。

心付くと、上人は日朗の手をとつて、立たせやうと屈まれてゐる。日興が後から抱上げて、

「筑後房、堂内にはいれ。」と言つてゐる。たつた、一瞬の間であるにしても、日朗は我をわすれてゐたのを氣づいて、師の御手を頂きながら、

「御健勝の御顔を拜し、あまりの嬉しさに夢見心地になりまして——」

と、申し譯を言ひながら立上つた。

「土の牢の冷はおもひやらるゝに、よう、この邊土まで訪ねくれたな。」

「餅を丸めたやうに、辷り轉がつて參りましたので、十日たゝぬうちに、越後の寺泊へまで着きましたが、海が荒るとて、二日も三日も船待ちいたさせられまして、前に見える島戀しく、——足摺りして嘆きましたが——」

「おゝそれで、夜夜中、知らぬ土地をさまよはれたのぢやな。」

日興は、粥を手早くあたゝめてゐたが、あれやこれやと、問ひつ問はれつして、佐渡へ來てからのことども、十六日の問答の事も語れば、鎌倉のことを、宿屋の牢に居ても、深澤のはからひで、何もかも手にとるやうに聽いてゐると日朗は、知るかぎりを語つて、日昭からの言づて、四條金吾の見送つてくれたをりの言葉も言ひそへて、背負つて來た品々を取出したりした。

「勞れつらうに、もはや、寢ねよ、明日また聽かう。」と、日蓮がいへば、

「こゝにゐる日數を、二日としてございます。たんだ二日で、何が物足りませう。牢の中に歸れば、ただ凝つとしてゐて御經讀誦だけの日常でございますゆゑ、わたくしは眠りませぬ。」

と日朗は云ひ張つてゐる。

待つ日はいたづらに長く、待たぬ日は惜しやと思ふ間に早經つて、日朗は杖と草鞋を氣にせねばならなくなつた。

「雪履もまだよう乾かぬに。」

と日興も呟やいてゐる。だが、乾いた藁沓は千日尼が用意してくれた。

日朗は目にたつて肥えた。日蓮の傍らに居るといふことが、磁石が鐵を吸ふやうに、この法弟の心を富ませ、鎌へを與へるので、彼は荷ひきれぬやうに學問をし、突きあたつてゐた難解の經文の釋をうけて、額を輝かしてゐる。

「伯耆房よ、他の者が歸れば、この次にはそなたがお使ひの番ぢやぞ。わしは、行き歸りして一ケ月と申しておいたで、この難儀な冬が去れば、途中がずつと早くなるで、この次に參るをりはもそつと長くお仕へ申せるぞ。」

と、歸ればまたすぐ、折返して訪でくる決心でゐる。宿屋奉行への約束にもどるまじと、たゞそれだけで歸りを急がねばならなかつた。

「日朗よ。」と師はおごそかに、
「深澤理文字郎殿にも、阪川兵衛にも、四郎にも申せよ。日蓮が佐渡に流されしは、決して故なきにあらず、佛敎をきはめて佛にならんずる道なり、必ず赦免など願ひ出づべからず。日蓮は安房の國に生れていたづらに朽ちん身を、法華經の御故に捨てまゐらせんこと、石に金をかふるにあらずや、なげかせたまふなと申せ。」
「かしこまつてござります。」
「法弟どもに申さんよりは、各々獅子王の心をとり出だして、いかに威さるるとも怯づるな。獅子王は百獸に怖ぢず、獅子の子またおなじ。彼等は野干の吼ゆるのであり、日蓮が一門は獅子の吼ゆるのであるぞ。」
「辨殿に傳へ、屹度みなに申しきかせます。」
名殘は盡きない。遠く鎌倉へ歸つて、何時また來られるか知れぬと思へば、胸もせまり、足も重い。
けれど日朗は、名越で、金吾賴基に別れた時、賴基が言つた言葉を忘れてはゐない。
――鎌倉、佐渡と、一千里の路のへだては、歩まねば通へぬが、我等の心は、日に夜に佐渡に通ふてゐる。ぢやが、一千里の路も遠しとせず、後々と斷絶ず行きかふものがあればあるほど、宗門は擴められ、法華經持者の力强さを、知らせる道でもあらう――

日朗は、此處に居ることがかなはねば、賴基のいつた通り、幾度でも來たい。必ず來やうと思つてゐる。今お別れをつけると、益々その言葉に勇氣づけられるのだ。
「四條どのは、よい言をいつてくださつた。」
と日興も悅んでゐる。誰にか代つて、師のお側を離れる時の、大きな慰めの言葉だと思つた。
それをまた、阿佛坊や千日尼は、上人が鎌倉へお歸りになつた後には、自分たちに當はめられる言葉だと添けながつてゐる。
日朗が塚原を出ると、日をおかずに賴基が着した。
「筑後房に、途中で對面もいたすかと、隨分心がけたが、それは殘念な。」
と、日興にこたへながら、旅裝を拂つた賴基は手をついて、「まづもつて、御尊顏を拜し――」
と、そのまゝ面をあげかねてゐた。
「この寒國にて、お頭の疵の跡、御腕の折れた節の、御痛みを引き起すこともあらうかと、日日御案じ申上げありました。御體に御違和はおはしましませぬか。」
といふ賴基を嬉しげに見て、
「公務をもたるゝ御身が、この邊土までおたづね下さらうとは、いつとてもかはらぬ御志――」
と、流石に上人も目をうるまされた。
金吾賴基は日興にむかつて言つた。

「師の君の御顔を拜したらば、あれも、これもと、承はらうと思ふ事が、胸に餡のやうにかたまつてござつたが、いかゞしたことやら、嬉しいと思つた刹那に、氷のやうに解けてしまつて、はて、何から聞えあげようやら。」

日興もほゝゑみかへしていふ。

「それは、筑後房も、さういふてをられました。何から申上げてよいやら、一向にたはいもないことばかりが出てくると。」

「いやいや、やつと解り申した。」と、頼基は晴れればれといふ。

「上人が、屈しおはさうなどとは、夢更思ひませねど、鬼畜のごとき人々に、かこまれて、申しやうもなき御難澁と承るものから、いかばかり御身御衰弱もやと、案じ暮して、夜も寢も安らはござらぬが、遠くゐる我等の日々でござりまする。ちやゆゑに、甲斐なき者ながら、御慰め、御勵ましもと、思ふ一念も御座るゆゑ、御健かなる御様を見上ぐるにつけ、法華經流布の聖者はかくこそおはしますかと、我等ごときが、我等ごときが――」

頼基は珠數を額にいたゞいて、濡れてくる眼瞼を伏せるのだつた。

日蓮は莞爾として、

「首楞嚴經には、阿脩羅王世界を執持して、大梵天王や帝釋天王と諍ふとある。阿脩羅王は變化によつて天人と同様な者であるが、この能く、大梵天や、帝釋と戰ふほどの大阿脩羅王が、禪宗

念佛宗、律宗などの棟梁の心中にまでつけ入る。本化の大菩薩、釋迦、多寶の諸佛の御加護にあらざれば防ぎがたい。日月は四天を照す明鏡ゆゑ、諸天も日蓮を知りたまひ、日月は十方世界の明鏡であるゆゑ、諸佛も日蓮を御承知である。されば、日蓮は、いかなるをりにも、聊かも疑ひをもたず、不安などあることはない。但し――」

と、例の、底力のある深い聲で、

「日蓮過去の業つきずして、流罪その他の難にあへば、教主釋尊、御衣の袖をもつて、之を覆ひたまはるか、去年九月十三日夜中の、龍の口の虎口をも脱れしぞ。」

三昧堂のなかに鼎座した師弟は、蓮華の莟のやうに、三人が合掌した。

おゝ、それを何で忘れやう。我等弟どもと共に、上人御最期と同時に、我らも腹かつさばかんと存じたをりの、あの不思議な奇瑞！

まこと、我師の仰せられるごとく、諸天諸佛、ことに教主釋尊、法華流布の聖者の使命を守りたまふこと紛れもなし。あら尊や、我もこれより、聊かの疑ひも不安も持つまじ、一心に法華教を信じ、聖者を御守り申すべきぞと、もとよりゆるぎなき信心の金吾頼基は、ますます歸依を深めるのだつた。

「三郎左衛門ノ尉どの。」と、日蓮は慈しみぶかく、

「殿とは、幾日ともに居たとても、何時歸りたまへとは申す日はあるまいが、先の日も、本間重

連にきかせつるが、世の中の亂れの祥が見ゆるによつて、早う歸られねば叶ふまいと存ずる。」
「さ、仰せらるれば、北條殿一門のうちにても、恒に疑心暗鬼、六波羅殿がどうのかくのと密めき申しをりまする。北條時輔殿は、庶兄におはしませど、時宗公の下につきおはすのを、御嘆息あるやにて——」
「賴家を殺し、實朝を弑し、前には義經、範賴と、源家の骨肉を倒し、梶原、畠山、和田、三浦と、功臣を退き、天下の治平に名をかりては、承久の罪科をもおそれざりし鎌倉幕府の一門は、見よ、日ならずして又も兄弟相鬩ぐぞ。忠義厚き其許は、早く歸らねばなるまい。」
と日蓮はいつた。

眼に見えない光線の放射——さうもいへるものが、塚原三昧堂からは、何時も放出されてゐる。
それは、法華經眞理のひらめきであり、日蓮大德の强力な、破邪折伏の精神力のみなぎりでもあるが、汲みても〳〵盡きない師と弟子の恩愛のしたゝり、慈光でもあるのだ。
一夜を、師の膝もとに明かした金吾賴基は、雛僧のやうにクリクリ働いてゐる。日蓮の好物なる茶を持つて來た彼は、朝の淸めを手傳つてから、日興が白湯が沸つたと敎へると、白湯をそそぎ爽かな香と色を汲んで、差し出すと、日蓮は淨器のを手づから釋尊の像に供へ、自分は金吾の給仕で甘ゆに味ははれてゐる。

「富木殿御預りの御著述、また、わたくし御預りの御量ものを、時によりましては、法弟檀那に披見いたさせてもよろしうござりませうか。」
「目錄に引きくらべてお見せあつて、時には寫しおくやうに申聞けおかれたい。」
さう答へた日蓮は、書きかけの著述をかへり見て、
「この開目鈔こそは、まことに、日蓮にとつては、この書をなさんために佐渡へ流されしかと思ひ存ずるほどの傑作である。これは、釋迦、多寶、十方の諸佛の、未來日本國當世の映し給ふ明鏡なれば、わが魂魄が有緣の弟子におくる記念と見よと書き殘してゐる。この書が書きあがればこれは、和殿の手許にて保存をお賴みする。」
金吾賴基は、茶をいれながら、假初に聽いてゐたので、ハッと、手をつくと、
「誠に思ひまうけぬ大切な儀をうかがひまする。開目鈔の御義は、上行開顯、內證相承の本化の菩薩の御宣言と、愚存仕ります。それほどの御大事の御書を——」
賴基は思ひ入つたさまに言ふのだつた。
「仰せつけは、身に代へて御守護仕ります。御開目鈔を失ひまするにおいては、賴基は日本における、法華經第一の怨敵、正法阻害の惡魔外道と相成りまする。一度立歸りて後、身を謹み、再度御預りに罷り出まする。」
我師日蓮上人、いま、本化上行としての智眼最勝、忍難最勝、慈悲廣大を說き、末法の大導師

としてたちたまひ、正法護持、末法衆生化導、大法建立の一大事因縁を、明かにさせられる大著を、守護する役目は、身にあまる光榮でもあれば、一通りならぬ苦勞でもある。だが、その至難な守護に、選まれたる我れの生甲斐のあることよ——

金吾頼基はいつまでもひれふしてゐる。

——釋尊は多寶塔の外で、法華會上の一切の菩薩大衆に、法華經の文の上の一部を付囑されたが、それとは別に、特に、多寶塔の中で、唯上行等の、本化の大菩薩だけに、法華經の文の底の深義を付囑されたと、我師はかつて敎へてくだされた。いま、開日鈔書き上がらば、保存せよと仰せられるのは、釋尊の御直流たる我師より、正法を守護せよとの御傳へであると、頼基は、御像の方へむけた頭をあげ得ないでゐるのだ。

と、堂の外では「おゝおゝ、音に聞く、篤信者、四條どのがわせられたのか?」

と、わだかまりのない阿佛坊が日興に語りかけてゐる。

「おゝおゝ、久しぶりで、武夫らしい武夫に對面する。嬉しいことぢや、悅ばしいことぢや。いやもう、この島の者なぞ、あれが武夫かよ、あの、心の汚さを見い。」

と、衣紋をしきりに直し、鼻などをかんでゐたが、

「さぞ、上人は御悅びのことでおはしつらう。——それそれ、御悅びのことと申せば、一の谷の入道の祖母殿が、祕かに信仰なされる體で、一の谷清久も、あれほどの念佛者だつたが、折れま

したぞ折れましたぞ。」とひとりで嬉しげである。

草木成佛

「それからのう。」

と、阿佛坊はいよ〳〵嬉しげだ。

「家の尼御前が、かしこの祖母殿を說きつけてをるわい。」

「何事をでござるか。」

日興は氣を長く、老人の對手になつてゐる。

「何事とて、それは、大事なことぢやぞ。」

阿佛坊入道は、いよ〳〵もつて、その日の空のやうに晴れわたつて、華やかに話しかけるのだつた。

「この御堂は、御師にとつても、我等にとつても、誠に思出の多いところではあれど、何さまもつてこのやうな破れかたではござらぬか。これから、春が參らうとて、まだまだ春寒は長い。大切な御上人を、いつまで此處へおきまゐらせてよいものかよ。ぢやから、そこで、尼御前が大奮發ないたして、そろ〳〵と、土盛り工事ぢや。」

「それはまあ、何にいたせ、御大儀なことで――」
「これ伯耆御房、さやうな挨拶はおよしやれ、およしやれ。何やら生ぬるいわい。」
と、堂のうちから日蓮が、「日興よ、何やら、入道に叱られてゐるではないか。」
と輕く笑はれる聲に、阿佛坊は、カラカラと笑つて、
「これはこれは、お耳に入りましたか？　とかく、耳がうとうなりましたで、大聲を仕つります。」
と膝行上つていつて、一禮してから、
「一の谷入道、念佛を、表にはまだ捨てぬせぬが、法華の有難さを知りましたやうに御座ります。ことに祖母の尼が、いと忝けながりまして、千日尼について、彼これと御法緣を頂きをります。それについて――」と、金吾に、話のさまたけをしたのを、輕く會釋しておいて、
「この御堂は、あまりと申せば、あまりにことそいてをりまする。一の谷の地形は、まことに麗しい眺めで御座りまして、眞野の入江も目の下に見え、陵にも、此處よりはずつとお近ゞなります。上人御體には、かしこにまさる處はないと、我等、日々申合ひをりましたのを、そろ〳〵と、一の谷入道どのや祖母どのに、申し談じをりますので――」
慇懃にそれだけを日蓮にむかつていふと、くるりと賴基の方へむかつて、
「彼の地は、ことに要害がよろしい地形なのでござる。この塚原は、御寬のごとく、四方廣涙といたしをるゆゑ、暴民ども押寄せ參ると、ちと――いや、ちとどころか、全然防ぎやうがござら

ぬ。上人には、御佛の御守護ありといへど、危きを存じながらにそのまま差しおきまするは、我等、あまりに甲斐なきものとなり、貴殿はじめ、鎌倉および各地の方々へ、申譯なき次第でもござれば――」
「仰せ、誠に御尤もの儀と存じまする。全くもつて、一日も早く、安全なる場所へ、御移し申上げたうござる。くれぐれも、貴殿の御働きを願ひあげまする。」
と、金吾賴基は、熱意をもつて答へた。
阿佛坊入道は金吾の様子を、ほれぼれと眺めて、日蓮に、
「上人！」
と呼びかけた。
「まことに、好き御法弟をお持ちなされまして、何とも、何とも――」
と、しきりに感嘆しつづけるのだつた。
「申しやうのない、優に剛き武夫ぢや。これも、法華經によつて、御人格が磨かれ、師僧によつて、鍛錬られたまふからぢや。」
と、くるりと後を振りかへつて、
「なう、日興どの、法弟は、みな、粒選ぢや。粒選ぢや。」
といつてから、あははと大口を開いて、

「と申すと、我等まで自身を自慢することになるが――おゝ、これは忘れた。拙者は阿佛坊入道でござる。」

心の通じる者同士には、逢ふははじめてでも、交はりは久しい心地がして、金吾頼基は阿佛坊を見るのに、遠國に離れて暮してゐた、優しい伯父に接する思ひがするのだつた。

「それがしこそ申しおくれをります。四條三郎左衞門尉頼基でござる、御見知りおかれ下されい。」

と名乘つてから、座を下つて、うやうやしく述べた。

「御法弟御一同を、代表いたすなどとは、金吾まことに僭越至極の義なれど、上人、今日かやうに御氣色麗はしく、法華經の御爲め御精進あそばされます事、阿佛坊どのと千日尼どのの、ひたすらなる御供養、御心づかひによるところいかなる辭をもつて御禮申上げ候てよろしからんか、ただただ、有難く忝けなく存じあげまする。まことに、御二人は、尊き御佛の、假の御姿にて、法華經流布の行者、日本にただ御一人なる我師を、御守りくださることと、みな、申しあがめをりまする。」

「これは、これは。」と、阿佛坊も頭を疊に摺りつけて、

「まつたくもつてそれどころか、某は、日蓮と申す奴、念佛をさみなすは、われら後生を祈りたてまつる帝の、御菩提をも荒す者と、おぞましくも思ひたてまつり、いざとあらば素ッ首も頂戴

いたさんありさまにて、この御堂に參入いたした不所存者でござる。申さば釋尊に對する、提婆達多よりも御憎しみある筈、外道が教化をうけて、いさゝか眼の開きましたるもの、淺間しきかぎりでござつたに、左樣仰せられては、全くもつて、身に汗いたす――」

正直な入道は、この寒い日に、頭からも頸からも、グラダラ汗を流してゐるのだつた。日興は氣の毒がつて、

「いやいや、上人もその折仰せられましたには、この鬼畜のごときもののみ住む島に、阿佛坊と尼御前のあらせられたは、我が故郷の慈父悲母が、日蓮をあはれんで、再び此處に現れたまひしかともおぼゆると――」

ヒヤーと、阿佛坊は手を振り、聲をあげて、

「伯耆坊よ、こなたまで何をいふぞ。わしはあまり熱うなると、眼が眩めいて倒れるも知れぬ、止めよ、おかれい。」

「さらばまづ、その事はおいて。」と、頼基は、

「只今承はれば、一の谷入道とやらんの館へ、やがて御移りも出來ますとか？」

「おゝ、その事は、彼は、本川重連よりも、いさゝか佛緣あるものと考へますで、上人御一期の御大切なる御筆作あるには、適當の場處かと心得ますまするで、女子は女子同士、何かと約束いたしをると申しまする。彼處は、木立にかこまれたる丘の上にて、眞野の浦をも見はるかしまする。

その浦を、戀の浦とともなへまするは、承久、順德の帝、この浦に御船とまりしとき、遙に、はるかに遠き、隱岐の島を御したひ遊ばせられ、

いざさらば、磯うつ波にこと問はむ、おきのかたには何事かある。

の御製がございましたにより、某、まことに拙き腰折れをつかまつり、

佐渡のうみの古比の浦波とことはに、よるとはすれどかへる日もなし。

など仕つりましたので、戀のうらなどと呼ばうやうになりました。」

金吾頼基は北條一門の家臣であるので、その話に觸れると、何とも申しやうなきさまにて、眼を伏せてゐた。

日運が、日本國のあやまりは、承久の亂に源を發すと、何時も說かせられるのを、頼基はよく存じ知つてゐる。今この島に來て承久の帝に御供申せし爲盛入道からその片鱗をも語られると、頭のあけやうもなく息をつめてゐた。阿佛坊はまたいふ。

「某に一人の男子がござる。藤四郎と申すもの、たゞ今は、京にありますれど、某なき後は、何とぞお目かけくだされたい。」

「それはそれは、御子息は藤四郎どのと仰せられるか、お懷しうござるな。入道殿こそ、優に剛き强者、武夫とは、かくこそあらまほしと常々存じをりまする。御子息にもさこそ頼母しき御方でござらう。」

と頼基にいはれて、阿佛坊はニコニコと、

「いやもう、某は老いさらばいて何の役にも立ちませぬが、伜めをこそ、師の御坊の御役にたてたいと存じをる。彼めも、我等が、いかにしてこの島にあるかを、よく存じ辨へをれば、徒に、世に媚び諂ひは仕つるまいと思ひ存ずる。」

北條義時の次男、名越朝時こそ、承久の亂には北陸道の大將であつたのだ。しかも、その朝時の次男光時が、金吾には父中務頼員からの主人である。

頼基は、談がその事におよぶと、憮然として、額を伏せるばかりだつたが、信仰をおなじくした二人には、他のことはなんの拒りもなくあれこれと語らつて、

「それそれ、千日の尼御前の御ことは、女どもはことに有難がりをりまする。鎌倉にても、かよわき女子どもの信の力の强さに、誰も感服いたしをりますが、わけて一人の賤の女が、この島までも罷りいでふと、幼子を連れて出で立つたとやらん、日眼女などさう申しをりました。」

日眼夫人の名が出ると、日運は春の風のやうな微笑で金吾を撫でるやうに、

「月滿御前は、虫氣もなうお育ちめさるか？」

「大きうなりまして、よう笑みくづれをります。さ、申せば、このほど出立の前に、日眼の申さうには、この次に出でくるべき子には、御名を賜はることもかなはぬかと、嘆き申すとのことでございます。」

「いやいや。」と、日蓮はいとも慈相を輝かして、
「この次のお子には、經王の御名を差上げ申さう。女子にてましましたらば、經王御前とおつけ申さう。」
「忝けないことで御座りまする。何とぞ產れ出ましたらば御書を以て御名づけ下しおかれませ。その折のよろこびはいかばかりでござらう。」
金吾賴基は、妻のよろこび、一門の光榮を思つて、今から嬉しくてならないのだつた。經王とは、いかなる宿緣あつての、果報いみじき名をたまはる我子かと、まだ產れぬ子の行末を、たのもしくも思ふのだつた。
「日蓮は、いかなる罪科にあつても、この身の過去の遠々劫消滅と、滿足にこそ思ふが、併しながら凡夫の身、動もすれば悔いる心の起らぬでもない。この日蓮さへさうであるに、前後の分別わきまへがたき女人たちは、佛法の深い道理も諒解もなく、ただ日蓮を信じてゐたに、かく重罪に處せられるを見、いかばかり悔いてあらうかと思ひしに、却て日蓮より强き御心であるとは、全くただ事ではない。偏に、敎主釋尊、各々の心に宿らせたまふのか——」
と、日蓮の申される言葉の下に、
「女人成佛を說く、法華經をいただく女たちの信は、まことに深いものでござります。」
と、金吾賴基は、かの、阪川兵衛の娘なぎさが、夫四郎にもおとらぬ强き信仰をもつて、日眼

女のところへも、しばしば法談に訪れてくることなども語つた。
——さうした樂しい日の刻は、またたく間にたつて、賴基は日足を見上げつつ見上げつつ、腰をあげかねてゐた。いま一夜さと名殘りを惜しんで、明けるを待つて立つてゆくのだつた。
——阿佛御坊、この島には、かういふ草がござるか、あゝいふ草がござるかと、夜もすがら問ひつ答へつして、あれは乾しておかれよ。これは摘んでおかれよ。上人御腹を痛められしをりにはこれを煎じよ。この草にて脚湯をつかうまつれ、などなどと、日興へもくはしく言ひおいて、阿佛坊や千日尼の持藥も調じておいてゆくのだつた。
金吾賴基の乘つた船が、對岸に、まだ帆をおろさないであらうと思ふころ、鎌倉からの使、熊王は、かさだかな荷物を背負つて來た。
日昭からの消息があり、大學三郎からのもあり、ことに阪川兵衛親子からは、種々なものが屆けられた。
なかにも兵衛の婿、爲藤四郎からは、足摺りをして金吾を羨んでゐるさまが、髣髴と言ひ越されて——
——五體の滿足を得ながら、一足の自由を得ぬ宮仕へは、彼の、牢內にありしよりも、あの殿しき笞よりも切なく苦しく候。

とあるのを、披見をゆるされた日興も、阿佛坊も、尤もなことだと同情した。
「これは、さうござらう。土の牢にある筑後御房さへ參られたのであるから、彼人は、まことに足摺りなされてであらう。」
と、その後へつける言葉は、「いや、どれを見、これを見ても、立派な武夫ぢやぞ。情理かねたる、眞に武夫ぢや。自體、鎌倉北條ごとき者の下に、かゝる武士のある筈はないのだが、これみな、法華經を信ずる故に、本善の磨かれて眞の姿が輝くのぢやの。」
阿佛坊は、鎌倉武士を褒めるのではない、我師の御法弟である人々が立派なのだといふことを何時も付けて褒めるのだつた。
四郎の妻のなぎさからは、眞綿を澤山に入れて縷ぢた、厚綿入れも手づから念入りに仕立られてあつた。
「おゝ、おゝ、これは、召しまする上人よりは、千日尼前の方が、どれほど悦ぶことか——」
と、阿佛坊はわが娘から屆いたやうな欣びやうだ。
日興は熊王をいたはつて、彼が此處に居て、炊事のことなどいたしたいといふのを、聞いてやつてゐる。
かく、訪ひくる人もまし、信者も增えてゆくにしたがひ、草堂のなかも暖かくなつていつた。睦月もいつか過ぎて、如月の名をきくと、海は荒れまさり雪崩はものすさまじくなつていつたが、

遠く洋をわたつてくる東風は、さまざまの音信をはこんで來るのだつた。
「これは珍らしいものぢや。」
ある朝の朝食に、白粥にそへられた青味を見て、日蓮は、箸をおいて眺めた。
「雪間の芹ぢやな。」
「熊王が如才なく、里の子らのするのを見て、雪の下から摘んで參りました。」
「これは尊いものぞ。」
と、眼にしみるやうに日蓮は見た。去年の霜月、この島について、雪のなかに封じられたやうな月日に、いつか春が來たことを、一莖の青味によつて知るのだつた。細い、小指のやうな小さな芹は、いかにも新鮮なものであつたのだ。
そのまた一日二日を過ぎて、白粥の椀の蓋をとると、細かい青味が、あさみどりの春の海の色をうかべてゐた。
「ほほ、これは何ぞ。」
と、日蓮は問ふもゐましけに見えるのを、給仕する日興もうれしげに、
「それは、深海から流れ寄りましたものださうで、磯に咲いた初花ぢやと、入道どのが獻じられました。」
「おゝ、早や、海洋の底にも春は來たのか？　季節はあらそはれぬものぢやの。」

と、頂いて箸をとられる師の口許を、日興は樂しげに見つつ、
「若芽の株でもあらうかと申されましたが、深い〳〵、洋の色のやうで、うつくしい碧さでございました。すこしばかりのものでも海の香がそれは、よくいたします。」
師弟が濃やかに語らうころに、東國の兵、出兵催促の通狀が、本間の館へは舞ひ込んだのだつた。
宿つぎに早馬を走らせて來た、鎌倉からの注進は、寺泊から早船を仕立させて本間が館へ駈けつけた。
海上を見守るものから、早船が漕ぎ寄せて來るときくと、本間の家臣たちは、馬を曳かせて船着に出向へてゐた。
「何事の候。」とまだ船が着かぬうちから、口に手をあてて、破れ鐘聲を振り絞つて問ひかけると
すでに、舷に足をかけてゐる急使が、
「合戰の候。」
と喚きかへす。と聞くより早く、我れがちにと館にとつて歸して、武具を引き出し、在鄕の兵たちを狩り集めに走らせるのだつた。
——出陣ぢや——
といふ動搖めきが見る間に廣がつて、注進が到着するうちには、廣庭に家臣どもが居流れてゐた。

「遠路大儀。合戰とは、鎌倉表にてか？」と、內側から急ぎ足に出て來た六郎左衞門重連は、着座する間もまどろこしげに、歩みながら訊いた。
「京、鎌倉、二ケ所にて、一時に事擧がつて候。」と、急使はドカと土の上に坐つた。
「敵は？」
「六波羅殿でござりまする。」
ゲッと重連はのけ反るほど驚いた。
「六波羅殿とて——南方の殿でおはすか？」
「仰せのごとく元の式部大輔殿御謀叛と聞え、鎌倉より打手上り、北方の左近太夫將監義宗殿に御加勢とうけたまはる。」
重連はフーッと太息を吐いた。並居る家臣たちの列にも大きな波が打つてゐる。
京の六波羅南方の管領式部大輔時輔は、北條時宗の庶兄で、前執權の最明寺時賴の子だ。弟時宗の榮職を、快しとしないといふ風說はあつたが、謀叛にまで及ばれたのか？　これは、小さい爭鬪ではないと思ふのだつた。
「して、鎌倉にては？」
重連がたたみかけて訊ると、

「二月十一日の曉、尾張入道殿、遠江守教時殿へと討手がむかひましたを見るより、念ぎ立ち出でました。早々御出馬あらせられませ。」

「なに。」

と、突立ちあがつた重連は、

「前の尾張の守平ノ時章法師は、幕府評定衆最筆頭の御方ではないか――」

重連が、むむう――と呻吟つてしまつたのもことわり、この時章法師の尾張入道見西といひ、おなじく評定衆の教時にせよ、故義時の次男名越の朝時の子達である。その人達の兄にあたる光時が、これよりさき寛元四年、最明寺時頼と執權を爭つて騷動を起し、伊豆に配流になつた。

――名越殿の御流れを絶やすか――と思ひあたると、北條一門の血で血を洗ふ騷動は、天下の騷ぎとならないとも限らない。

「諸國の軍勢、召集の御催促あつたか？」

「その儀は、たゞちに、後より申し來るでござらう。」

急使の答へがをはらぬうちに、後からの急使がまた着いた。彼はいふ。

「教時公、六波羅南殿と御合體、東西において御謀叛とうけたまはる。但し、尾張入道を誅した る討手は、首を刎ねらるべしとのことでござる。そのほかにも、あまたの加擔人これある由、中御門の中將實隆朝臣召捕られしとうけたまはり參つた。」

重連はふたゝび呻吟つた。

――おゝ！　日運御坊の申されしごとくぞ。これこそは、自界叛逆難でなくてなんであらう、あら、おそろしや――と思ふと、ブルブル身顫ひがするのだつた。

用意ととのひ次第、即刻出陣の觸れは、一門、一族に廻された。

館の動搖めきよりも、街や村里の騷ぎは一層であり、濱方では、兵を渡す早船の支度にてんてこ舞だ。

幸ひに、まだ田畑の仕事や、山仕事もない折なので、在郷の兵卒は、すぐに走せつけて來はするが、彼等は、麥の芽を踏むのも近づき、田も畑も耕きかへさなければならない春が目に見えてゐるのも、見捨てゆかねばならぬので、留守の妻や、弟や、親や子に、くどくどと言ひつけてゐる。山の立木の賣買に、足許を見込まれて切齒してゐるのもある。

去年の新米など、もうすつかりないと、家中の飯米をどうするかと、今になつて泣言をいつてゐる女もある。貸金を拂はねば、この手は離せぬと、胸倉をとつて喚いてゐる强慾者もある。

本間の館でも、あの、額に瘤をこしらへた愛妾が、腹にも瘤が出來た氣がするのに、おいてゆくかと、わんわんと泣きたて、奥方に眉を顰めさせてゐる。軍は、物見遊山でないといふことをその忙しさのなかで、重連は、愛撫とともに、餘人への見せつけに、怒り聲で言ひきかせもしなければならなかつた。

「途中のほどの有様は、いかにぞや。」
六郎左衛門重連は、追々に着到する、一族の者の手前、鎧の腹帯を引き締めながら、鎌倉から駈けつけたものに問ふのだつた。
「いやはや、これは、國中の騒ぎにもならうと、申し居りまする。それぞれの關係が、分明でござらぬため、北條家御一族へ、それぞれ心寄せの面々、それぞれ、ひしめきあつてをりまする。」
「さもあらう。」
重連は、鎌倉へ着いても、依智の館へはいられるかどうかさへを疑つてゐた。この戰は大きくなる——と思ふと共に、ふと、日蓮を依智へ預つた日のことを思ひだした。
それはまだ、目にまざ〳〵と思ひ出せる、去年の十三夜の明月の夜のことだ。その、前夜のあけがた、龍の口で日蓮は首を斬られる筈だつたのに、江の島の方から光りものがして、太刀とる者は眼くらみて倒れ臥し、兵ものどもは、みな逃げ出してしまつたのだ。馬よりおちるものや、怪我をしたものもすくなくはない。
しかも、依智の館へ引きとつてからの十三夜には、日蓮は大庭におりて、晴れたる月天に向つて經を誦し、何事をか言つてゐたが、天から明星の如き大星が、日蓮の立つ前の梅の木の枝にかゝると、奇しくも光をはなちて、忽ち一天かき曇り、大風は吹きすさみ、江の島は鳴動して空にまで、大鼓をうち鳴らすやうに響きかへした恐ろしさを、思ひ出さずにはゐられなかつた。

「おゝ、まこと、聖者におはしましたるを——」
彼等は、いかに酷くもあつかつたかと、重連は急に塚原へ、謝罪して行かねば、この度の合戰には、生きてかへる氣がしないのだつた。
「者ども、馬曳け。」
家臣たちは、すは、發足と勇み立つものと、まだ準備が調ひかねると、あわてふためくものとがあるのを、重連は、
「この時の間に、塚原の法師に詣でてくる。誰にても供せい。」と馬を走らせた。
道路のほどの者は眼をそばだてた。館の殿が、いくさに行かれる前に、塚原の日蓮を退治られるぞと、我もわれもと、走せ出し、今日こそ見ものと喚き聲をあげて續くのだつた。
だが、重連は三昧堂の近くにゆくと、馬の足掻きをゆるめて歩行立ちとなり、靜に、威儀を正して訪れをつけた。
「本間重連、出陣の先にたつて、上人に御詑言上のため推參いたした。御面會下しおかれたし。」
と——。
本間の從者は、急いで主人に牀几をすゝめたが、重連は腰もおろさず、草堂からの聲を待つた。
「これはこれは本間殿。」
日蓮は、開目鈔の筆をおいて、靜かに迎へ招じ入れた。

重連は鞠躬としてわづかに室内にはいると、
「さて、上人。何より御詫仕つらんか、重連申す言葉もござらぬ。」と、手をつき、頭を下げた。
物の具いかめしく鎧ひし、本間の姿は、いはでも鎌倉への出陣と見やる日蓮に、
「去る正月十六日、この原に集まりし念佛者たちを、御破説のみぎりに、某立ちかへりまするをりしも、鎌倉に事あらんやうに御教示をたまはりましたに、生來の迂愚さる事なでふあらんずらんと、空嘯ぶき立かへり、事にまぎれ、日々碌々として暮しますうち、誠に、思ひがけぬ大變起り、只今走せ參ずる次第でござる。」
重連は慚愧にみちたる面を垂れて、
「上人の、かゝる尊き御方なりとも知らず、偏へに、邪法の法師とのみ賤しめ、今日までの心無き振舞ひのほど、ただただ、申譯けなく——重連は、いかなる報いをば受くる身とならんずらんと——」
「いやいや。」
日蓮は、重連の心からの悔悟を、さも悦ばれるやうに、
「その儀にてお越しあられたか。出陣の心せはしきをりに、よくぞ、よくぞ見えられた。日蓮は御悔悟を悦び申す。」
「誠に、彼の時は、何を仰せられるかと、耳にもかけず候らひしが、三十日にもならぬうちに、

御豫言的中いたし、ただただ恐れ入つてござる。上人の、のたまふところ、一々的中なさば、彼の蒙古國の義など、身に粟だつ心地つかまつる。」
重連はひたすらに、かしこまるのだつた。かかる聖僧を遠流し、食も與へず、生命を失はせん失はせんとする鎌倉幕府の運命——その命を奉じて、この寒國の雪中に乾殺さんとしたる我をはじめ、この島のものたちの行末のおそろしさよ——
「助けたまへ上人。」と、心から叫ぶのだつた。
「そも、日蓮が、この佐渡へまでの遠流と申し、首刎ねられんといたせしなど、みな、日蓮が、世の相を憂ひ、國安かれと祈りて、立正安國論を草せしを、北條殿の、一つも用ひたまはねばこそでござる。」
國の歪みは、その、そも〳〵が、承久の亂の、下刻上に發してゐるといふことを、日蓮は重連に說ききかせた。
堂の隅には、日頃詣でくる阿佛坊も居て、かゝる時ならでは、再びうかゞふこともありやあらずやと、謹しんで、日興とともに拜聽するのだつた。
「日蓮が、立正安國論を草したるは、文應元年のことにて、その年七月十六日、大學三郎殿にお目通しを願ひ、その上にて宿屋左衞門尉殿の手を經て、時の執權時賴殿に献進いたした。」
およそ、承久元年より文應元年までの四十二年の間に、地變天夭の災禍の數は、あげて數へが

だいほどであると、日蓮はいひつづけるのだつた。その概略を數へても、天變は百八十ばかり、地震は百四度を越し、大風雨は七十八度におよび、洪水十九たび、大火の災は五十度にあまり、日旱は六年、飢饉は七年、疫癘は十六度、騒亂と名のつくほどのもの三十六ゆゑ、小さき戰ひはいかばかりあつたであらうか。

それを見、これを見、しかして、その後にくるものを豫言し、非常の決意をもつて、亡國の大事と民の害をのぞかんと、正法治國の諫を進じたのだと語られた。

――おゝ、立正安國論――

片隅に控へて、主客の談話を聽聞してゐた日興は、安國論のことに話が觸れると、今更ながらに、わが師上人の崇高さを思ふのだつた。

で、この武弁に、わが師の「立正安國論」御筆作についての當時を、いますこし知らせやりたいと、

「本間殿に、これより申上ぐる。」と、いつて、師にむかつて會釋してから、

「安國論にこれ有る、佛說七難のうち、五ッの難は、その時すでに、世人身をもつて見聞いたしをりたる、打續きたる天變、地夭、飢饉、疫癘、兵亂のそれでござるが、殘る二ッの難こそ、他國侵逼難、自界叛逆難でござつた。今こそ、人々の心に、正に思ひ當られたることでござらう。」

と、上人が、この安國論を草したまふまでには、一切經を五回御閲讀なされたことを話した。

「第一に房州清澄山、第二回は鎌倉鶴ヶ岡八幡、三回目は下總の東漸寺四度目は叡山の延曆寺、五度目こそは、駿河岩本の實相寺に御籠りあり、四ヶ年の歲月を御勘考の上にて、立正安國論はお書上げになつたのでござりまする。」

日興はその當時を思ひおこすやうに、

「わたくしめは忘れませぬ。いまだ十ほどの雛僧でござりましたが、朝夕に、富士が峰にむかはせられて、實相寺の學生僧どもを御啓發あらせられましたころを――一山の學徒は『摩訶止觀』の御講義を承はりをるうち、岩本の學頭は申すに及ばず、富士山下一帶の他宗門は動搖し、僧侶の英才は、みなあらそつて御門下と相成りました。豪族等はみな歸依つかまつつた。しかもその五回にわたつて精密に御閲讀なされし一切經の卷數は、七千四十六卷といふおびただしい卷に相成り申す。實に、御佛の御心を鏡として、微塵をも殘せず、世の相をお照しになつた上、國を亡ぼすまじとて御進言になつたのが、卽ち立正安國論でござる。」

「まことに、まことに――」

重連はいよ〳〵もつて、心もとなげに、

「身のほどのおそろしさ――それにもまして憂ひまするは、他國侵逼難と仰せられるそれでござる。」

「されば、それも、北條殿、上人の御心血が注がれたる御書を、御用ひなく、上人をかく迫害い

たされゝば、やがては思ひあたられる事のござらう。」
と、日興は意氣軒昂と、
「その事については、上人はすでに――その書に委しく申したれど、愚人は知りがたしと御嘆きもござつた。天災地夭は、世みな正に背き、人悉く惡に歸すと仰せられたこともござつた。しかも、それより九年の後、只今より五年前、いまだ、其許がたにも御忘れはござるまいが、文永五年の正月には、既に既に、他國侵逼難の兆は起り、彼の蒙古より無禮の來牒あり、下ざまにまで洩れ聞えて、世の中騒がしう相なりましたせつ、師の君は執權家の、平ノ左衛門尉頼綱どの父君に、この國難を退治ることは日蓮一人知る。御用ひなくば必ず御悔みがあらうと、御書をお送りになり、越えて八月、終に十一ヶ所へそれ〳〵御通牒をおつかはしになつた。」
「それは、いづかたへでござるか――」
と、阿佛房入道が、もの語るところの日興へ、師にうかがふやうに丁寧に訊いた。
「執權時宗公をはじめ、宿屋光則、平ノ左衛門頼綱、北條彌源太、建長寺道隆、極樂寺良觀、大佛殿別當、壽福寺、淨光明寺、多寶寺、長樂寺でござつた。執權には、――日蓮先年諸經の要文を集め、之を勘へたる立正安國論の如く、すこしも違はず、符合しぬ。と遊ばされ、諫臣國に在れば、則ち國正しく爭子家にあれば則ち其家直し。國家の安危は政道の直否に在りと、堂々と御諫めあつたのでござる。」

言語すくなく、要多く、いかにせば傳へられるかと、述べるところの日興は、しきりに工夫をしてゐはするが、時刻のうつるのを恐れて、
「申上げたきことの、それは、萬の一でもござるが、御心急きでもござらうゆゑ、またの時と仕つらう。」と言ひ止めた。重連は、心から禮を述べて、
「某など、御法弟の數になど、もとより願はれもいたさぬ烏滸の者でござるが、今日より宗門を改め、屹度御歸依申上げたく、その義だけは、師の御坊へ、おとりなしおき下さるやう。」
と、懇切に頼み入るのだつた。そして、この度の戰は、京、鎌倉兩所に事起り、時宗の庶兄六波羅南方の時輔が、鎌倉名越殿の七男教時と合體しての謀叛にて、武門の者はみな暗仕合であらうといふ旨を申した。
「それはそれは――」
阿佛坊入道は、先日立歸つたばかりの四條金吾の主人、名越殿次男光時の子で、みな一門ゆゑこの合戰に加はるであらうと思へば、氣がもめてならないのだつた。
思ひはおなじ日興も、あの人この人の上を案じもし、その戰亂の中で、秩序の亂れを幸ひと、法華經信者や法弟たちに、またしても危難の手が伸びはしまいかと、安い心地はなかつた。
だがしかし、十一ヶ所への御書の時にも、檀家法弟たちへ對して、
――大蒙古國の簡牒到來に就て、十一通の書狀をもつて方々へ申せしめ候。定めて日蓮弟子檀

那、流罪死罪一定たらんのみ、少しも之を驚くこと莫かれ。——日蓮庶幾せしむる所なれば、各々用心あるべし。少しも妻子眷屬を憶ふこと莫かれ。權威を恐るること莫かれ。今度生死の縛を切つて、佛果を遂げしめ給へ——

と、門下一同を誡められたことを思ふのだつた。一朝ことあれば、いつも迫害はくるものと、日蓮を信じ、法華經に歸依してゐるものは、みな堅い決心がある。今日の災害を豫言して、口を割つても藥を飲ませるとて發せられたあの時の十一ケ所通牒にたいしてさへ、死罪流罪を覺悟せよと仰せられた、その豫言の的中を、鎌倉にあつて、身親しく見聞するものは、正しくと思ひあたることであらう——と思ふのだつた。

日興が、ふと氣がつくと、重連は、暇を述べて辭去しようとするところだつた。彼は、荒涼たる堂の内外のさまを見るにつけ、恥ぢて面をあげかねるやうに、

「かゝるところに、捨てしやうにお置き申したること、かへす〳〵も面目ござらぬ。某留守ともならば、いかなる輩の出で來ぬともはかられず、早々に御居所をあらためさせまする。」

さういふを潮に、阿佛坊はいふ。

「御一族かとも存ずるが、一の谷の近藤殿にては、お預りはござるまいか。」

「なにさま。」と、重連は小膝を丁と打つて、「近藤伊豫清久の宅こそ、まことに、靜かさもあり眺望もあり、彼も心やさしきものでござるし、その上に、この度、一族の中にては、在國留守の役

にもあり、これは尤も適任と存じます。早速に申しつかはし、御迎への準備いたすやう申付けおくでござらう。」と約束した。

阿佛坊のよろこびはいひやうもない、日蓮も重連の奉仕に滿足された。

阿佛坊は、「これはなにとも、欣快至極。」

と、早速にはからつてくれるやうに、と、

「出陣にまぎれて、お忘れあるな。必ずお忘れあるな。」

と繰返し〳〵、馬にまたがる重連の後からまで言ひかけるのであつた。

本間一族は、早船で出立した。

その日終日、揉みにもんだ騒ぎのあとでは、大風が吹き過ぎ、高潮が引きさつたやうな、寂寥な夜が來た。

金北山の山麓、一の谷の近藤の館では、今日、突然出立にのぞんで、本間重連が書き殘していつた書面を、出陣見送りをすませて立ちかへつた清久が、祖母の膝下に來て示した。

「あの殿も、氣が折れたかして、塚原におはす、日蓮法師を、ねんごろにもてなしてくれと、くれぐれも申殘されてゞあつたが、もしや、出立の忙しさに申忘れる事もやと、某の面を見るまでは心がりで、存念を一筆書きに認めておいたと申されてゞござる——」

と、懐中から取出した紙の、皺をのばしながら言つた。
「さうかや、さうかや。それ聞いて安堵しました。和殿が、日蓮法師のこと頼まれたと、いきなり仰しやつたから、胸が痞へて痛かつた。」
「それは、何としてでござるな。」
「萬一、あの法師、斬れと言はれたとでも、言ひはせぬかと案じて――」
彼はいとしげに、祖母の、しぼめ、すがれた口許のわななきを見やりながら、薄く打ち笑んで、
「それの反對でござる。日頃、そなたさま、どうやら御歸依の御様子ゆゑ、某も、最初は、何事を命じられるかと、ふと、心暗うござつたが、ものごとはようしたもので、實は――」
と、清久は引き伸した書きつけに目を通しながら、
一、彼の法師、もとより尋常ならぬ者にて候ところ、この度のこと、豫言的中、まことに稀代の聖人に候
二、去る尊き出家を、かのさまにて差おき候こと、重連盲目の嘲り、はづかしともはづかし、かつ、いかなる亂暴者出で來て、命も失ひ候らはゝ、鎌倉殿より御赦免の節申開きもなし、そこもとの守護曲けて骨折りたのみ入候
三、居所は、一の谷然らんか？　相當の草庵、清淨にしつらへ、急々お呼びむかへたのみ入り候。尤も、當面は流人におはせば、結構を極めぬかた、上人の御心にも添はんか――

「おゝ、おゝ、おゝ――」
祖母は笑みくづれるばかりに、膝を浮べて、
「これ、ま一度讀んで見せてたもれ。」
清久は乞はれるまゝに、繰返して讀みきかせた。
「まッこと、本間殿の御書か？」
祖母はそれさへ不安心なのだ。
「嘘りない直筆の覺え書でござる。」
「よも、後に、ありや嘘ぢやとは、おいやるまいな。」
「なんで左様の事のありませうや。ロづから某に、頼まれたのは、もつと、あの法師をあがめられてでござる。これは怱忙たるさいに、立ち書きにいたしたる書付けではござるが、これ御覽ぜよ、近藤清久殿、頼み入る一札とござる、それに花押までいたしおいてござる。御疑念あらせられますな。」
「あゝ忽體ない勿體ない。」
祖母は、珠數の玉を、指でくりながら、妙法蓮華經、妙法蓮華經と唱へた。
「日輪は、いかなる黒雲が出て被ふても、その光はいつまでも被ひつくせぬの。あらたかなる聖人は、あの本間殿をまで、左様に教化なしたまふたかや、かたじけないことぢや。」

「明日は、早々に、御草庵を建てる地を選みませう。今宵はゆつくりとお眠りなされて、某が一ツ二ツの土地を選みましたら、お知らせいたしますから、御覧にお出でなされまし。」

と清久がいふと、

「いや、その土地ならば、みづからが心に、もはや、ちやんと印がしてある。」

と祖母は嬉しげにみづから座を立つた。

そして、わが手箱を持つて來たが、それは、この日頃、千日尼が訪ねてくるたびに、樂しげに頭を寄せあつて、火桶のもとで、二人きりで蓋をあけては、一葉の紙をとりだして、祕々話をしてゐる、その玉手箱なのだつた。

「ほほゝ、祖母さまの、玉手箱が出ましたな。」

清久も、他人に手をかけさせぬ、祖母の玉手箱を知つてゐるのだ。

「おゝ、玉手箱も出ますわいの。本間どのの、氣も折れる時機ぢやものな。」

何かは知らず、祖母が皺びた頰に紅潮をのぼせて、さも生甲斐ありげに、甲斐々々しく立居するのを見るのは、清久もうれしかつた。

「何が出ますかな。」

と、清久が首を突出すと、祖母はもつと近寄れといふやうに手招ぎして、燈火を引きよせよといふ。

清久が、言はれたやうにすると、祖母は、ほくほくして座右の小卓から鈴をとつてうち振り侍女がくると、

「殿は、まそつとお話をなされるゆゑ、なになと差上げい。夜食の湯づけを、調じてまゐらせたらよい。」

「それには及びませぬ。」と、清久はいつたが、祖母がこんなに、いそいそして、自分をもてなさうとするのに、それを斷つたら、また、何時、こんな時があるだらう、身は武夫の、明日にも命を捨てるかも知れず、祖母は年の上なり、あの時にとの悔を殘さぬともわからぬと、

「さらば、お言葉にあまえて、祖母さまのお手製の、おいしい醬などで、夜食を頂戴つかまつりませう。」

「さうしやれ、さうしやれ。」

祖母は、何もかもが嬉しいのだ。

館のものは、みな、念佛歸依者で知れてゐる家なのに、清久が、日蓮御坊を迎へることに、別に抗しもせず、優しくいふてくれるのが、浸み通るやうに嬉しいのだつた。

彼女は、手箱のなかから、古びた軍扇を出して、清久に與へて、

「これは、祖父どのの若い時に、武將より御恩賞にうけた軍扇さうな。こよない譽れぢやと、その頃は、人にも見せ、鼻を高うしておじやられたものぢやけな。ぢやゆゑに、この品は、和殿に

進ぜる。」

清久は、古めかしい、持ちふるした軍扇などほしくはなかつた。祖母には、さまざまな思出もあらうが、自分には役には立たないと、手輕に裏表を開いて見ただけで、お辭儀をして、前にはさむと、

「さて、その次はこれぢや。ようお見やれ。」と、祖母は清久がなんといふかといふ懸念より、悅びの期待にわななく手で、一札をおしひらいて、その圖面を見よといつた。

「な、な。此處がよからうぞ。」

祖母が差し示す圖面を、清久が覗いて見ると、この祖母が、只今座してゐるところの住居、近藤一家の持地では、一等の地格の、眺望も最高で、しかも風を避けた溫かい土地の、その圖面だつた。

その林泉の、最も幽邃な地點に、筆の軸の尻で、丸い輪が、赤く押してあるのだつた。

「聖人をお迎へ申さば、この地に御庵を建てたもれ。そして、わらはが亡き後は、このあとを御寺にしてたもれよ。これが、ただ一つの、和殿への、老年の女の賴み、遺言ともおぼされてな。」

と、慈しい眼は、涙を溢れさせて、この望みをかなへさせてたもれと、語りかけ、ねだつてゐる——

清久は頷いた。

「かしこまつてござる。ばばさまの思召のままにはからひませう。御懸念あそばしますな。」

信賴を裏切るまいと、かしこまつて答へると、

「嬉しやな、嬉しやな。」と、齒のない齦まで見せて祖母は顏中を笑でうづめた。

その夜は、更けても、清久の祖母は、いつまでも〳〵寢につかなかつた。

「ささ、また、明日もござれば御安眠なされませ。更けて參ると寒さも身にしみまする。日頃と異つたことをなされて、お體を惡しうなされてはなりませぬ。」と清久がいさめると、

「いやいや、もうこの望みさへかなうたれば、今宵のうちに亡くなつても、心樂しうござる。」

と聞入れぬを、

「それはまた、あまりに御命を粗末になされると申すもの。折角の御希望の建築を、お差圖なさるのも、お樂しみではござりませぬか。」

祖母は清久に言ひすかされて、すつかりその氣になつてしまつた。

「それはさうぢや。さうぢやつたのう。まことに和殿はよいことを敎へてたもつた。さらば、今宵は早う休んで、明日からその仕事を見廻りませう。ほんに、さうであつた、さうであつた。賢しい人にはかなはぬの。よい事をいふてくだされた。」

「今まであつた御壽命ゆゑ、御大切になされてくださりませ。」

「さうでござるとも、人手に任せられることばかりはおじやらない。御不自由のないやうに、氣

をつけねばならぬ。」

さういふうちも、年よりの氣の短かさ、手を打つて人をよぶと、

「殿の御歸館ぢや、わしはもう寢る。」と、いそいそと立ちながら、暇を告げてゐる清久に、

「早う歸つて、和殿もお寢やれ。明日は早いぞや。」

と言つたが、立ちかへる清久を呼びかへして、

「のう、今宵は、わしは、天竺に生れる夢を見るかもしれぬぞや。わしは、かねがね、沙羅双樹の咲きつゞく涅槃の御地や、無憂樹の花咲く藍毘尼園や、祇園精舎のあるところを、巡禮いたしたい、いたしたいと思ふてゐたが、この年ではそれはかなはぬ。ぢやゆゑに、釋迦牟尼佛の御弟子――日本の釋迦如來でおはします、生れかはりたまひしとさへ傳へきく、日蓮聖人の御爲に、このまあ、小ッぽけな、わしの領地を、清淨な土地とみなして、型ばかりの御堂を造り奉つる。なう、清久、頼みがござる。わしに、わしの持てさうな輕い鍬を作つておくりやれ。わしに、細いのでよいゆゑ、鋤も求めさせておいておくりやれ。金槌も、面倒たのみますぞや。」

「かしこまりましてござります。」

清久は祖母が可愛くも、いぢらしくもあつた。

「まづまづ、お休みなされませ。明日は、塚原御堂に參り、その由申上げて、お迎へのこと御承知願ひおき參りまする。」

「さうおしやれ、さうおしやれ。」

祖母は、まだ何か言ひ出さうと首を傾けて、記憶をたどつてゐるので、清久は急いでその前を遮ぎした。

わが館に歸つて、妻ともその事など物語つて更かした清久は、夜がまだ白々明けのころから、祖母の使ひにおこされるのだつた。

「これはかなはぬ。後刻出ますと申上げておいてくれ。まだ、つい先刻歸つたばかりだ。」

と清久はねむけに床の中から不足をいふと、妻は、かひがひしく戸を押しあけて、

「さう、おしやりますな、祖母さまのおせがみは、またとある事やらどうやら、氣持ちよう聽いてあげてくださりませ。」といふに、清久は眼をこすりこすり起出して、

「やれやれ、此處にも手強い女性がをるぞや。しかし、わしも、そちとおなじ事を思へばこそ、ようして上げたいと念ずるのぢや。その悦びやうといふものは――」

と、清久は、床の上に起返つて、昨夜の祖母の、崩れるやうな笑顔を思ひ出してゐた。

早う、はやうと祖母にせきたてられた清久は、清げなれど贅らぬ素襖に服裝を調へて、塚原の三昧堂に訪れた。

「當國、一の谷に居住いたす、近藤伊豫清久と申すものでござる。上人御在島中、いささかの間

にても、御安住の地に御動座ありたくと、その義について罷り越してござる。」
と謹しんで申述るのを聞き、日蓮は机を押しやつて、
「お通りあられよ、せまきところではござれど、遠慮めされるな。」
と、縁に座してゐる清久を招かれるのだつた。
「祖母にて候もの、祕かに歸依したてまつり、何とぞいたして、御孝養の志を遂げたくと念じをりまする様子、いつか、その望みの、幾分をも遂げさせたくと存じをりましたるところ、はからずも――」
と、本間六郎左衞門重連が出立のさい、くれぐれも申付けられたので、この地に御出あるうちは、清久が代つて守護したてまつると告げるのだつた。
それは、決して、憂囚の人に申す態度ではなく、清久が代表する祖母の信仰の深さを語つてゐるので、片隅に聽いてゐる日興も、表に薪を割つてゐる僮の熊王も、體の骨のほつれる思ひがした。
「日ならず御庵室も出來つかまつるでござりませうが――」
と、清久は、小首を傾け、額に手をやつて、
「或は、思ひがけなく早く、御迎ひに罷りいでますかも知れませぬ。實は、老年の者の氣のせはしさ、昨夜もおちおち眠りませいで、かれこれと命じをりまする。あれでは御草庵の、屋根も葺

けませぬうち、御招じ申すかもはかられませぬ。」
と、忍びやかに笑ふのだつた。その目のうちには、曉方から人を呼びあつめて、歩役を申付け御堂こそは新しく調ずれ、上人のお居間には、もつとも念入りに造つた客殿を提供しようとしてゐる、祖母の嬉しげに立働く姿を思ひだしたからだつた。
「猶、年寄れる祖母の申しまするには、御本尊を据ゑたてまつるあたりの、作事、思召しのまゝにはからひたうござるゆゑ、うかがひ參れとの儀にて候へど――」
と、清久は日蓮に煩はしといはれはせぬかと、懸念けにいふのをきいて、日蓮の面は、照り輝くやうだつた。
「遠慮いたすべきところなれど、忝けなき仰せにまかせ、何かと日興に申付けおくでござらう。その要はと申せば、この國において、釋迦牟尼大世尊を御本體として安置し、法華經を講ずる、日蓮が最初の道場と相成り申すゆゑ、辭退はつかまつらぬ。お祖母の供養は、釋迦大世尊の、欣んでうけたまふところでおはすと、くれぐれも御傳へたのみ申す。」
「忝けなうござります。」と、清久はひれふして、
「日頃は、杖も輕きものを選むほどの老年になりましたに、皺ばみたる細腕に、鋤など持ちまして、曉方はまだ凍てまするに、顏赤らめ、汗など流して、これを一生の御奉公と存じをりますものに、只今の仰せ傳へきかせましたならば、悅び死も、いたしかねぬほどにござりませう。」

と、濡れたる聲でよろこびを述べると、日興は進み出て清久にいふのだつた。
「清久殿、その、聖地の、御地ならしのをりには、わたくし共をも人數のうちに、ぜひ御加へ下さりませ。これは、餘人にはまかされませぬ。法弟らのいたす業でござる。」
それを聽く、日蓮は莞爾と、「第一の柱の立つをりに、日蓮は供養申さう。」
「はッ。」
清久は、ただ、有難く、涙にくれるのだつた。これが、京、鎌倉の大身が、大寺院を建立寄進するのではない。佐渡の島の片田舍の、近藤づれの祖母が、小さき御草庵をしつらへるにすぎないのに——かくばかりの莊嚴なる仰せ——なるほど、祖母の狂喜するのもことわりなるかなと、思ひ當りひれふすのみだつた。
ふと、赤子の泣くのがきこえた。
草堂の中のものには、それが、ものの誕生といふやうにきこえ、初聲とも聽きなされたので、日興や清久は、
「あれ！」といふやうに顏を見合はせた。
佐渡へ來て——この、塚原へ捨てられてから、はじめてきく、無垢、無心の赤子の發する聲をこゝの師弟はきいたのだ。
赤子の聲の近よるは、里人との連絡のあることゝなり、大衆との接觸の、密接になるしるしで

もあるので、日蓮も、
「めづらしいことぢや。」と微笑んだ。
三昧堂の人々が、耳をたててゐると、
「たがよ、たがよ。」
その、あやしてくる聲は、近づくと千日尼だつた。
「尼御前でござります。」
と日興が唇をほころばして、千日尼が、誰の子を抱いてくることかと立たうとすると、外から、
「伯耆坊どの、金吾さまから伺ふてゐた、鎌倉からの女性——乙御前の母御が參られました。」
と、千日尼は案内した。
「なんとな、鎌倉から——」
日興は急いで緣に出て見た。
「おゝ、まこと、わせられたか？」
日興は心付いて身を開いた。あとを閉ざさぬ透間から、內側の者にも、外に立つ人が見えるからだつた。
「ようわせられたなう、この遠路を——」と、日興も出迎へに駈けおりてゐる。
「嚴寒にお立ちやつたときいたが、この風雪の山河を——、あの荒海を越えてまで、ようお見舞

ひ申しやつたぞ――」

日興は、殊勝なわが妹をでも見るやうに、いたはり、いたはりいふのだつた。

乙御前の母は、雪燒に、いくらか顏色は黑くなつたが、旅勞れもなく、若い健康さを、頰の上にも額にも赤々と漲らせて、顏一ぱいに笑を湛へ、眼からは涙をあふれださせて、背に泣く子の聲もきこえぬやうに、一心に面を三昧堂にむけて急いでくるのだつた。

それゆゑ、千日尼が、孫をあやす祖母のやうにひッ添ふて、たがよ、たがよと背を叩いて、赤子の顏を覗きこみながら走つてゐる。

日興は、師の前へかしこまつて、

「彼の、朱砂を燒くを業といたす女、遠々と、罷り着きました。」

彼女が、日朗よりも早く、賴基よりもさきに鎌倉を出てゐることを、賴基から聽いて、日蓮も内々案じてゐたこととて、その時の、心のうちのよろこびは、かいなでのものではなかつた。

――鎌倉と佐渡とでは、千餘里を遥つるに――山賊、海賊も、いたるところに巢をくふに、このか弱きものが、幼子をさへたづさへて、雪氷を踏みわけてよくも來つるよ。ことに、途次のほどは、鎌倉に合戰あらんと騷がしかりつらうに――目に見えずとも、法華經歸依の女を、これぞ梵天帝釋周圍を守り、恙なく渡來せしめたまひしならん――と、日蓮は口のうちに御經を誦するのだつた。

乙御前の母は、土にすわつて、緣に手をつくと、

「御敎へをうけに參りました。」と、第一にいふのがそれだつた。

「乏しい身は御承知あられます。差上げたいものを持ちませぬ、お許しなされてくださりませ。わたくしは、日眼さまにお鳥目をいただいて、やつと參りました。」

といつた。その次にいふには、「比丘尼となされてくださりませ。」

その時、

「おゝ、よう參つたぞ。女人佛法を求めて千里の道を來ることを未だきかず。日本第一の法華經の行者の女人よ。」と日蓮は謝するやうにいつて自ら出迎へた。

「嬉しかろ、嬉しかろ。さぞ嬉しかろ。」

誰にいふともなくいつて、千日尼は熊王から鑵子の湯を桶にあけてもらつてゐたが、

「さあ。さあ。」と、さめざめと、椽に顏をあてゝ泣伏してゐる乙御前の母を抱き起して、「御挨拶がすんだならば、顏も拭ふて、足も洗ふて、御堂へ上つたがよい。」

と、熊王のゐる、差懸けの軒下の方へ連れて行くのだつた。

「たがよ、誰がよ。」と、乙御前を抱きとつて、おむつを代へてやつたりしてから、

「上人さま、こゝにも佛種を受くる者がをります。」と、抱上げて堂内へ膝行入ると見知り越の清久がかしこまつてゐるので、一層顏の紐をほころばして、

「これはこれは、もう渡らせられました？」と一揖してから、
「昨夜遅く、お祖母様よりお便り頂きまして、有難いことに存じをります。」
赤子を抱く片手の、珠數の手で拜んだ。
「わたくしも、今朝早う一の谷へちよつとお立寄りいたしました。また、後刻から參ります。この阿佛房は、ずつと、祖母様おそばに居て、何やらコト〳〵致し居ります。」
「おゝ、もう參つてをるのか。」
と、日蓮は、阿佛房の様子を思つて、ほゝゑんだ。と、その笑みを、我に投げられたものとしてか、乙御前が、千日尼の膝の上で、ニコリと笑んで新星のやうな目を、笑み輝かしたが、あの母御前が、ふと、佐渡へ行かうと思ひ立つた動機の、洗ひ米のやうな、瑞々しい初齒を、紅梅の開いたやうな口許から現し示して、エンエ、エンエと聲を出して笑ひくつがへるのだつた。
目に入れても痛くなく、清きもの——諸人の目には、よう見えた。皆が皆、まじへものゝない同じ笑ひを笑つて、幼兒と同じきよらかさに打解けるのだつた。
「良き母の子は、良き子ぢや。」
何心なくさういつた日蓮は、自ら莞爾とした。おゝ、われも良き子ぞ、と思されたると、日興も、清久も、面をやゝ赤らめて、わが生みの母を思ふのだつた。
千日尼も、われは、良しと思はねど、わが子よ、良くてあれと思ひつゝ、膝にした乙御前を解

けるやうな愛情で頬を撫でゝやるのだつた。
「この子には、何處でお逢ひやつた。」
と、日蓮が千日尼に問ふと、尼は、ついそこでござりますと答へたが、
「いえいえ、尼さまは、毎日、わたくしを、迎へに出ておいで下されたのでござります。」
と、鼻の垢も拭ひ落し、髪にも櫛の齒を入れて、旅の塵を拂つて來た乙御前の母が師僧に告げるのだつた。
「尼様は、わたくしがどんなにしても、もう着かねばならぬ日取ぢやとて、案じて下さりまして船着の近い者たちに、知らせるやうお頼みおきなされて下されたのでござります。そして、毎日遠々のところを、御歩足を運んで下されました。」
乙御前の母は、千日尼の膝を、祖母などの膝のやうに、安心しきつて乘つてゐる幼兒を見やりながら、「おゝ來たかよ、ようお出でやつたと、然突仰しやつて、幼兒の背へ手をかけて下さつたお方のあつた時、わたくしは、腰が抜けてしまひさうでござりました。」
千日尼は默つて、口尻も目尻もしぼめながら、乙御前の頭を撫でゝゐた。
清久は見ること聽くことに感慨深げだつた。彼は暇申さうと手を支へてのちに、さも耻ぢらふやうにいふのだつた。
「御事缺きたる御日夕でござります。遠來の人のために、御入用のものもござりましたらば、何

とぞ仰せつけ下さりませ。私めも、祖母も、喜んで御用立申上げまする。」

「乙御前の母よ。」

日蓮は、清久が辭し去ると、再び机にむかふ前に訊ねられるのだつた。

「よう訪ねおはしたな。日蓮の安否を、さやうにまで心懸けられたか？」

「はい、それもござりますが、どうにもして御目にかゝり、うかゞひたいこともござりまして——」

日蓮の瞳から、サッと射照すやうな光りが放たれ走つた。

「わたくしが、比丘尼となられますか、わたくしに法華經におつかへ申すことが出來ませうか、上人さまによつて、お許し得られますかどうか、そのために出ましてござります。」

と乙御前の母は、一心を籠めて、信實を語るのだつた。山河乏しとせず來しことも、これ聞かうためのみであつたので、齒に衣きせねば、言語を飾るひまもないのだつた。

「よくぞ申された。」

日蓮は稍くつろいでゐた膝を正して、

「法華經は、正直捨方便とて、方便を捨て正直にと教主釋尊の仰せであり、皆是眞實と、多寶如來は申され、また法經華には、質直にして意柔軟、柔和にして質直なるものでなければ、この經は保たれないとある。正直なる事弓の弦のはれるごとく、大工の打つた墨繩のやうに正しいもの

ゝ信ずる御經である。糞を丸めて栴檀なりと申しても、炷けば香にて知れる。一切經は佛の金口のごとし。この法華經こそ實語のなかの實語にて候ぞ。その實語の御經をば、正直の者こそ心得るもの候ぞ。」

「身に光のなにもなく、いかにして法華經をたもてませうかと、それのみが心懸りでござりました。不文、淺學は、勉めて勵み得られませうと存じましたが、根本のことが、方便ではあらぬかと、自らを疑ひまして、うかゞひに出でました。有がたうぞんじます。」

「相州鎌倉より、北國佐渡まで、山海遙にへだてゝ、山は峨々、海は濤々として、風雨、時にしたがふことなく、山賊海賊も充滿する世の中、宿々のとまりとまりにも、民の心は虎のごとく、犬のやうであるに、現身に三惡道の苦をへて、しかもひとりの幼子を、預くべき父もたのもしからず、離別久しといふに、よくぞ、法華經のために御渡りあつたるぞ。今、實語の女人におはすること、當に知るべし、當に知るべし。」

日蓮の眉宇は、この朝ほど、うら〳〵と慈光のたゞよつてゐる時を、島へ來てからのち、いまだ、誰もが見ない柔らぎを示してゐる。

乙御前の母が、よく納得ゆくやうにと、ことをやはらげて、ゆつくりと、教へ訓されるさまが晴れたる空に、初霞のたなびくやうに、清淨に、めでたく、なごやかなので、それは、あの嚴寒

に、この塚原に埋められて、氷の原の白雪裡に、迫害にもくつせず、土僧土民たちを破折せられた、すさまじい氣宇の御人とは、おなじ人とは思へぬほどのものであつた。幼兒の乙御前が、母が隨喜の涙にくれてゐても、すこしもおそれず、にこやかに笑みかけ、語りかけるのでも知れてゐる——

「二十字の偈と申すことの起りと、八字の法と申すことの紀元を知りたく存じます。」

と、乙御前の母は質問した。

日蓮は輕くうなづいて、ふと、眼を千日尼の方へも廻された。

「尼御前よ、この問ひは、女人成佛のことにも觸れやうほどに、諸共に聽聞されたがよい。」

「これはまた、思ひかけぬ法樂をうけますることでござります。」

と進み出で、千日尼は謹んで珠數を頂いたが、乙御前にも、

「わからずとも、おとなしうしてうかゞへよ。」と頭に手をあてゝさげさせた。

「太古、樂法梵志と申す者あつて、十二年の間、多くの國々を廻つて、如來の敎法を求めたが、その時には未だ、佛、法、僧の、三寶は一つもあらなんだ。この梵志は、渴いたものが水を求めるやうに、飢えたものが食を求むるがごとく佛法をたづねてゐると、一人の婆羅門が來て申すには、我れ聖敎を一偈持てり、若、實に佛法を願はゞ與へてもよいが、汝の皮を剝いて紙とし、骨をくだいて筆とし、髓をくだいて墨とし、血をいだして水として書かんといふならば、佛の偈を

說かんと申した。」

と、日蓮は、まづ二十字の偈について說きいだすと、拜聽するものゝ誰もが、梵志は婆羅門が申付けた通りに、皮を剝いて紙ともしたであらうと、自分らも梵志であつた場合にはさうしたであらうと、思ふのだつた。

梵志は皮を紙とし、骨を筆としたのだ。すべて言はれた通りにしたが、婆羅門は何も敎へず忽然として消え失せてしまつた。と、日蓮は語りつゞけた。

「梵志が、天に仰ぎ、地に俯して、その偈を聽かなかつたのを嘆き悲しんだとき、佛陀は現はれたまひ、二十字の偈を說かれた。その意味は、正法を信じ、非法を終行いたすな。この世でも未來でも、眞の行者は安穩であるといふことになる。梵志と申すものは、この偈によつて、須臾の間に成佛せられた。また——」

と、日蓮は、その梵志に偈を說かれた佛陀が、まだ菩薩であつて、釋迦菩薩が佛法を求められたとき、一人の癩病人が來て、我れ正法を持てり、其字二十なり、我癩病をさすり、いだき、ねぶり、口に二三片の肉を與へれば說くべしと云ふに、そのごとくして得られた法といふは、

「——如來は涅槃を證つて、ながく生死の煩ひを斷つた、若し聽くものが至心であつたならば、必ず量りない樂を得られると申す意味の偈である。」

——身の皮を剝いて紙とこそしないが、心に記するものは、一句をも聽きもらすまいとする。

乙御前の母は、小さく疊んだ紙へ、細かく書きつけ、書きつけして、
「八字の偈にも幾種がござりますか？」と、まことに渇するものが飲むやうに貪つて訊くと、
「昔、釋迦如來、轉輪聖王なりしとき、夫生輙死、此滅爲樂。の八字を尊びたまふゆゑに身をつくし、財を獻げ、千燈を點して、この八字の供養をなし、石や壁に書きつけて、要路をゆくものが見て菩提心をおこすやうにとせられた。また、雪山童子は、雪山と申す山にて、外道の法に通達せしが、ある日大鬼神の來て、諸行無常、是生滅法と、その八字だけを說いて、後をいはなかつた。しかし、それを聽いた雪山童子の悅びは非常であつたが、その八字だけでは、半分の如意珠を得たやうで、華は咲くが實のらないやうであるので、後の八字を聞かせよと申された時に、大鬼神のいふには、我れは數日の間飢ゑてゐるから正念が亂れて殘りの八字が說き難い。食を與へれば說かうと申した。」
「雪山童子と仰せられる御方は、釋迦牟尼佛でおはせられますか。」
と乙御前の母は、一心不亂に質疑するのを、日蓮は樂しげに、
「さうぢや、大鬼神は帝釋であつたのだ。」
と釋される。
「で、童子は、飢ゑたる鬼神に、食を與へられましたか。」
「いかにもさう申した。童子云く、何を食とするかと、鬼答へて云く、われ望むは、人間のあた

ゝかなる血肉である。我れ飛行自在にして須臾の間に四天下を回つてたづぬれど、あたゝかき血肉は得がたし、人間をば天守りたまふ故に、失なければ殺害することかたしと――その時、童子はその身を布施となされた。」
「その身を食にあたへて、いかにして偈を得られますか――」
乙御前の母は鋭く質問する――
その時、乙御前の母は、日蓮の、敎へ諭す憫れみの慈光を凝とうけて、その眼光を見かへしてゐたが、ハッとしたやうに氣がついたか、「あつあ！」と、解りかけた聲をあげた。
「解つたか？」と、師は何處までも彼女を啓發しようとするやうに、
「で、あるから、我身を布施として、彼の八字を習ひ傳へんと、雪山童子が望まれたときに、鬼神もかく申した。汝の智慧は甚だ賢しい。しかし、我をや、すかさゞらんと――その時、童子の答へたまふには、瓦礫と金銀をかへんに、是を代へぬものがあらうか。この山に居て、たゞ徒らに死しなば、鴟梟、虎狼に食はれて、一分の功德もあらぬに、今この身をさゝげて後の八字に代へるは、糞を飯にかへるがごとしといはれた。だが、鬼は中々信じない。しかし、童子が、着てゐた鹿の皮を敷いて鬼神を請じ、蹲踞いて合掌したをりに、鬼神がその座について說かれたのが生滅滅已、寂滅爲樂――卽ち、生滅を滅し已つて、寂滅になつたのを樂と爲ると、後の八字の偈を敎へられた。」

乙御前の母はまた問ふ——

「諸行無常、是生滅法。生滅滅已、寂滅爲樂は解りましてござります。その後、童子は鬼神の餌となられましたか？」

「さうぢや、なられた。」と、日蓮はいふ。

「雪山童子は、この偈を習ひ學して、木石に書きつけて後、大鬼神の口に身を投げ入れられた。また、藥王菩薩は、法華經の御前に、七萬二千歳が間、臂を燭したまひ、不輕菩薩は多年の間、二十四字の故に、無量無邊の四衆に罵詈り、毀辱められ、當時の男女の僧尼から杖木や石瓦で打擲かれた。」

「それは、何故でござります。」

「衆生がみな菩薩の道を行ひ、佛となることが出來ると打開けられては、その當時の寶僧らが困じたのでござる。」と、日興が、不審をたてた千日尼に答へてゐる。

「また、これも昔、檀王と申すは、妙法蓮華經の五字を敎はるために、阿私仙人に千歳の永い間給仕をいたされ、水を汲み、菜を摘み、身體を牀座としてまでつかへられた。この、藥王菩薩も不輕菩薩も、檀王も、みな釋尊の前生の御終行であつたのだ。われらはいかにいたしてこの功德をうべきぞ。雪山童子や樂法梵志のごとく、身の皮を剝くべきか身を投ぐべきか、藥王菩薩のごとく臂を燒くべきか——これは、時に適ふて取捨いだすがよいと章安大師が釋されたのが理で

ある。正法を修して佛になる行は時による。日本國に法華經なくて、それを知れる鬼神一人あらば、身をその口に投ぐべし。日本國に油なくば臂をもともすべし。あつき紙はこの國にも充分にあるに、皮を剝くに及ぶまい。然るに、唐の玄奘三藏は西天に法を求めて十七年、十萬里にいたれり。わが傳敎大師は御入唐二年波濤三千里をへだつ。これらは男子であり、上古であり、賢人であり、聖人でおはす。女人の佛法をもとめて、千里の路をわけしことをいまだきかざりしぞ。龍女が卽身成佛も、摩訶波闍波提比丘尼の記別にあづかりしも權化でありしやも知れぬに——」

「それは、何故でござります。波闍波提比丘尼は、尼僧の最初の人とうかゞひますに——しかも佛の養母であり叔母である御方で、その成佛は、世尊御在世のをりの事と、うけたまはりましたに——」

と、乙御前の母は、知らぬは知らぬとし、すこしにても知れるは障かりなく問ふ。

「その許のいはれるごとく、それに間違ひはない。たゞし、女人の性と申すものは——」

と、日蓮はこの女法弟へ諄々と說かれる——

「男子女人、その性本より別れたり。火はあたゝかに、水は冷たし、海人は魚をとるにたくみなり、山人は鹿をとるにかしこし、女人は物をそねむにかしこしとこそ經文にはあるが、女人は佛法に賢しと書かれてあるを見ぬ。爾前經に、女の心を淸風に譬へてあるのは、これは、淸らかなる、心地よき風のやうだと申すのではなくて、風は繫ぐことは出來ても、とりがたきは女の心ぞ

といふ意である。女人の心を水に忍がくに譬へたのは、水面には文字とゞまらぬゆゑである。女人をば誑人にたとへたのは、ある時は、實であり、ある時は虚であるからで、女人を河にたとへられたのは、河は直いやうであるが、一切曲つてゐるからである。」

と、日蓮は說く——

乙御前の母は、その時、眼をあけて上人の、その後を申されるロ邊を見た。

「女人は地獄の使なり、能佛になる種子を斷つものである。外面は菩薩に似て、內心は女夜叉のごとしと華嚴經にはある。また一度女人を見るものは、よく眼の功德を失ふ。たとひ、大蛇を見るとも、女人を見るべからずとある。また、ある經には、三千世界の男子の、多くの煩惱と、一人の女人の業障とおなじともあり、また、別の經には、三世の諸佛の眼が、大地に脫け墮ちても女人が佛に成ることは出來ないとある。だが、この法華經提婆品にては、八方の龍女現身のまゝにての成佛があり、これが女人成佛の最初であり、畜生の女人すら成佛を得てゐる。」

「さほどまでに、女人は救ひのないものでござりませうか——」

乙御前の母は、涙さへ浮かべてゐる——

「急ぐにあたらぬ。」

と日蓮は、「そもじたちは、法華經を持すところの、まことに希なる女人だ。眞實の人である、左樣な疑ひはあらぬ筈ぢや。」

「疑ひなど、みぢんもござりませぬ。たゞ、たゞ、佛の生れさせられました、天竺でも——佛の國でも、左樣に、女人は、度しがたかつたのでござりませうかと、それがかなしう思はれます。」

「まことになう、そのことぢやが、佛の生れられた國であるから、その土地のものがすべて佛のごとくおはすといふのではないぞ。むしろ、淺間しい人界のさまを、つくづくみそなはせられたからこそ、世を救ひ、人を救ふためには世尊は苦難せられ成道なされたのぢや。言ひかへて見れば、佛が現出れたまふべき世のさまであつたのぢや。」

「世尊の御姨母にあたらせられます御方が、比丘尼にならせられた最初の御方であらせられますのに、なぜ、さうまで、女人をおとしめられたのでござりませう。」

乙御前の母は、心にみつるまでと訊ねるので、

「佛は、肉緣の女人のみについて申してをられるのではない。廣く女性と申すものについて仰せられたのである。女人成佛はあるとも女人の性質が、すべて前に說かれたものと相違すると申すのではない。かゝるものにても、成佛いたし得るとの御敎へである。」

「大愛道夫人について、ますこしうかがひたうございます。」と、千日尼も聞き殘してゐた、この最初の比丘尼について、かゝる時に、うかゞひおきたいと願ふのだつた。

「佛の御姨母が佛にお賴みなされて、御出家なされたが、それすら、中々もつて御許しはなかつたのだ。夫人は、佛の生母である摩耶夫人の御姉にあたつてゐる方だが——」

と、上人は、ふと、乙御前が、母の胸もとに手をやつて、コトコトと、何か言ひながら、母の乳房をさがすさまに、凝と眼をやられて、

「乳をとらせたがよい。」といはれた。

乙御前が、母の乳房にとりついて、コク〳〵と音をたてゝ堪能するまで乳を吸つてゐるのを、にこやかに日蓮は眺めてゐる。

母が、少しも早く寢せつけようとすればするほど、この子は機嫌よく、何か解らぬことをムウ〳〵と語りながら樂しげに空いてゐる乳房の方へ手をさし入れて乳首をひねり廻してゐる。

その暇にと、日興は、梅の花漬を白湯に浮かせて、師僧の前に捧げると、

「これは珍らしい、今年の梅の初花は、白湯の中に開いた。」

と、風味せられるので、それを參らせた千日尼は嬉しげに、

「去年の春が、今年の初花と、咲きかへのある御賞美を受けました。」

と、皆が御相伴するうちに乙御前も寢ついて、母もはじめて咽喉をうるほした。

「日興よ、かゝる折こそよけれ、二人も概略は知りつらんが、釋尊の御生れからの、波邪波提夫人との續きあひを語り聽かせよかし。」との命に日興は、

「かしこまつてござります。」と、釋尊の御像の方に向ひ、手を合せてから語り出したのによると

――釋迦族は、西天竺に於いて、強大な種族とはいへなかつたが、勝れたる人の出る族で、釋

迦とは、強勇、能力の意をもつた名で、牟尼とは智者と申すに當る。

迦毘羅國の淨飯王と摩耶夫人との間には王子がなかつたが、父君五十六歳、摩耶夫人四十五歳の時に姙もられたのが、釋尊におはします。

摩耶夫人は、この國の風習で、白象の背に乘つて、生家である拘里國の天臂城へと、出産のために赴かれる途中、藍毘尼苑と申すところに立ちよられ、そこにて御産なされた。

時は陽春に當り、薫氣と光輝との中に、もの皆が開け發する時、天地赫燿たる光の中に、世界の教主、救主の大世尊は、御産聲を發せられたのだ。

地には百花、燎亂と咲き亂れ、空は藍より濃く、綠はます〳〵翠色深く、陽は水晶よりも透明に眞白く輝き、さま〳〵なものを透して五彩まばゆく燦々と、光の雨の降るが如き藍毘尼の苑の中は、蒸せ返るやうな香氣にみちてゐた。

藍毘尼苑は、拘里國の國境にあつて、摩耶夫人の兄善覺長者が、母の藍毘尼夫人のために造つたところの苑なので、こゝに憩はうと、白象より降りた摩耶夫人は、桔梗色に澄む池水をめぐり無憂樹の大樹の、枝も撓わに咲く下に凭らつて、その一華をとらうと手を差伸したをり、王子は生れさせられ、天下天下、唯我獨尊。と七歩前進してのたまはれたのだ――

そして釋尊が誕生すると同時に、地上に七莖の蓮華生じ、自然に、この蓮華の上を御座とせられた。

摩耶夫人が、佛御誕生の七日後に、甍じられた。その後を淨飯王の夫人となつてをられた、姨母の、波闍波提夫人に育てられたのが、この御姨と世尊との御繋がりであつて、長じて妃となされた耶輸陀羅女は、叔父善覺長者の御娘である。

――成道なりし世尊が、すつと後に、迦毘羅衛國の精舍に御遊行なされた時、波闍波提夫人は出家の願ひを申出られたが、御許可がなかつたのだ。一度、二度、三度目に、阿難がおとりなしをして許されたのだつた。

「阿難は、女人でも精進すれば煩惱は除けると說きたまふ世尊が、御叔母であり、御幼少のをりには、あれほどの御愛撫をお受けなされたに、しかも、お年をめされて、この雨の中を、世尊御遊行の御跡を慕つて、この那私縣まで、御足も洗足、着るものも土まみれになつておいでになり出家の御許しがないとて、門前の柱によつてお泣きになつていられますのに――と、强硬に御談じ申されたのでござる。」

と說く日興にむかつて、乙御前の母は膝をすゝめた。

「阿難尊者のおとりなしで、おのぞみは叶つたのでござりますか?」

「それが、中々もつて、易々と通つたのではござらぬ。世尊の仰せられるには、女子が多く生れ男子が少なく生れる種族は衰微する。女人が僧團に入りくれば、必ず梵行を汚す。それは稻田に惡露がをりると、善穀を悉く腐らすやうなものぢや、恩愛に溺れて、それで出家を許すことは出

來ない。と、仰せられた。」

日興は、千日尼が悲し氣なしばたゝきを眼瞼に見せたのと、乙御前の母が、パチリと大きく、目でまで嘆息したやうなのを見て、

「いや、さうは仰せられたが、それは出家いたすを容易いものと王者の氣隨、肉身のわが儘をもつてせられてはとの御考へも、無論あつたのであらう。また、僧、比丘尼になるには、それだけの難行苦業がある。多くの女人が、家庭を離れてまで、その修業をいたすには及ばぬ。輕薄な心で、遂げ得られぬ出家をいたし、僧團へはかつて梵行を汚されると、佛法を却つて盛んにならしめぬ。佛法に歸依する女人は、ありの儘の姿にて、慈悲、善根、淸淨を行し、在家するがよいと女人の僧が、流行ものとなるのを怖れておはしたと存ずる。」

「そのをりではないが、釋迦族の亡びようとしたをり、逃れて比丘尼になつた女人が多かつた。」と、日蓮も口を添へて、「もとより、波闍波提比丘尼も、阿羅漢とならせられ、聲聞とはなつてをられたのぢやが、世尊が、出家を中々もつてお許しなかつたも、その人の性質にもよるものであらう、この比丘尼は成佛いたした後も、誠のことが摑めなんだ。」

二人の女は、深い吐息に、胸を屈して、うつむいた。

日興は、彼女らの心を引立てるやうに、爽かな音聲で、

「そこで、八敬法と申す尼の嚴守する制が出來たのでござる。一、比丘には絕對服從いたす事。

二、僧園にはいつて半月以上經つた比丘には禮をもつて仕へる事。三、比丘とは同居同室せぬ事。四、自分の所作を檢べて常に反省いたす事。五、自分の見聞するところによつて比丘を批判せず比丘の見聞に基いて自己を批判いたす事。六、道法を學ぶには比丘の敎へに聽く事。七、若し戒律を犯せば衆中に於て懺悔し、直に驕慢を捨てること。八、自分が古參であり、相手の比丘が新參であつても、その下位に座をとる事――以上の八敬戒を嚴守嚴持出來得るなら、許さうと、阿難にまで仰せられたので、はじめてそこに、比丘尼が許されることに相成つた。しかし――」

と日興は、やゝ口元をゆるめて、

「この夫人は、佛母、摩耶夫人の御姉妹であつても、或は似てもにつかぬ、まことに、一筋ある、困つたお方ではなかつたのでござうか――申してみれば、いはゆる女人の持つ惡さを、中々多分にお持ちになつてゐたので――といふより、その當時の女人の、ある一方の代表的な御性格ではなかつたかと思はれる。申すまでもなく、その當時においても、彼の勝鬘夫人の如く、好き方を代表する多くの麗はしき、御方も、中々もつて多くはござつたが――」

「世尊はこの時、阿難に仰せられるには、女人に出家を許したために正法千年は五百年に減ずるであらうと申された。」

二人の女は、首を垂れて聽いてゐるだけだつた。

日興は續けていふ。

「波闍波提比丘尼は、八敬戒を堅く持し、女人の姿を變へ、妃の位を捨てゝ、佛のおすゝめを敬ひ、四十餘年の間に五百戒を持つて、晝は道路にたゝずみ、夜は樹下に坐して、後生をねがはれたが、どうしても成佛の道を許されず、永不成佛の憂名を流された――」

乙御前の母は口惜けに、「それほど女人は賤しめられるものでござりますか。」

と、日興に、そのわけきかうといふふうに問ふ。

「いや、そのころの天竺の女性は、たゞ、肉慾の具と見なされてをつたので、佛陀の直弟子となつた比丘尼のうちにも、出家の途中、泉にうつる美しき我姿に見とれて、發心がもろくも碎けた女人や、そのほか、甚だしい行爲のものも澤山にあつて、日本の、只今の女性たちと、ひとつに見ることは出來申すまい。」

「では、女人を、御尊みになつたこともございますか?」

「もとよりござる。」

日興は、師の御面を、ちらと見て、母の膝を枕に眠つてゐる、乙御前に眼をやつた。

「母、堂におはすものは最も富み、母、堂におはさぬものは最も貧し。また、母、健在なる間を日中といひ、母、死歿してのちを日歿といふ。また、母、おはさば圓滿であるが、母、歿せば空虛である。と申す御敎へを、人間みな、母をもたぬものはなきゆゑ、いかなるものも皆、有難く拜受いたしてをる。」

「おゝ、左様に仰せられましたか――」
乙御前の母も千日尼も、聲をあはせていつて、今更に、御像の方へ禮拜するのだつた。
「ゆゑに、心ある女人は、女身轉身といふことをお願ひ申した。」
と、日興は、彼女たちが、比丘尼についてといふより、女人と佛教といふ大問題に觸れやうとしてゐるのを、またの折もあるであらうが、些かでもと、ねんごろな心をもつて、
「あるとき、緊那羅王の諸夫人たちが、佛足を頂禮して――無上道心を發せど、女の身を持つては得道のほど心もとなし、何とぞ、女身を轉じて、男子の相となり、正眞の道を得たし――と歎き申せしに、かくなさば、無上道を得るらんと、教へたまひし六法成就の說法は一法は菩提心、菩提心は、三界の最勝心であつて、一切善根の莊嚴をなすものである。二法は佛に親近し、邪見を離れること。三法とは身戒、口戒、意戒。四法は布施を行し、戒律を守り、賢聖を恭敬し、正法を聽受すること。五法とは、法を愛し、法を樂しみ、法を欲し、法を聽き、聽き終らば正念して女身を脫ふこと。六法とは、速疾、柔軟、質直、無僞、無幻、無詐の心を持つこと――」
「と、申しますと、女身を轉じ、男相となりませねば、得道成就はいたしませぬのでございますか？」
乙御前の母は一生懸命だ。心の底には、そんな話はあるまいと思ふ念が、眉宇にみなぎるのを傍から日蓮は、

「母よ、乙御前の母よ。」と呼びかけられた。
「そなたは、それが審しいか？」
「はい。」
乙御前の母が、憚りなく、はいと答へると、千日尼も、さもといふふうに頷いてゐるのだつた。
「そなたは、最初の女人の出家人に對して、どう思やるな。」
「はい、わたくしは、それが、波闍波提夫人でなく、御生母の摩耶夫人でおはしましたならば、さやうにまで、女人は非議されなかつたかと存じます。」
乙御前の母の言葉の下から、千日尼も、
「わたくしも左様に存じあげます。世尊をお生み遊ばした摩耶夫人でおはしましたならば、さるあなどりは、決してなかつたでござりませうと、まことに殘り惜しいことに存じます。」
「いかにもなう。」
と、日蓮は沈思するやうに、「佛母摩耶の名は、摩耶とは、妙――妙とも釋され、また、幻――まぼろしとも釋される。佛を產ませたまふために現はれたる御方のやうにだけ思ふが、女人の考へとしては、まことに、さうも思はうよの。」
乙御前の母は、師の上人にむかつて、
「上人さま、わたくしにわかりませぬのは、人は、男女の性別はござりまするが、必ず一人で生

れるものではございませぬ。それを、何故、さまで女人だけを賤しめるのでございませう。そして、女人を賤しめながら、母を、尊むのも不思議でございます。女人ならぬ母はなく、母となるのは、いかなる世といへど女人でございます。御經のなかに、誰ぞ、女人にして、女子のために何か申したものはございませぬでございませうか？」

「それは、あるぞ。」

日蓮は、この、深甚な義についての質疑を持つて訪れて來た女子に、早速、彼女が望みを遂げさせ、尼にしてとらせんと思はれながら、「離意女と申す女人が、その問題について、文殊師利と問答いたしたことが、諸佛要集經にある。文殊が離意女に、何故に女身を轉じたかと問ひしに、彼女は申した。妄想を懷くのをやめたがよい。抑々、諸法に達したものに、男女の別があると思ふやと反問いたした。」

と、申されるに、乙御前の母は、縋りつくやうな聲音で、

「離意女がさやう答へられたのでございますか？」

「さうぢや。その時、文殊答へて、區別はないと言つた。」

「おゝ左樣ございませう。そして、離意女は、そのあとを、何と申しました？」

「離意の申すは、外境に男女の別ありやと。文殊曰く、區別なし、また離意の問ふ、受想行識に男女の別ありや、曰く、なし。地水火風に男女の別ありや。答、なし。無邊際の虚空に男女の別

ありや。なしと答ふ。離意女、その時申すには、區別あらぬを存じながら、何故に、女身を轉ぜしかなどと、愚問を發せられるぞ。われは、男女の區別をなさざるゆゑ、女身を轉じて男相と成すの要なし。諸法を考へみるに、合もなく散もなく、本際なし。一切諸法は、虚空のごとく空靜である。その諸法中にあつて、女形男相のなんの必要があると申した。」

老若二人の女性の面は、笑み開く、蓮華花のごとく、清淨な欣びで、照り輝くばかりだつた。

「文殊がその時、かく申されたのが結論となる。然り、いかにもさうであつた。眼、耳、鼻、口、身、意のいづれにも男女はない。合も散もない。諸法にも、男女のない道理であると――」

「おゝ、忝けないことでございます。」

千日尼は老の眼をしばたたいて、妙法蓮華經、妙法蓮華經と、額を合掌の手の上にふせて繰りかへしてゐる。

乙御前の母は、寢させたる我兒を搔き抱くと、眠つてゐる幼兒の、小さな掌を押しひらき、我掌の中に入れ、體内佛か、蓮華の花片が、花心をかこむやうにして合掌し、おがむのだつた。

「日常の疑問が、それにて晴れましてございます。この兒も、まだ、東西も辨へませぬうちからかやうな、女子としては言ひ得ませず、解き得ませぬ、深い教へをうけたまはりましたことは、いかなる御法緣でございませう。この乙御前も、必ず比丘尼の戒をたもつものと相成るに相違ございませぬ。母子二人して、法華經に御つかへ申上げます。」

「よくぞいはれしぞ。彼の波闍波提夫人の、比丘尼とはなりたまへど永不成佛の淺間しかりしに法華經によつて一切衆生喜見如來と成らせられしにもかゝはらず、世尊が大音聲を以て、普く四衆に告へて、誰か能くこの娑婆世界において、妙法蓮華經を廣く說かんと仰せられたをり、我も我もと思ふに、重ねて三度まで、尼御前、女人達よ、佛恩を報ぜんとならば、何事をも忍びて、我滅後に、この娑婆世界にして、法華經をひろむべしと御諭しありしにもかゝはらず、かの尼、御用ひなく、佗方の國土にてこの經廣く寛めんと申されしはよく〳〵の不心得の御方であつた。それとはことかはり、そもじは、まことにいみじき生れぞ——」

と日蓮はなほも述べられるのであつた。

「釋尊のみ教へは、寂光淨土は卽ちこの娑婆の國土である。娑婆の救ひであることは、我滅後此娑婆世界にして法華經を弘むべしと、仰せられたのでもわかるに、佗方の國土にて弘めんと申せしとは、よく〳〵の不心得の尼ぞかし。されば、佛陀も惡しと覺しけん、側向きて諸菩薩の方をつくづくと御覽じてゐさせられたと申す。女人は、由なき道には名を折り、命を捨つれど、成佛の道は弱かりけるやと、我も思ひしが、それとはことかはり、そもじたちは今末代惡世に生れ、かゝる、もの覺えぬ島の夷に罵られ、打たれ、責められ、又は幼兒を抱きて山河、大海、千里を遠しとせず法華經を求むること、砂を蒸して飯となす人は見るとも、かゝる女人を見るは難し。まことに、この娑婆世界において、法華經の爲に、名を失ひ、命を捨つる尼でおはさうぞ。一心

に迷ひなく信じたまへ。一切の衆生は、惡くわが子であるとの經文の如く、佛陀に偏頗はあらせられぬ。」

日蓮の說明しに、ただ〳〵忝けなく、老若の女人は、

——妙法蓮華經、妙法蓮華經——

と、ひたすら題目いたすばかりだつたが、

「あゝ、あ！」と、千日尼は、吐息をついて、「三度も同じことを仰せられたとあるに、一度では悟らずとも、繰り返し給ふは何故ぞと、心づかぬとは、いかなる比丘尼でおはしたことよなう。肉身の御姨ではあり、比丘尼の上位の御方でもあらせられる故、お叱りもなされいで、他方を見て嘆かせられた世尊の御心が、思はれる——」と、わが僻事のやうに、千日尼が申譯なげにかしこまつて、「なう、乙御前の母御よ。」と呼びかけ、他意なく賴み入つてゐる。

「わらははもうこの年、たゞもう、在家の尼で、ひたすら御經にすがり奉るものでござれど、こなたは若い。しかも、知らねば止まぬ强き御心を持たれ、法華經を持する女人として、誰にもまさるお方であると、わらはは賴みに思ひまする。何とぞ、文殊師利を說きふせた、離意女に劣らぬお人となつて下され、御修行を賴みまする。」

そして、師の坊に向つては、幾たびか禮拜して、「乙御前の母は、出家得道の願ひを申述べをりました。上人にも、お許しあるお心に存じ上げをりまする。つきましては、わたくしなどから、

かゝること、お願ひ申上ぐるは、何とも差出がましうはございますが、まけて、お聽屆け頂けませうならば、今日――」と、いひかけて、日興の方へも、賴むやうな目をやつた。

「今日は、佐渡一の谷へ、法華經弘布の御庵の、第一の柱をたてます、はじめての鍬を入れた日でございます。なりませうことならば、乙御前の御母も、この良い日に、得道おまし下されませ。」

「なにさま、尼御前はよう氣づかれた。」と、日蓮は、うらうらと眉宇をのべて、「いかにも良き日に候ぞ。法華經第四の卷寶塔品には、佛の滅後に、法華經をよく解せんものは、諸天、全世界の眼なりと說かれてある。日本國の人々の日蓮をあだむは、諸天及全世界の眼を刳ることである。それ知らぬ者のあまりにも多き中に、ここに女人達の勝れたるが揃ひておはすこと、女人成佛を說きし法華經の功德の廣大なるを知るにあまりありて、かく申す日蓮も嬉しく候ぞ。乙御前の母の如きは、わが法弟とは申せ、聖人と申すもはづかしからず。釋迦多寶十萬分身の諸佛、並びに上行無邊行の大菩薩、大梵天王帝釋四王等の方々が、影身に守り給ふならん。日本第一の法華經の行者の女人に、日妙聖人の御名を授け奉らん。」と申された。

思ひがけない御賞美に、乙御前の母は答へるすべも知らぬけに、輕く唇を開いて、呆れたるさまに、われとわが耳を疑つた。

「あゝ、有難き御事でございます。わたくしは、かゝる名譽の女人を法の友として、共にをることが出來ますのも、みな、法華經歸依の、おんかけでございます。」と、千日尼は、何やかやと、

その先までも考へるのだつた。

「なう、伯耆御房は、いかに思はせ給ふぞ。ただ今の有難きお仰せ、乙御前の母こそ、紛れもなき、日妙聖人にましませど、彼女鎌倉へ立ち歸りて、左樣に申すとも、人々の信ぜねば便なうはべる。これは、人々の頷くやうな、お取りはからひがなうては叶ひませぬ。」

「それはさうぢや。」

日興も、その懸念を持つてゐる。で、「日妙聖人そのお人さへ、あまりの輝かしさに、その身の受けさせられたみ名とは、思はれぬほどであれば、これは、鎌倉の人々の信ぜねば如何なりませう。それに、あまりにいみじきみ名故、その人自ら申しましたのでは、却つて寃しまれるかも相知れませぬ。」

「おゝ、さらば、後よりして、消息してとちせうぞ。日妙よ。」と、日蓮は乙御前の母に細々と、

「やんがて、おことの、鎌倉へつかれる頃、この事筆にして書いてつかはし申さう。それを誰彼にお見せあつて憚りない。經文は、辨殿日昭につき、質疑を明らかにせさせ給へ。四條殿の奥方は、さこそ羨しうおぼすことであらう。」と、日眼女も總明な女人であると、氣質すぐれたる女性を法弟に持つことを、莞爾とされた――

――それから、暫くしてから、一の谷へと急ぐ二人の女性は、この二人だつた。

說敎を承りしをりは、赤らみ上氣してゐた乙御前の母の面が、緊張に蒼ざめて、まだ、その名

殘のとけぬ、身の緊繫縛に輕く戰いてゐるのを、傍らから、しきりに力づける千日尼は、「ここにて、青尼にお成りやるには及ばぬと、伯耆房も申されたが——」と、上人の御手に取り上げられて、髻の先だけを切りとつた、乙御前の母を、とみかうみして、「そなた程の、果報いみじい女人はをりやらぬなう。あのまあ、御鋏を頂きやれたをりの莊嚴さ——わらはは、この世を果つるをりには、きつと、あの有樣が目に浮かぶであらう。有難いことでおはすぞ。釋迦牟尼佛のお生れ變りであらせられる上人が、おん手づから傳道を興へられた、しかも、その女人は、日ノ本にあらうことかあるまいことか、前代未聞とも申さう、有の儘にて、しかも、若い母の形體の儘で聖人のみ名を給はるとは——おゝ、何でこれが末世ぞや。かやうな奇瑞を見まゐらせると申すもわらはも佛性を得てをるからぢやと思へば、忝けなくて、忝けなくて——」

「いえいえ。」と、乙御前の母はいふ。

「わたくしには、夢のやうで、あまりのお優遇に、身の怖れさへ思はれてなりませぬ。尼御前さま、わたくしは、ほんとに、そんなにまで仰せられる女でござりませうか？　波闍波提夫人にはなけねど、もしや、心の底より、まだ解らぬものがあつて、師僧の御名を汚し、法華經を傷つけはいたさぬかと、空怖ろしうて、空怖ろしうて——」

まことに、彼女は小刻みに、ぶるぶる慄へてゐる。

「何が、さて、何がさて。」と、千日尼は優しくいひなだめるのに、骨さへ折つてをる。

「一の谷の祖母さま御聽きやつたら、どのやうに振舞はれることか——今宵から客人ぢやと申されるであらうよ。」

ある日、日蓮は、

「それよ、そのことは、いかがはするぞ。」と、突然日興にきかれた。

「乙御前の母は、來しをりは、日眼女より鳥目を貰うて來たと申したぞ。歸らうをりには、つかはすほどあるか？」

日興も、それには、ハタと困じた。日頂が歸つてから直に、下總の富木どのから金子は來た。四條金吾も捧げられはしたが、この島では、布施を奉つるものは幾人もない。つい先日は、阿佛坊と千日尼の夫妻よりほかなかつたのに、求める品は、塚原の法師と見れば、法外な價をむさぼりとらうとしてゐる。春は來ても、雪の解けるは遲々としてゐて、錢の消ゆるのは目に見えてゐるのだつた。

「尼たちは、今日も一の谷か？」

さう仰せられたので、日興は、ふと算段を思ひついた。

阿佛坊がさきだちで、子を背にした乙御前の母も、千日尼に連れられて、一の谷に建つ小堂へ日毎に、基礎工事に出かけるそれを思ひだすと、

「お案じ遊ばされますな。旅用の工夫ございます。」と、日興は、
「近藤どの御祖母から拜借いたしませう。準備のありましたをりに、借はかへすことに申して相談つかまつつて乏しくないほど調へつかはしますでございませう。」
「清久の家では、日蓮の負債にいたすと申さば、用立くだされるかなう。」
「もとよりでございませうが、日妙どのが、鎌倉へ、立歸られますかどうか、それが――」
といふと、日蓮は、「いや、鎌倉には合戰もあらうなれど、日蓮門家の人々の由緣に、失せつるものも多からう、それらの者の名をも書き止めて、消息つかまつるやうにとの、傳言もきかせおいた。」と言ひつゝ、最蓮坊上人御返事、桑門日蓮と認めた文を、日興に渡して、「それを封んじて熊王にもたせつかはせ。」と申される日付は、文永九年二月廿日と、今日の日を記されてある。
最蓮坊には、つい十日ほど前にも、生死一大事血脈鈔についての御書もあつたので、日興は、それを封んずる前に、願はくは披見をゆるされたいと、他意なくきこえあげるのだつた。
それは、最蓮ほどの學僧が問ふことであり、それに答へられるものであるからには、日興が内見を願ふのは尤もなことなので、
「さうぢや、讀みおくがよい。」
と、直に許された。最蓮は、比叡山延曆寺の學僧で、叡山の忌違に觸れ、佐渡へ流されて來てゐたが、鎌倉の日蓮を崇拜してゐた僧で、されば、いとよき折ぞと過日の念佛僧たちの押寄せに

は、聽聞の一人とまぎれてゐたのだつた。
師の禮をとつて、最蓮が訪ねて來たをりの、日蓮の悅びも大きかつた。病弱ではあるが、天台僧である最蓮の學識は深く、しかも、叡山を追はれてゐる最蓮は、日蓮の求める最蓮であり、また、日蓮は最蓮がたづね求めてゐた法の父であつたのが、偶然、かやうな、流謫な地であつたので、その欣びは別だつた。
しかも日蓮は、日蓮門家にとつて、鎌倉に殘る日昭と、この最蓮とは、他の法弟よりは、一格上の、自分に代つて教へてくれるものと思つた。日蓮さきに赦免とならば、最蓮のために赦されるやうにしよう、最蓮さきに許されなば、日蓮のために、宥免を乞へとまで、一見心あいの、親母しい仲となつた人からの質疑に答へる文なので、
「おゝ、これは！」
と、うやうやしく押開き、眼を通した日興は、その一字一言を、しかと記憶しようとするやうに、凝と烙けつくやうに讀入つた。――草木成佛口決――草木成佛口決――
草にも木にもなる佛――草木成佛とは、有情非情いづれとや――、と、口のうちにくりかへした。
鏡のやうに光る月夜の白雪を踏んで、病み疲れたる沙門が、この塚原三昧堂に、杖に縋つて訪づれて來たをりのことを、日興は、最蓮法師の御返書を拜見しながら、ふと思ひ起すのだつた。

——叡山にありし蓮長法師こそ當今鎌倉にての日蓮よとの風聞に渇しながらも法縁つたなくてまみえ奉つる機を得ずて候ところ、いかなる宿縁にや、かゝる、北海の孤島にて接し奉ることのありとは、最蓮よくも生きてありつるぞと存じはべる——

と、その沙門は申されたが、全く有がたき御宿世の縁である。天台の學匠最蓮どのこの佐渡に時も時、折もをり、よくもお出でくだされて、種々の質疑に、深奥なる義を說きいださせたまふ對人とおなりくださるる——

鎌倉におはす、辨阿闍梨日昭どのも、叡山天台の碩學、いまこの最蓮御坊の御歸伏は、上行靈覺の上人に、本門の妙義開詮の、重大なる御役をもちて現はれさせられた、大事の御方ぞと思ひつつ、御返しの文を讀みもてゆくと——

——問ひて云く、草木成佛とは有情非情のうちいづれぞや。答へていはく、草木成佛とは非情の成佛なり。問ひて云く、情非情ともに今經に於て成佛するか。答へて、爾也。問ふ、證文如何。答へて、妙法蓮華經是れ也、妙法とは有情の成佛、蓮華とは非情の成佛なり。有情は生の成佛、非情は死の成佛、生死の成佛といふが有情非情の成佛の事なり。

——口決に云く。草にも木にも成る佛——この意は、草木にも成りたまへる壽量品の釋尊なり。

——我等一身の上には有情非情具足せり、爪と髮とは非情なり、きるにいたまず。其外は有情なれば切るにいたみ苦しむなり。一身所具の有情非情、十如是因果（物質、精神）の二法を具

足せり。衆生世間、五陰世間、國土世間、此三世間有情非情なり。

——當世の習ひそこなひの學者ゆめにも知らざる法門なり。——されば、草木成佛は死人の成佛なり、此等の法門は知る人すくなきなり。所詮、妙法蓮華をしらざる故に迷ふところの法門なり。敢て忘失することなかれ——

と書かれてある。

敢て忘失することなかれと、胸のうちにて繰返し繰返す日興は、この諭しの言葉を、わがこととして服してゐる。

「解つたか。」

と、日蓮にたづねられると、日興は、「如來祕密神通之力。」

と、壽量品の、總提の句を、口のうちにとなへながら、今日にも、壽量品を習ひかへすべきだと思つて、「はい。」と、うやうやしく。

「最蓮御坊によつて、拙僧ごときものまで、この深義をいただきましてござります。」

「さればよ、天台にては、內々承知にてありながらこれをひろめず、一色一香無非中道と罵り、惑耳驚心とささやき、妙法蓮華といふべきを、圓頓止觀と代へさせ本門の事行の唱題を弘めず、迹門の理行、止觀の觀心を弘めた。」

「わかりましてござります。」

日興は、この前の、最蓮に與へられた、生死一大事血脈鈔の、夫れ生死一大事の血脈とは、所謂妙法蓮華經これなり。その故は、釋迦、多寶の二佛、寶塔の中にしかと、上行菩薩に讓りたまひし、この妙法蓮華經の五字、過去遠々劫より已來、寸時も離れざる血脈なり。妙は死、法は生なり。この生死の二法が十界の當體。また、これを當體蓮華とも云ふなり。傳教大師いはく、生死の二法は一心の妙用、有無の二道は本覺の眞德と。天地、陰陽、日月五星、地獄乃至佛果、生死の二法に非ずといふことなし。是のごとく生死も唯、妙法蓮華經の生死なり。然れば、久遠實成の釋尊と、皆成佛道の法華經と、我等衆生との三ッ、全く差別なく、妙法蓮華經と解りて唱へ奉る處を、生死一大事の血脈とぞいふ。この事日蓮が弟子檀那の肝要。法華經を持つといふは是れなり。とあつたことも、頭のなかで咀嚼しようとしてゐる——

杉木立に圍まれて、山櫻が、雲のやうにたなびいてゐる丘に、法華經講莚の小堂は竣工した。春四月、鶯はしきりに鳴いてゐる。朝夕にそれの妙音は淸寂な幽境におとづれ、法の師讀經せぬひまは、鶯がホウ、ホケキヤウを申してゐる。

開目鈔の御筆作は、もはや下卷に進みおはしますと、日興は鎌倉の人々に、新居の朝夕を報じるとき告げた。

雁が歸つてくるにつれ、燕が上つてゆくにつけ、佐渡と鎌倉との往來は繁くなつてゆく。他方

からの信者檀那の見舞も多く、それにつれ法弟たちは師のもとに爭つて來るので、日興と熊王は阿佛坊たちと入費がなか〳〵追ひつかぬを、困る〳〵と話合ながら喜んでゐる。

それにつれて、佐渡、越後の念佛者達は、日蓮がこの儘在島したならば、念佛の寺は一軒もなくなつて、みな法蓮華經を唱へるやうになるであらうと、日蓮撲滅をはからねばならぬといきまいた。勿論、鎌倉との聯絡はこれも頻繁だ。賈の御教書といふやうなものも幾度か來て、幾度か觸れ出した。

信ずればこそ怖れるのだ。塚原三昧堂で問答の時、鄕官本間殿を呼返して、鎌倉に合戰ありといはれたが、全くだつた。あれでは、たしかに、あの妖僧のいふことは信實であらう。法華經を信ぜずば、この島も他國より第一番に攻寄せられ、安穩にはあるまじと申されたが、まさに、さもあらん——と、いふのが、島民の聲となつて來たのだ。

「日蓮御坊といふは、神通自在力の御方ぢや。長ろしいことではないか、あゝしたお方を、殺さうの、乾ぼしにしようの、いたしたのは！　さういふ、おそろしいことを謀らんだ、念佛者を養つたならば、こちら共にも善事はないぞ。持齋者を供養するな——」

と、いふやうにさへなつてゐたのだ。

かうしてゐては、われらが飢死してしまふだらう。といふ念佛者の案じが、またしても、日蓮を殺してしまはなければとなつていつた。

前には、念佛を惡口する惡僧を殺せ――であつたのが、今度は、自分たちの糊口から殺してしまへになつて來た。

だが、この、上行の菩薩のお仕事は、着々と、日を追つて進まれる。四月は月はじめの移轉、開目鈔の筆を置かれると、すぐさま本尊鈔の述作にうつり、最蓮坊への受職灌頂が行はれるのだつた。

妙覺の智水を頂に灌いで、本師釋尊より、本化の上行日蓮への內證相承を、今、末法の大導師日蓮より、妙覺成就した最蓮坊へ、受戒、受法、受職を傳ふるといふ職位を傳ふる灌頂の式なのだ。

佛陀の生れさせ給へる天笠にては、王の職位を受くる時灌頂の儀式あり、佛は法王なる故、法王の位に昇るべきものに灌頂の古式があつた。今、一切衆生に信ある者に灌頂し、法門を弘めることは、受くるものにも授けるものにも、その法悅は深大だ。

――貴邊に去る二月の頃より、大事の法門を敎へ奉りぬ。結句は、卯月八日夜半寅時、妙法の本圓戒をもつて、受職灌頂せしめ奉る者なり。この受職を得る人、いかでか現世なりとも妙覺を成ぜざらんや――

と、最蓮坊へ御文をなされたので、新しい御堂に安置した釋尊の御像の前には、まづ第一に開目鈔が奉つられ、本尊鈔が供へられ、最蓮受職灌頂の式が行はれる喜びが續いた――

石田の鄕一の谷の新居は、塚原の雪に埋められた法の種が、今や花咲き、開き、實るにせはしき日々となつて行つた。人々はせはしけに、欣ばしけに立働いてゐる――

妙音

阿佛坊は、籬のもとに、細かい草の芽を植ゑてゐたが、腰を伸すと、小手をかざして、この山麓の丘からは、眼の下に見渡される、眞野の入江の風光を凝と眺めてゐた。

「いかゞなされた。」

ふと、見返ると、去年の暮に、塚原を立つた日向が歸つて來てゐる。笑顏で佇んでゐるので、

「おゝ、歸られたか?」

阿佛坊の面の淋しげな色は、すぐに晴れわたつて、

「あまり靜寂なので、ふと、昔のことを思ふてゐた。」

と、入江の波靜に、春光をたたむ風景を指さして、あれが戀が浦ぢやと敎へた。

「遠藤爲盛どのは、烏帽子着て、千日尼はまだ、うら若い、美しい都上萬で、彼處から上陸なされたのぢやな、お上は、御輿に召させられて――」

と、日向が阿佛坊の眼を覗くと、阿佛坊の眼には、涙がにじんでゐた。

「久しう思ひ出さなんだが、上人の御案内をして、御陵に詣でたり、都忘れと御名告ありし菊の芽を摘んで來たりいたしたので、ふと、その昔のことを思出しての。」

阿佛坊は、孫のやうな日向へ、涙を見られたのを恥しさうにしたが、

「上人でさへ、御墓に詣でさせられたときは、御涙にくれさせたまふたものな。」

と、その時、法華經を奉られた、莊嚴な讀經の聲を、再び耳に繰返して、日蓮大導師、日興、最蓮。かたじけなくもわれ等夫妻の和した聲も、ともに山彦したことを思ふのだつた。

「帝も山櫻を好ませられ、上人も山櫻をこよなうお愛しみである。——おゝ、おゝ、咲いたわ、咲いたわ。何處を見廻しても、漂ふ紅の雲のやうぢや。」

阿佛坊は自分ひとり浸つてゐた感傷からやつと離れて、

「どうぢや。また、すぐ歸るのか?」と日向が歸されるとき泣いたのを、詞戯つた。

「いや、ほどなく日頂も來る。日持も來る。今年は、小僧どもを此處へおくと、富木どのへの御消息にあつたさうだから、みんな來るぞ。」

「さう來ては、熊王と伯耆房が、やりくりに困るであらう。」

「いや、困らぬ。草の芽も、山のものも、これからはうんと出てくる。御坊が植ゑられたこれも食ふぞ。」

「これは堪らぬ。」

と、阿佛坊はまた植付けはじめた。日向は水を運んで來て、傍から手傳つてやりながら、

「筑後房は、牢の中からでも、もうこれで二度來てゐられる。三月に一度は、屹度參上する所存ぢやと申されてをる。強いではないか。ぢやからわしも、こんど強くして、なかなか動かぬ氣ぢや。」

若い日向の手傳ひの方が、はかどつて、さつさと菊の芽は土に挿されてゆく。その手振りを阿佛坊は、田植のやうぢやと笑つて、「よう植はつた。これが咲くころには、霜に匂ふて、一段の風情であらう。これが都忘れと仰せられた山菊を、御所の跡から根分けして來たのぢやよ。」

「それは、それは。」

さうきくと日向は、それから挿す芽を、一本一本頂いて、題目を唱へては土におろすのを、阿佛坊は手をやめて見てゐた。

——鶯が鳴いてゐる。

「おゝ、此處の祖母尼と、千日尼が連れだつて參つた。」

と、土まみれの手をかざしていふ阿佛坊に、「どれ。」と伸上つて見た日向は、にこりとして、

「尼御たちに、よいことを知らせてあげよう。」と急いで懐に手を入れた。

千日尼が、近藤清久の祖母の手をとつて、睦じう語らひながら來かかる前へ、日向は駈けていつて、

「尼御前、只今歸りました。日頂よりも、一足さきになりました。」
「おゝ、おゝ、おゝ、日向御坊か、すこし見ぬ間に大きうなつて――」
年齡こそ一歳增したれ、去年の暮と今日とでは、四月ほどにしか、別れてゐぬのに、さも成長したかのやうに見上げる尼を、十九になつた日向も孫のやうな氣持ちで、
「こんなよい場處に、御堂を建立くだされた、一の谷殿のお祖母は、こなたさまでございますか？」
と、手をとつた老女を見た。
「おいの、このお方でござる。」
千日尼が答へるよりも前に、清久の祖母は顏中に皺をよせ、眼を糸のやうにして、ホクホクと頷いてゐるのだつた。
「尼御たちは、佛母、摩耶夫人のやうな、お方でござる。」
と、日向は嬉しくてたまらぬやうに、
「わたくしは、尼御たちに、何も御禮が出來ませぬゆゑ、よい事をお知らせ申します。」
と、懷からさぐりだした書きつけを開けて、差上げるやうにして讀み出した。
「一、女人と妙と釋尊と一體の事――」
「ま、ま、お待ちやれ。」と千日尼は押止めて、

「そのやうな勿體ないこと――それは、何人の仰せられたことでござる。」
「師僧の仰せられたを、忘れぬやう書きつけておいたのでございます。」
と、日向が、讀みつゞけやうとすると、
「立つてゐて承はれることではござらぬ。其處へ、其處へ――」
と、千日尼が眼で知らせるところには、柔らかい春の小草が敷き展べられてあつた。清久の祖母をその上に跪座かせると、千日尼も傍らに坐つて、
「さ、さ、仰せられてくだされ。」と、二人の老いたる尼たちは、うやうやしくぬかづくのだつた。
日向は嘹々たる聲に、
「仰せに云く、女人は子を出生す、この出生の子、また子を出生す。此の如く展轉して無數の子を出生せり。此の出生の子には善子もあり、惡子もあり、端嚴美麗の子もあり醜陋の子もあり、長のひくき子もあり、大なる子もあり、男子もあり、女子もあり。――所詮、妙の一字より萬法は出生せり。地獄もあり、餓鬼もあり、乃至佛界もあり、實敎もあり、善もあり、惡もあり、諸法を出生せり。また、釋迦一佛の御身より、一切の佛菩薩等悉く出生せり。阿彌陀、藥師、大日等は、悉く釋尊の一月より、萬水に浮ぶ所の萬影なり。然らば、女人と妙と、釋尊との三、全く不同無きなり。妙藥大師の云く、妙卽三千、三千卽法と。提婆品に云く、有一寶珠價直三千、大千世界是れなりと――」

二人の老尼は、しばし、何事も言へぬやうに、ひれ伏してゐたが、千日尼がうちふるへて、
「信濃なる、田毎の月の實相は――」
上の句を讀みかけても、清久の祖母が平日のやうにすぐ下の句をつけて答へぬので、振りかへつてみると、祖母の尼は、くた〳〵と、腰が脱けたやうになつてしまつて手離しで、おろ〳〵と泣いてゐる。
「あ！」
と、驚いた千日尼が、抱きあげかけると、身體が伸びてきて、ずるずると坐つてしまつて、
「わらはは、このまゝで、このままで、死ぬが本望ぢや、そのお小僧は、世尊の、お使ひのやうに見えさせられる――」と、顎のつがひさへ反れたやうな、雪佛が崩れ解けてゆくやうなさまになつてゐる。千日尼は、それも、よい往生かと思ひもしたが、日向が氣轉で、「明日、佛誕の良日に、灌頂の御式があり、また、宗門の本義の、曼荼羅の御染筆もこれからござるのに、それにおつらなりなされずば、お遺り惜しくはござらぬか――」
と大聲に呼ぶと、おゝ、おゝ！　と強かりと答へた。
「おゝ、おゝ、それまで、生きませう。」
と、うめき出すと、それにつれて、清久の祖母の尼の顏は、だん〳〵に引きしまつてきた。
「これから、この御堂で、有難い御開顯ばかりが引きつづきませう。お生れなされたる甲斐には

その御法座につらならねば――」と千日尼が力をつけると、おゝ、おゝ、おゝ、と、千日尼と日向を兩杖のやうにして、ぶらさがるやうに歩きだした。
鶯が鳴いてゐる――
麓が、時を今と、この山林に生れたのをよろこぶやうに、咽喉も裂けるばかりに鳴きかはしてゐる――清久の祖母は、天上界に生れ、極樂の道を歩むやうに、その妙音にひたりながら、ロうちで、このごろ習慣になつてゐる定題目を、めうほふれんげきやう、めうほふれんきやうと唱へた。
こゝでは、さうした法悅の日を、信者のものや法弟は頂いてゐるが、京、鎌倉では、二月からの動亂が引きつゞ、北條一門、一族のうちでも、打ちつ打たれつ、家臣を疑ひ、主を疑ひ、淺間しい戰塵の休むひまもないのだつた。
佐渡から歸るものには、由緣の者の戰死者の名を、申送りくるやうにと言ひやられるので、それ〳〵から告げて來て、この役の死歿者は日夕の供養追善をうけてゐるが、それよりも、人々の贈を冷させたのは、五月、蒙古からの來牒のことだつた。
「それ見よ、言はぬことではない。上人の申された通りだ。」
「いよ〳〵、他國侵逼難がせまつて來たぞ――日蓮の申したことは本當だつた。」
「蒙古は攻めて來るであらうか？」

これは、鎌倉の上下を驚愕させた。それと同時に、日蓮、日蓮、と呼ぶ名が、心ある人々の口に、頭に上るのだつた。それは、執權時宗にもさうであれば、あの平左衞門の胸にも響く。まして、大學三郎、宿屋光則、四條金吾の面々は申すに及ばず、時宗の大叔父北條彌源太は、それらの人々との交りのほかに、これも法華篤信者の武藏池上の兄弟、兄の右衞門太夫宗仲や、弟の兵衞志宗長とも懇親なので、さきつ年奉つられた安國論のことを、ひたと思ひ當り、信服しはじめた。

だが、尤も深く強く、日蓮の豫言的中に驚いたのは、本間重連で、彼はその時、身うちが顫へてやまなかつたのだ。

何もかもが——何もかもが、みんな日蓮法師の申された通りだ。それほどの聖人をわれは、どのやうに愁くいたしたか——と、心を噬んでは慚愧し、何とぞその身、及び一族の安穩であれと謝罪の意を折につけて洩らしてゐた。

勿論、佐渡へも蒙古の噂は傳はり、ひろまつて、島人は色をうしなつた。北より來れば、この島こそ荒され、よも安穩にはあらじと過る日、本間殿に、日蓮が申されたぞと、それを思出して驚々としてゐる。

しかし、一の谷の御堂では、他國侵逼難の豫言のあらはれについては、法弟たちが口にするさへ警しめられてゐる。日蓮はそのことについては、一言もいはない。曉に起きて深更に寢ね、

讀經、說法、筆作。上行開顯、上行所傳の要法にいそしまれ、本懷を現し、殘される典籍の充實に勵まれた。

さうした日がつゞいて、その年はたつた。文永十年六月に、再び蒙古は使節を送り、返書を時宗にせまつて來たが、佐渡では、ことにそのころ、上人は一室に籠りおはすことが多くなつたと、日蓮の日常の健康を案じるものもあつたが、これぞ、曼荼羅御染筆になる御精進と知る法弟たちは、その身をも、みな淸淨精進して、師の御苦勞を、いさゝかでもわける氣持ちでつゝしみ、行を勵んでゐた——

蓮の新葉におく露が、初秋の風に轉びまろび、朝毎に大きく結んでゆく頃になつた。

ある日の爽味、心魂をこめて筆をとる曼荼羅が、今一筆にて出來の機となつた日蓮は、硯の水を求めて障子を明け、寬の淸水を水滴に酌み入れやうとして、緩に立出たまゝ、早朝の氣を一杯に吸ひ込んでゐた。

と、間近で、老鶯の經讀む聲に、ふと目をやると、老鶯は蓮池の方へと飛んで、蓮葉の、廣葉湛へてゐる水晶の玉液に身をひたして、羽ばたきをして、サッと露をこぼした。

見れば、滿池の蓮葉は、空をうけてゐるくぼみに、みな水晶の露を宿してゐる。

日蓮は、靜に立下りて、その一珠を水滴にとり入れた。と、さも、それを讃美するやうに、

ホウ、ホケキヤウと鳴いて、老鶯は去りもやらず池邊をめぐつてゐる。

しばし、立止つたまゝ眺めやつてゐると、衣に觸れる朝風が清香を送つてくると共に、目につたのは、昨日まで堅かつた蕾が――白蓮の初花が、今や、ほころび、開きそめるところだつた。

――おゝ、蓮華の開花！

老鶯も法、法華經とぞ鳴くと思す折しも、曉闇と共に薄れゆく霧の中から人聲がして、蓮葉をサラサラと擦つて、小舟を操つてくるのが、池の中心に現はれて來た。

「おゝ、師僧がおはします。」と、棹さす方のがいつた。絃に手をかけてゐるものも振返つて、日蓮を認めると、「あゝ！」と、心から發しる、禮讃の聲をあげた。

全くこの朝の、この蓮池のみぎわに立たれた程の、崇高な威容の日蓮を、今までに拜したことがなかつたのだ。眞に生ける佛、生ける菩薩の現示と拜まれたので舟の中にゐたものは、その儘に合掌禮拜した。

棹をさしてゐるのは日向で、絃によつてゐたのは日朗だつた。日朗は、吉祥鷹の總卷より、師に親しみ、日夕奉仕してゐたが、壯烈、凛烈たる師を多く知れど、今朝のやうな尊さに接した驚きは、誠に大覺者世尊の、內證血脈直傳上行開化の菩薩にましますと、忝けなく思ふのだつた。

「何をいたしをる。」と、日蓮は愛法弟たちに聲をかけた。

「今日あたり、曼荼羅御開顯の御日どりと存じまして、蓮華が咲いてゐぬかと、供養のお花を探

しもとめてをります。」

と日朗が答へると、

「こゝにあるぞ。」と、水際に近よられるのを、

「あ、おあぶなうございます。」と、日朗は急いで押止め、「どうぞ、御大切に遊ばされて下さりませ。御かけがへのない御命でございます。何とぞ何とぞ法の道のため、さやうなことは遊ばされずに――」

「日朗の申すやうにばかりいたしをつては、わしは何も出來ぬよ。」

といひ乍らも、日蓮はそこに足をとめて、「筑後房よ。汝が曼荼羅を守護いたして、鎌倉へ屆けるがよいぞ。その用意にてをれよ。」と命じられた。

日朗は、白蓮華を折りとつて、清水を酌んである閼伽桶に、差入れやうとしたところであつたが、その白蓮華を手にした儘、お答にかへて合掌した。夜の明けそむる水の上には、紫の色が漂ひ、空には白光現はれ、日蓮の身邊には靈光が輪どるやうだつた。

この朝の太陽は、天地開闢當初の日の光と、同じ意氣をもつやうに、日朗たちには思はれた。

曼荼羅を顯はされることは、本門本尊の圖顯である。日蓮一生の御大事の御事業でもある。正宗の法開顯である、上行菩薩の使命である。

その、大曼荼羅供養に連なる結緣を、清久の祖母でなくとも、喜びとせぬものはない。

――曼荼羅は、法華經眞理の總括だ。

と、日朗と最蓮坊と日興とは語り合つてゐる。

誰がこゝを北海の孤島といふぞ、法緣あるものは、かくまで列なりをるよと、若き日向には、それすら嬉しかつたのだ。日朗もゐる、日興もゐる。日頂もゐる、日持もゐる。それから、あの最蓮御坊もをられる。阿佛房も千日尼も、祖母の尼もござられる――

こゝが、あの雪に埋め殺されようとした塚原と、同じ佐渡かと、思はないわけではゐられなかつた。

「曼荼羅は、一つの御圖式ではあるが、妙法の含み示す宇宙を、法華經を中心として、御括めあつたものであるやうに拜聞いたす。」

と、最蓮坊は阿佛坊たちに敎へて、「その心をもつて拜するがよい。」

みなが、その心をもつて、一心に法華經を唱和するとき、日蓮は携へ出でた、筆の乾いたばかりの大曼荼羅を御堂の正面にかけ展べられた。

南無妙法蓮華經を中心にして、諸佛、菩薩、如來を配置し、佛滅後二千二百二十餘年之間一閻浮提之內、未曾有之大曼荼羅也。滅後の顯示と、弘通の顯示を讃し、文永八年太歲辛未、九月十二日蒙御勘氣、被遠流佐渡國。同十年太歲癸酉七月八日、日蓮始圖之とある。

日ノ本の祖なる神を、中心の、妙法蓮華經のもとに現はし請じたのは、世界は統一ぞとの形示

でもあれば、國土草木世界成佛をも示し、悉皆成佛といふことであると、阿佛房たちにもわかるやうに差示された。

「もろ〳〵のものみな、妙法蓮華經の本源に歸還つて、本來の光にあふ。その姿を圖したのが、この曼荼羅と拜します。」と、最蓮が述べると、日蓮は、

「日蓮、いかなる不思議にて候やらん。龍樹、天親等、天台妙樂等だにも顯はし給はざる、大曼荼羅を、末法に入りて二百餘年の頃、はじめて法華弘通の旗印として顯はし奉ること、全く日蓮が自作にあらず。多寶塔中、大牟尼世尊分身の諸佛の御助力ありたる本尊である。されば、首題の五字は中央にかゝり、四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ、普賢文殊等、舍利弗、日蓮等座を屈し、日天、月天、第六天の魔王、龍王、阿修羅、その外不動愛染は南北の二方に陣をとり、惡逆の達多、愚痴の龍女一座を張り、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神、十羅刹女等。しかのみならず、日本國の守護神たる神々もましまし、雜衆等一人も洩れず、この御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明に照らされて、本有の尊形となる。これを今日より本尊と申し奉る。」と、曼荼羅の解を說き聽かせられるのだつた。

聽く人々の法の學びにこそ高下深淺はあれ、信は變らぬ人々とて、頭も上らぬ中に、祖母の尼は聲を立てゝ泣き喜ぶのだつた。

「忝けない御事でござります。御本尊曼荼羅の中に、今年今月、今日の日と、佐渡にてとの御筆